330
a
484

始

法學博士 福田德三 著

經濟學全集

第二集

國民經濟講話

第二分冊

廉刷版

330
484

1328

土地の固有性と資本性

以上説明致す如く、土地には不變性と可變性とがありまして、前者は土地のみにある性質でありますから、之を土地の固有性（略して土地性とも申します）と名けます。此の固有の不變性あるが爲めに土地は生産要素として特殊の性質を帶びて居ます。土地を資本と別物として特に之を觀察する必要のあるのは、此固有の不變性あるが爲めで、經濟學上常に土地を別個のものとして取扱ふのは此固有性があり、從つて土地の地代と云ふものは資本の利子や勞働の賃銀とは異なつた特色を有して居るからであります。何となれば、此固有性は不增不減のものでありまして人間の需要に順應することが出來ません、人間の方から順應して行く外ないからであります。之に反して土地の可變性は人間の需要に應じて之を殖やすことが出來ます。人間の知識が進み工夫が積む程之を多くするのであります。さて此の可變性のことを豐度と名けます、其故は農作物の收穫の度合は、此可變性の多少によつて左右せられるからであります。豐度は可變的のものであります。然し一定の豐度とは一定の土地に付て申すことで、土地を離れて豐度はありません。故に此意味から申せば豐度にも限りがあります、即ち如何に人間が工夫を凝らしても一定の面積の土地があるのでなければ其工夫を實現することが出來ません、然るに其面積は有限的・獨占的であります。此點

が豐度に離るゝ能はざる一の特性であります。乍併、一度一定の面積を占めさへすれば、人間の智慧は驚く可き程其豐度を增加します。但し人間が土地に加へる改良には永久なものと、一時的なものとあります。例へば排水・灌漑等は一度之を行へば永く繼續して有効でありますが、施肥や耕耘による改良は絶えず繰返さなければなりません。然し何れにしても人間が土地に加へた改良は、其土地と密着して仕舞つて離すことも出來ず、區別することも出來なくなります。

土地は一の資本なり

文明國現在の土地は天然其儘其固有性のみのものは殆んどありません。何れも著しく人力の加はつたものであります。此點から申せば、土地は皆人力の產物、人間勞働の結果で、資本であります。土地の可變性を一に土地の資本性とも申します、何となれば、皆人間努力の結果であつて、又た人間の努力によつて增減し得ること資本と全く同じであるからで、此れは土地の固有性とは丸で違つて寧ろ他の資本と同一であるからです。故に英國のマーシアル氏は、今日の土地の人力の結果たることは、工業的製品の或物例へば煉瓦の如きものよりも遙かに多しと申して居ります。煉瓦は土に人間の勞力を加へて出來た製品でありますが、其勞は之を幾百年以來耕地に加へられて居る人間の勞働に比すれば、誠に微少なものであり

ドルカリ・ドッヰヴデ
David Ricardo
(1772—1823)

まして、耕地の方が遙かに多く製品の資格を持つて居るのであります。今日に於ては、土地は其固有性よりも遙かに多く資本性によつて作用をなして居るので、土地の價格又は地代等は單に固有性に對する代價でなく、此の資本性に對する代價であります。而して今日の企業の立場から申せば、土地に對して拂ふ代價も、資本に對して拂ふ代價も、均しく費用でありまして、何等分つ所なき有樣であります。土地も資本も企業者に取つては生產要素で、代價を拂ひ契約によつて買ひ入れ借り入れると云ふ點は全く同一であります。

リカルドの土地論

英國の有名な經濟學者リカルド氏は、地代は土地の本來固有不可壞の力に對して拂ふ代價だと申して居ります。此れは事實に合しない論であります、土地の力は皆可變的のものであります。固有本來のものは面積あるのみであります。面積と地位とを除く外は、皆資本と同じく人力の產物です。然るにリカルド一度右の說を唱へてから、英國流の學者は皆之れに從ひ、今日でも未だ此誤つた考へは廢れません。從つて土地は資本とは全く別なものとして論じて居ります。此の誤りは十分正さなければなりません。今實際の事實に照して說明して見ませう。個人の營業でも會社の營業でも、土地は資本として取扱ひます。例へば

金澤硬質陶器製造會社を立てますときには、先づ土地を買てそれから工場を立てます、其の敷地は會社から言へば確に資本であります。貸借對照表に於ても資産明細書に於ても必ず之を資本として取扱ひます。此頃金澤に軌道會社が出來るさうですが、市内に電車を掛けるには土地が要ります。敷地として隨分多額の金を費して、土地を買はなければなりません、車庫を建るとしても車庫の敷地を買はなければなりません、此土地は皆資本であります。又た農家の經濟に於きましても土地は資本であります。土地を資本以外に驅逐して仕舞ふといふのは實際生活の事實と全く背馳する空談であります。

其の由來

扨然らば何故に英國のやうな實際的の國の經濟學に於て左樣なる空なことを主張したか、誠に不思議でありますが能く考へて見ますと、其には然る可き理由があるのです。英吉利は御承知の通り貴族政治の國でありまして、其貴族といふものは多く地主であります。英國の憲法政治は早く發達したには相違ありませんが、其は實は地主の貴族政治であります。只貴族が秘密政治をやりませんで公然議會に於て其權力を振つたのであります。英吉利の議會は詰り貴族が王樣を抑ゆる器械であつたのです。彼のマグナ・カルタ（大憲章）は、實は今日言ふ樣な憲法ではありません。あれは貴族が王樣に書かせた誓證文であります。貴族から言へば名譽ある大憲章ですが、天子樣から言へば降伏の證文です。世の中には色々の誓證文があります、我邦には天狗の誓證文とか河童の誓證文とか言傳へるものが方々にありますが、天子樣の誓證文を持て威張て居る所は英吉利であります。

英國の土貴族政治

此の貴族地主が英吉利の土地の半分以上を占めて居りましたから、自からそれが憲法の上にも現はれまして、地主の跋扈は甚だしいものでありました、私は之を土貴族時代と名けます。此時代には地主を抑へ樣といふ法律をイクラ出しても駄目でありました。

ハリングトンの財産均衡論

十七世紀の英國にジエームス・ハリングトンといふ政治哲學者が居りまして『Balance of property』（財産均衡説）と申すことを主張して云ふには、國の政體は畢竟財産の均衡によつて定められるものである。此に三種ある。一　國中の土地財産が唯一人の主權者のみに獨占せられる場合　二　少數の貴族の手に掌握せられる場合　三　國民の全體を通じて分配せられる場合是れである。第一の場合には專制政治となり、第

F. II, 27.

二の場合には貴族政治が行はれ、第三の場合には民主政治が行はれるものであると主張致しました。此はハリングトンが自分の時代の英國の國情を觀察して立てた說で、慥かに一部の眞理を得て居ります。英國は其國土の大部分が少數の貴族によつて掌握せられて居りますから、形式上は憲法政治民本政治の樣でありますが、其實質は貴族政治でありました。

英佛戰爭と地主政治

然るに十八世紀の終りに至つて英吉利は佛蘭西と大戰爭を致しました。其時恰も今日英吉利が經濟戰と號して獨逸の食道を絕てやらうと勉めて居ると同じ樣に、佛國のナポレオンは英國の糧道を絕て之を降服させやうと企てゝ、大陸封鎖と云ふことをやりました。其爲め英國は大變に弱りました、國內で需要する穀物は、皆英國の土地から作り出さなければならなくなつたのです。そこで地價が非常に上りました。ドンナ惡い土地卽ち豐度の乏しい土地でも已むを得ず之を耕しましたから、土地に對する需要が大いに增進して地代がドン〳〵高くなり、地主は萬歲でありました。國の爲には早く佛國に勝たなければなりませんが、地主達の懷中から申すと戰爭がいつ迄も續いて行く方が宜いといふ有樣でありました。今日の言葉で申せば土地成金が澤山出來たのであります。所が今より丁度百年前の千八百十五年に英吉利はとう〳〵ナポレオンに勝て仕舞ひまして、平和が成立しました、從つて大陸封鎖は解除せられました。ソコデ大陸から食糧品始め品物がドン〳〵英吉利へ這入つて來ることになりました。左樣なると穀物の値は下り、地價・地代は下つて收穫の少い土地を無理に耕す必要がなくなります。所が當時英國の議會には地主が大多數を占めて居りましたから、所謂多數黨の橫暴を働きまして、戰時中と同じ樣に地價地代を高くして置く爲めに、穀物條例と云ふ法律を作りまして大陸から穀物が這入ることを防ぎました。國民全體は善い迷惑を被つたものであります。戰の間は臥薪嘗膽で我慢しましたが戰に勝つた大戰勝國であり乍ら非常に高い麥を食はなければならぬといふのでは困つた話であります。於茲地主は社會の公敵・國民の公敵だといふ念が國民の間に强くなりました。然し地主は公然議會と云ふ機關で正々堂々とやるのでありますから、議會を改造しない限りは如何とも致し方がありません、地主派が議會に多數を占めて居つて、見よ、民望は我にあり抔と言つて居る間は仕方がありません。ソコデ千八百三十二年に選擧法の改正がありまして地主の利益を代表する者を著しく減じて、都會及商工業の利益を代表する者を著しく殖やすことになつたのですが、其迄は、國民全般の利益と議會に多數を占むる地主貴族の利益とは常に相反目して居つたのであります。リカルドの地代論は此の地主橫暴時代に之に反抗して出て來た學說であります。

リカルドは地主を敵視す

即ちリカルドの地代論は地主征伐論であります。彼は地主を社會の公敵・國民の敵と見たので、其の經濟論は常に地主を以て不倶戴天の仇と認める樣な態度を取つて居りました。之に反して彼は資本の忠實なる味方でありました。ソコデ土地と資本とを全く別の物として取扱つたのであります。彼が考へますには資本といふものは誠に必要なものである、土地も必要であるが、其は本來不可壞の力あるが爲めで地主が土地を持て居る爲めではない、地主は自分の働きによつて社會の進歩に何も寄與せずに、地代と云ふ報酬を受くるもので、社會一般の利益と地主の利益とは互に相反するものであると、此れから彼の有名な地代原則が出て參りました。其事は後に御話致します。

其說を承繼する英國派經濟學

然るに英國流の經濟學では此說を其儘に祖述しまして、リカルドの地代論なるものは大なる權威あるものと認られて居ります。我邦でも英國流の經濟學否佛國流獨逸流の經濟學を祖述する人でも、地代論に就ては未だ大部分リカルド說を採用して居ります。從つて何時も地主を向側へ廻して、動もすると地主退治論を繰返へします。故田口博士の地租論の如き其著しい例であります

地主本位の米價調節論

其反對に我邦の議會は未だ地主黨若くは地主の利益に抗つては困る人々が多數を占めて居りますから機會さへあれば地主の利益になる樣な事を主張します。此頃問題となつて居る米價調節論の如き其であります。今米價が安いから地主黨の政治家や學者は米價調節の必要を唱へますが、其は畢竟米が安くては地主が困るからです。見て居て御覽なさい今に米價が屹度高くなります。歐洲戰の影響で我邦は未曾有の好景氣です、殊に在外正貨が段々殖て行きまして之を引當にドン〳〵兌換券を發行しますから、通貨が膨脹して物價がドン〳〵上るに相違ありません、而して米の値段も恐らく餘程高くなるでせう。其時です、今米價調節を唱へて我々は公平な論をして居るのである、決して地主本位の論をして居るのでないと云つて居る學者や政治家が米價が高過ぎるから之を引下げる樣に調節しろと主張したり運動したりするでせうか如何か。私は斷言します、其時は彼等は米價の高いのを見て見ぬ振りして調節運動をやりますまい。是彼等は國利民福を口實にして實は地主の利益を圖るに外ならないので地方の選擧民への御土產に過ぎないのです。我邦では德川幕府時代に米價調節の爲めに隨分色々なことをやりました、コレハ武士は米で秩祿を貰

ひますから米の價が下つては困るからですし、又た自足的國家經濟の時代で農民が國民の大多數を占めて居たからで、今日の日本とは大に趣が異ひます。其れでも幕府としては又た餘り價が上つては國民一般が困りますから、又之を抑へる必要も感じ、或は上げて見たり或は下げて見たり、始終色々なことをして居りましたが終に成効しませんでした。況んや今日の日本に於ては迚も駄目な話であります。大正五年末迫記。今日は既に申した通りに米價が上りましたが、調節論者は默つて居ります、私の豫言は中りました。

地租經減論

右と同じ樣に我邦の政治家は他に政治問題が少くなると屹度地租輕減論を繰返します。我邦の芝居では少し入りがなくなつたり外に適當の外題がないと忠臣藏の芝居を打ちさへすれば必ず相當の入りがあるものだソウです。地租輕減論は我邦の政治論客の忠臣藏です、此さへ唱へて居れば先以て安心なのです。ソコデ田口博士の如き學者は益々英國經濟學流の地主征伐論を唱へて之に對抗せられました。私共の考へではコレハ何れも偏して居り、且つ誤つて居ります。私共は地主の跋扈には極力反對すると共に、又た英國流の地主征伐資本家擁護の經濟論にも反對であります。

土地には本來不可壞の力なるものなし

リカルドは土地といふものには本來固有破る可からざる力がある、此力に對して支拂ふ所の對價が地代であると申しますが、土地に本來固有破る可からざる力などはありませぬ。土地の力即ち豐度は人力を以て變られるものなることは御話致した通りであります。今日文明國に於ける土地は古來數百年來粒々辛苦して肥料をやつて善いものにした製造物であります。天然野生の儘の土地といふものはありません。從つてリカルドの言ふ本來固有破る可からざる力なるものは斷じてないのであります。

面積と地位のみ不變的なり

併し乍ら土地の面積はどうすることも出來ぬ不變的のものであります。これだけが經濟上に於ける土地の特別の性質です。地球の表面は殖すことは出來ませぬ。國の領土は別です、我邦の領土は明治の初年から今日迄大變に殖えて居ります。然し世界全體の面積は變りはありません。面積は人力を以てどうすることも出來ないもので、而も限られたものであるといふことが土地をして特別なものたらしめます、從つて經濟學に於ては土地を資本と分つて特別に取扱ふ必要があるのです。而して面積と共に氣候も人間の力を超越するものです。金澤地方は日本海に面した地位にあります、從つて其特殊の氣候をどうしても免れる事は出來ません。之を北海道の氣候にしよう臺灣の氣候にしようと思つても出來ませぬ。各地とも皆左樣

であります。臺灣では砂糖が澤山出來ますが風が強くて困ります、所が風に對して強い甘蔗は色々の病氣に罹り易く、病氣に罹らぬ甘蔗は極く風に弱いので困つて居ます。總て善いといふものは中々ありません。

有限と無限の調和

斯くの如く面積及び氣候の上から見た土地は極めて有限的のものであります。然るに此土地の上に生れる人間は無限に增殖する傾向を持つて居ります、ソコデ斯く限りある土地を以て限りなき人間の欲望を滿さうとするから玆に問題が起るのです。此調和を圖ることが必要で、それが卽ち人間の經濟的活動の起る所以であります。經濟とは此の意味から言へば有限を以て無限に調和しよう、限りある土地を以て限りなき人間の增殖を支へて行かうとすることであると申しても大過はありません。

土地私有制度より來る困難

右に加へて今日の文明社會は既に申した通り何れも私有財産制度を認めて居ります、總ての土地は皆私有財産となつて居りまして、土地公有主義を取つて居る所はありません。故に只さへ足りないで都合を附け巧く之を調和することが困難でありますのに、私有財産制度の爲めに益々困難を加へます。澤山の土地を圍つて之を自分の所有地として居て無用の者入る可からずと威張つて居る人があります。其土地をどう使ふかといふと何もしない、それが田舍なら宜しいが大都會の土地の不足な所でやつて居ります。左樣かと思ふと一坪の土地も得られないで困る人が澤山居ります。田舍に行けば澤山の農耕地を地主が占領して居りまして、百姓は小作料を拂はなければ一反歩の土地も得られません。此くの如く今日に於ては土地は決して合理的に分配せられてありません、國民多數の利益を本位として土地財産の制が定まつて居るのではありません。昔から歷史的習慣的に發達して來た儘になつて居ります。

土地公有論

そこで土地公有論・土地國有論等と云ふ議論が起つて參ります。外の物は兎も角土地といふものは限りのあるものであるのに、其處へ持つて來て繩張をするのは宜しくないと申します。汽車に乘つて席が空いて居る時は身體を延ばして寢て居ても構はぬが、混雜して立つて居る人が大勢あるのに毛布を敷いて長々と寢て居るのは不都合千萬、公德を知らぬ人である、起きろと言つて掛合ても知らぬ顏をして居るコレハ宜敷ない、それと同じ樣に地主が自分の所には有り餘つて居るのに之を與へないのは不都合だと主張する人があるのです。ソコデ土地は國有にして國家が必要なものに之を與へろといふ議論を唱へるのであります

すが、それは今日の所では必竟出來ない相談、空論であります。

土地私有は普遍の大勢

土地公有制度は隨分例がありますが、何れも廢れて仕舞ひました。我邦の班田の制でも支那の井田法でも皆左樣であります。今日の文明國は何れも色々なことをやりましたが、詰り皆土地私有制度になつて仕舞ましたことは、恰も申合せでも致した樣であります。否未開民族の間にも土地私有制度が行はれて居ります。臺灣の蕃民の間でも、土地は大抵私有であります。文字も持たず、十以上の勘定の出來ない野蠻人まで土地を私有して居るのです。我邦班田の法は果して何れ丈け行はれたか分りませんが、段々廢れて仕舞つて所在に莊園が起り、終に封建制度となりました。支那の井田も色々な變遷を經ましたが矢張り皆私有になつて仕舞ひました。人間社會は敎へずして土地私有の制度を取ること、恰も敎へずして衣食の計を爲し男女の交りを結ぶのと殆んど同じ樣であります。此大勢に逆行することは出來ません。逆行してもホンの一時限りで直き元へ跡戻りをして仕舞ふのです。土地公有論は單に議論です實行の見込みは迚も立ちません。然し乍ら土地所有の有樣を今日の儘に放任して置いては宜しくないことは勿論であります。

土地自然增價稅のこと

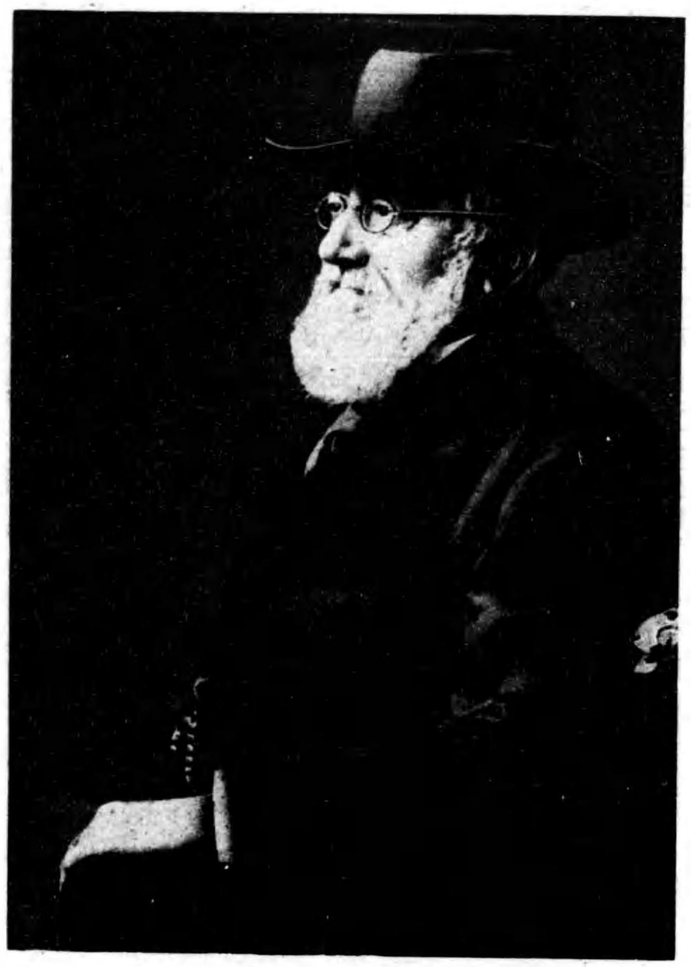
ソコデ先づ實際の問題として起つて來ましたのは、土地自然增價稅であります。土地は人力を加へた爲め其の價が上り地代が餘計取れるやうになるのは、畢竟人間の働きで土地の可變性・資本性を增すのでありますから差支はありませんが、土地の所有者が何の働きもしないのに、社會の進步の爲めに自然に地價が上るに對し、課稅して其增價の一部分を國家へ收めしむるのが土地自然增價稅であります。今日の文明國に於ては農村の耕地も都會の居宅地も著しく價が騰貴します。佛國の巴里では一平方米突の地價は、十五世紀には二參、十六世紀には五十六參、十七世紀には四法五十參、十八世紀には二十二法で、今日（大正五年）は百三十法に上つて居るソウです。而して土地と建物との總價額は、十六世紀が九千二百萬法、十七世紀が九億千萬法、十八世紀が二十九億法、近來は一百七十億法以上だと云ふ事です。又英國の倫敦では地價額千八百七十年には二千二百七十萬圓であつたのが數年前には五千四百五十萬圓に上つたと申します。紐育では千九百二年には四十七億五千萬弗の地價が千九百七年には六十二億四千萬弗に上つたソウです。我邦でも明治以來の地價の騰貴の著しいこと殊に東京や大阪などの地價の騰貴の驚く可き程なるは誰も皆知つて居る所であります。此等は地主銘々の働きで地力を增進した結果も加

はつて居るとは勿論でありますが、左樣でなく社會進歩の御蔭によるものゝ方が多くあります。殊に都會地は左樣であります。東京や大阪の地價の騰貴は殆んど全く社會の賜と甲ても差支ありますまい。土地增價稅は此社會進歩の賜たる自然增價の一部分を稅として國家に納めるのです。獨逸では可成以前から地方稅として行はれてゐましたが、英國では此頃になつて一足飛に國稅として課する樣になりました。但し最近に於ては其れは極めて不成績だとて異論を唱へる人もあります。我邦でも識者の間に其必要を唱へる人がありますから、或は他日其實施を見るやうになるかも知れません。

豐度增進の工夫

さて此の如く土地は一方に於て獨占物であり有限的のものでありますから、人間の工夫努力によつて其の可變性卽ち豐度を增すことを勉めなければなりません、是れ卽ち耕作方法の改善と土地改良とであります。次章に其事を少し御話致しませう。

第十九章　耕作法及土地改良



ノタンレブ・ヨル
Lujo Brentano
(1844—　)

粗放耕作より集中耕作へ

土地の豐度を增進するには耕作法が粗放法から集中法に進歩することが必要であります。粗放法と云ふのは土地を粗末に荒つぽく使ふことで、一定の收穫を得るのに廣い面積を要するのを云ひ、集中法とは人間の力を土地に集中して土地を丹精して使ふことで、一定の收穫を得るのに狹い面積で事足りるのを云ひます。言換へて申せば一定の面積から收穫が少しか取れないのが粗放法で、澤山取れるのが集中法であります。一定の面積に資本と勞働とを注ぐことが多ければ多い程其收穫は多くなり、少ければ少いほど收穫は少いのが通例です。故に粗放法とは一定の面積に資本と勞働とを少ししか注がない方法を云ひ、集中法とは之を多く注ぐ方法を云ふのです。集中法を更らに分けて資本的集中法と勞働的集中法とに致します。一定の面積に資本を多く注ぐ丈けで勞働の方は餘り注がないのが資本的集中法で、資本は少しで勞働を澤山費やすのを勞働的集中法と申します。我邦の農業は資本は寧ろ少くて勞働は所謂農家の粒々辛苦で澤山注ぎますから之を勞働的集中法と名づく可きであります。

集中耕作の二手段

集中耕作を行ふには二つの方法があります。即ち一は耕作法の進歩、二は土地改良であります。耕作法の進歩とは粗放的の耕作法から集中的の耕作法に移ることであります。今獨逸農政學者の通説によつて其種類を分り易く圖解して左に耕作法一覽圖を御覽に入れます。圖はブレンタノ先生の講義のときに用ひられるものを模寫して、少し手を入れたのであります。

狩獵と遊牧

土地利用法の一番粗放的なのは、狩獵計りで生活を立てる民族であります。彼等は獸類を飼養せず野生のものゝ跡を追つて轉輾し獸が見付かるまで彷徨するのですから、土地の面積を要することが最も大であります。進んで牧畜を覺え獸類を飼養する樣になると、土地の面積を要することが著しく少くなります。併し牧畜と云ふも、所謂遊牧で水草を逐ふて轉住するのでありますから中々廣い面積が要ります。而して狩獵民族でも遊牧民族でも、土地其ものに勞働を注ぐことは少しも致しません。故に此等は耕作法の中には入れられないのであります。

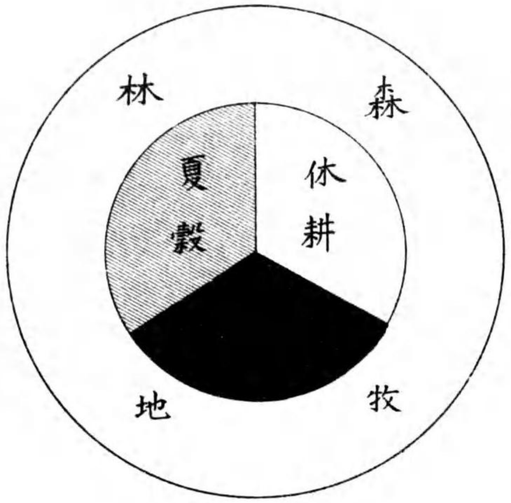
野生穀蔬耕作法

耕作法一覽圖

第一　野生穀蔬耕作法
（獨名　Wilde Feldgrasswirtschaft）

第二　三圃農法
（獨名　Dreifelderwirtschaft）

三割三分三厘　休耕地　六割六分六厘　穀作地
永久牧地あり



農業は右に較べると餘程集中的でありますが、其れでも人一人を養ふに要する土地の面積は非常に廣いものであります。農業耕作法の中最も廣い面積を要するもの、即ち最も粗放的なものは第一の野生穀蒭耕作法であります。之は一定の占有地を二部に分けます、一は牧地（並に天然森林）で、一は耕地ですが、前者の方が大々部分を占め耕地は一小部分に過ぎないのです。但し牧地とは永久的に判然と區劃されて居る譯ではありません。唯だ入用の穀物を植付ける丈けの土地を任意に取りまして、之に種を下すのであります。其土地の地力が盡きれば之を捨てゝ仕舞つて、更らに外の所を耕すのです。捨てた土地は荒れる儘に任せて、毫も之を顧みないのです。故に野生の草が生へ放題です、其所へ畜類を放牧します。是れ此耕作法を野生穀蒭耕作と名ける所以です。前に申した羅馬の大史家タキトスの見た時代の獨逸民族は此耕作法を營んで居つたので、タキトスは其事を記述して居ります。今日でも露西亞の南部地方では此法でやつて居ります。獨逸あたりでも南方山間僻郡の地にはあります。

燒田耕作並に燒沼地耕作

右の耕作法と同種類に屬する粗放的の方法に、燒田耕作（獨逸語でBrandwirtschaft又はBrennwirtschaftと申します）と燒沼地耕作（Moorbrennen と申します）と云ふ二つがあります。野生の立木を切

り倒して置いて數ケ月の後之に火を點けて燒きまして、其灰を其儘にして置いて雨の降るのを待ちます。雨が降つて灰が宜い加減地中に吸込まれた時分に種を下すのです。而して地力の盡きる迄耕作した後は之を捨てゝ仕舞つて、又外の所を燒くのです。之が燒田耕作です。我邦でも昔は火田・ヤキハタ等と稱へて此の燒田耕作が行はれました。ハタと云ふ字は火と田とを合はせて畑の字としたので、陸田は多くは燒田であつたものと見えます。朝鮮では反對に田は畑のことで、水田は特に『畓』と云ふ字を拵へて用ひて居るのは一寸面白いことです。燒沼地耕作と云ふは、沼地の表面を少し削り取つて引くり返して、乾かした上で火を點けて燒き、火が消えた灰の中へ種を蒔くのです。三年乃至八年續けて使つた跡は、十年乃至二十年休耕する必要があります。此法は獨逸の西北地方には所々に行はれて居ます。極めて粗放的な法で、火を點けるときに外へ延燒して大損害を招くこともあります。土地を極く荒つぽく使ふ耕作法です。朝鮮では久しい以前から火田の弊殊に火災に苦んで居まして、總督府は明治四十四年森林令を發布し「警察の許可なくして土地に火入を爲すことを得ず」と規定し、大正五年には內訓を發して、火田の整理及取締の勵行を勉めて居ます。

我邦に於ける燒畑の事

我邦に於ける燒畑に就て『地方凡例錄』に左の通り記してあります。御參考までに御覽に入れます。

燒畑と云は、里方にはなし、山中にあり、信州には尤多し。上州榛名山、赤城山抔之樣成所、畑地にては無レ之山之片岨之小柴萱草立候所を小柴萱原共燒而、一雨請、灰の濕りたる所え、蕎麥、麥、粟、稗等を蒔付、餘も不レ致、灰計に而生立たる作物故實入不レ宜、誠に夫食迄に仕付る事なり。是を切替畑共、薙畑ともいふ。石盛等至て低く、山畑よりも下々なり。併し蕎麥は燒畑之分、極上なり。夫故信州、上州山中の蕎麥格別宜、勿論年々同じ所に作付難レ成、當年仕付たる所來年は萱草立次第に致置、外之所を燒畑にして作物仕付、右之萱草立生たる場所、草立之樣子に隨ひ翌春、翌々春、燒畑にいたし、一ケ年、二ケ年替りに作付致故、切替畑と云。作之檢地請時、縱令ば十町之場所に而致檢地は、五町か三町ならでは作付不レ致、半分は一ケ年も二ケ年も休む故、十町之場所にて、五町か四町か致二高請一樣之場所は、餘歩も定法に不拘、格別餘計に差加る。或は右燒畑には山內木有場所、又は燒畑に可成場所共、一同に一山反相改め、山高に請置、燒畑に成場所は、作付致も有、是は切替畑とは不レ云、山高なり。又右體之場所無反別に而、山稼燒畑等之見込を以、山高計請る所もあり。（校正地方凡例錄、慶應二年觀古堂活版本卷二、三十二葉裏）

信州名物の蕎麥の由來談は面白いことゝ存じます。又た成形圖說に左の通りあります。

畑は火田の二合字なり。漢語鈔に火田、野老傳云、横截レ山作レ畠謂二之截幡一、其先燒後耕謂二之燒幡一燒レ幡の幡は所謂萬葉書也　按に截レ幡畠は白田を二合せし也。並に磨榊などの字例なり。和名鈔引二續搜神記一曰、江レ南白レ田種レ豆。白レ田一曰二陸田一。又晉書傳玄傳云、白田收至二十餘斛、水田收數十斛。是白田は水田にあらざるの證なり。今は水田にあらずして穀を種るを畑と稱し、菜園を畠と唱へり。むかしの畑といふものは、賤が燒かた山畑などありて、燒畑に兩樣あり、一は山林を伐開、その跡の草萊を焚、土を耡ずして、粟豆をうゝるを燒播といふ。肥後國五箇村などにて木場稗といふもの

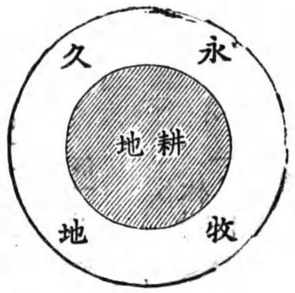
F. II, 28.

山林を燒たる跡にてうゝるの名なり　新撰字鏡に不レ耕蒔を夜伎麻伎又阿良麻伎といふ、劉禹錫畬田行に土レ山燒二臥木一下レ種暖二灰中一と見えたり。一は土に燃るものあり。其地草を四五寸計打反し、片端より火を放ば其土の燃ること、さながら薪のごとし。末までやけ過て、壌皆灰となるを疏通て、種を撒に燒たる土即肥となる。惣じて灰は火氣を燒しめたるものなればおのづから媛なる氣をふくみて、土に和ては、温潤の生氣を存て極ての肥養となるものなり。是亦火田に近し。されど燃土といふは稀に有ことなり。月令火耕水耨等のことあり、漢書云、燒レ草下レ水種レ稻、益生、因悉芟去、復下レ水灌レ水、草死獨稻長、所謂火耕水耨也。是は物種を害する草を燒て根をたやし、生草を熱湯にひたし、又は草を水に打たみて腐らかし、直に糞とするなり。下略（卷二、三十二葉）

永久牧地・耕地併存法

野生穀蒭耕作から進歩して出來た耕作法に二種あります。第一は永久牧地・耕地併存耕作法で、第二は調節穀蒭耕作法です。第一の方は第二よりは粗放的ですが、其れでも野生穀蒭耕作よりは餘程集中的になつて居ます。第一には耕地に充てずに、放牧地として其儘にして置く面積があるのに、第二には左樣なものはなく總て耕作に用ひるのですから、土地を利用する程度が餘程進んだものです。第一を圖に描けば左の通りです。

永久牧地・耕地併存法の圖　Feldersysteme mit ewiger Weide



圖の如くに永久牧地・耕地併存法では、占有地の全體を二部に分ちます。即ち一部は少しも手を付けず耕耘しないで單に放牧地として置くのです。畜類を飼ふのはつまり一定の飼料と藁とを、出來る丈け費用をかけずに肥料に變形する爲めなのです、空いた土地が有るから仕方がなく夏は茲に畜類を放牧し、兼て冬になつて入用な飼料となる枯草を取る丈けに使ふのです。又た耕地でも休耕して居る所は夏至までは同じく放牧地に充てます。草地は一度刈取る丈けで春と秋とに放牧地とします。森林も亦た牧場として用ひます。畜類は飼ひ放しですから牧畜の進歩は誠に遲々たるものであります。

他の一部は耕地です、此は數年繼續して耕作するのは稀で餘程地味の善い所即ち天然の豐度の高い所、又地位の適した所でなければなりません。左樣云ふ所で何年も續けて耕作するのを一圃農法と名けます。大抵は左樣は行かないで時々休耕して地力の自然に恢復するのを待たねばならないのです。四年に一遍休耕するのもあり、三年に一遍休耕するのもあり、二年に一遍休耕するのもあります。從つて四圃農法・三

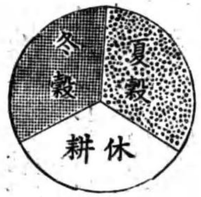
圃農法・二圃農法等と名けます。

三圃農法

其中一番廣く且つ長く行はれたのは三圃農法です。即ち土地を可成同じ大さに三分します。此一分を圃（獨逸語で「フェルダー」、「フルール」、「ツェルゲ」、「エッシュ」等種々名稱があります）と名けます。各圃は一を冬穀（小麥の類）作地、二を夏穀（大麥の類）作地、三を休耕地として年々輪番に取換へ三年に一度は休むのです。圖で示せば左の通りです。

第一年（第四年）

第二年（第五年）



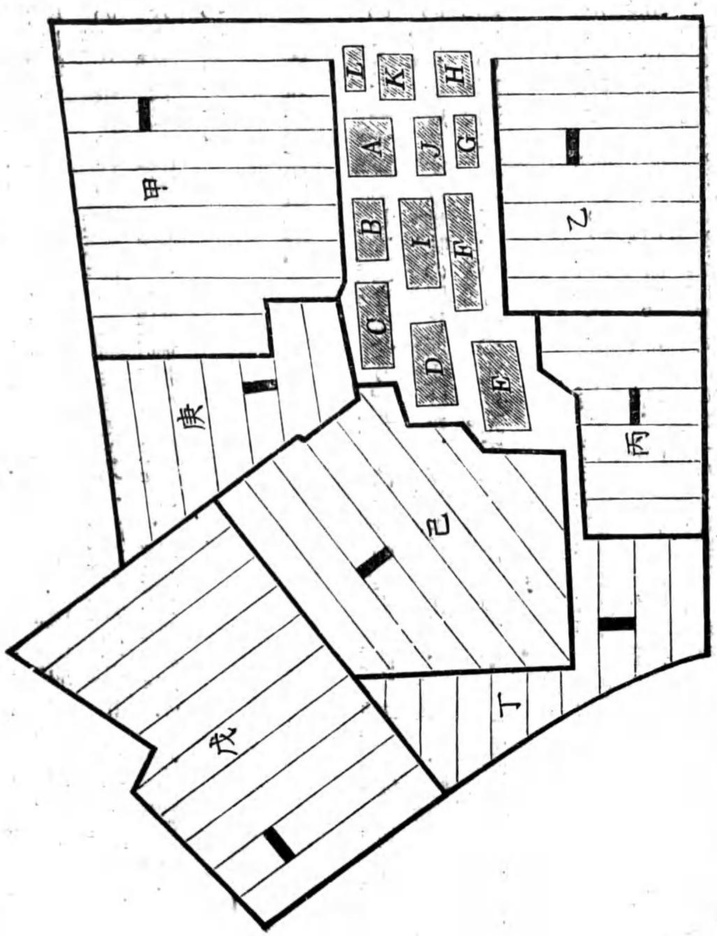
第三年（第六年）

獨逸民族は羅馬の移住屯田兵から此三圃農法を教つて始めたと傳へてあります。西暦八世紀頃には、此農法は獨逸中に擴がつて居ります。佛蘭西も墺太利も波蘭も、露西亞の開けた地方も、十八世紀の終否な十九世紀の始め頃までは、大抵此の三圃農法によつて農業を營んで居りました。封建時代には農民に何等の自由がなく又た交錯圃の制度や、強制耕作の制度や、牧場地役制度があつた爲め已むを得ず三圃農法をやつて居つたのです。

交錯圃の説明

茲で交錯圃のことを一寸説明して置きませう。昔しは一村の農夫の耕す土地を成る可く平等にする爲めに、一村全體の耕地を成る丈け地味の同じ所丈けを一區劃とし、其の一區劃を一村中の農夫の數に均分して、各農夫は總ての區劃に於いて一小分づつ丈け充てがはれたものです。一寸次頁の圖で説明して見ませう。

斜線で示したのは村で、無色のは耕地です。之を甲乙丙丁戊己庚等の區劃に分つとします。甲は甲、乙は乙で地味の其々に大抵同じな土地です。甲と乙、丙と丁とは地味が其々異ふのです。村に住んで居るA B等の百姓は、甲にも乙にも丙にも各區劃に於て均一の小區劃を貰ふのです。例へばAの貰ふ土地は黑色



で表はしたものゝ如くです。此くすればAもBもCも皆恨みつこなしに吾い土地も悪い土地も均等に貰へることになります。ソコデ各人の持つて居ろ土地は方々に散在して居ます（之を散圃と名づけます）と同時に、一つ區劃の中に多勢の人の土地が交錯して居ります。之を交錯圃と申すのです。此く多勢の人の持地が一つ所に混つて居ますから、銘々勝手に耕作することは出來ません、皆が一緒に同じ事を同時にやらなければなりません、其爲めに強制耕作と云ふことが起ります。又た散圃の爲めに他人の持地を通らなければ自分の持地へ耕作に行けません、殊に放牧の爲め他人所有の畜類の入ることを許さねばなりません、其の爲め牧場地役と云ふ事が起ります。猶本書の卷頭に南露西亞タウリア縣パフロフカ村散圃圖、英國ヒッチン村耕地圖、同散圃圖を掲げて置きました。御參考下されば一層明瞭となることゝ信じます。

三圃農法は粗放的

さて三圃農法は封建制度廢れた後も永く習慣の惰性の爲めに、跡を絶たずに行はれて居ましたが、此は耕作法としては未だ甚だ幼稚なものであります。野生穀類耕作に比ぶれば無論ズット集中的で、兎に角一の村があつて農夫は一定の住居を持ち、一定の秩序に從つて強制的に耕作に從事し、勞働も資本も土地に注ぐのであります。然し今日から見れば實に粗放的です。永久牧地と定められた土地は全く耕作に用ひな

いもので、精々全面積の二割位しか耕地になつて居らないのです。其耕地も二年耕しては一年づつ休ませるのです。肥料の質も悪く其施し方も甚だ不十分です。從つて收穫は未だ甚だ少いのです。

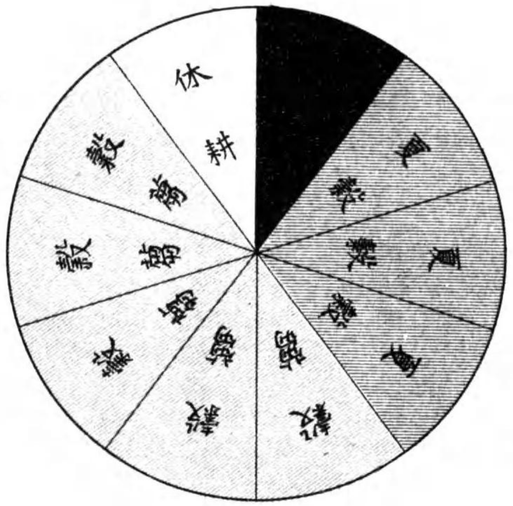
調節穀蒭耕作法

第二の調節穀蒭耕作法は、アルプス山地方では Egartenwirtschaft ホルシュタイン地方では Koppelwirtschaft メクレンブルヒ地方では Schlagwirtschaft 等と名けるそうです。此法は重に海岸地方か、山間の地方か、又は英國の樣に雨が多くて牧草が豐に育つ所に行はれます。此法は耕作の方は少し不定的になりますが、其代り草地の收穫が多いのです。此耕作法の特長は永久牧地として耕作に用ひない土地が無いと云ふ點であります。唯だ餘り濕氣の多い土地は之を草地に充て、傾斜の急な所や、出入に便利の悪い所丈けは森林として置きます、其他は皆耕耘するのです。其れには數年置きに穀作と草を生すのとを入れ違ひにやります。何れ丈け穀作に充て、何れだけ草を生すに用ひるかは一定して居ません。五分・七分・九分・十分・十五分色々あります。例へば圖に示した樣に一分は休耕、一分は冬穀、三分は夏穀、五分は草地等とします。三圃農法に比べれば穀作の外に牧畜に大に力を用ひるのであります。各區分は大抵土壘や垣根で仕切りをします。此は重に牧場用に使ふときに畜類が外へ逃げ出すのを防ぐ爲めです。區分を二つ

第三　調節穀蒭耕作法

（獨名 Geregelte Feldgrasswirtschaft）

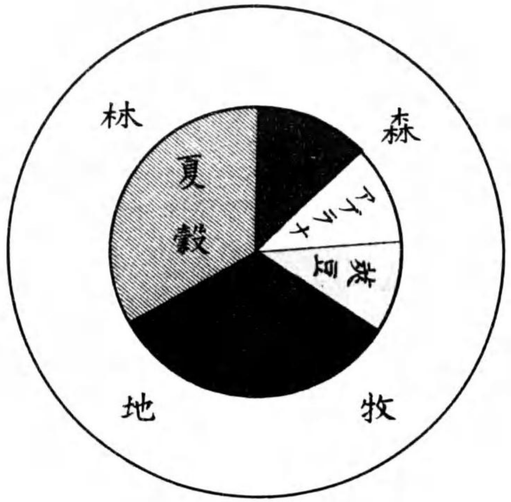
四割　穀作地　五割　野草（穀蒭）地
一割　休耕地　永久牧地無し



第四　改良三圃農法

（獨名 Verbesserte Dreifelderwirtschaft）

六割六分六厘　穀作地　一割一分一厘　ツメグサ作地
一割一分一厘　莢豆作地
一割一分一厘　蘋科植物（食根植物）作地
永久牧地あり



も三つも隣り合せて牧場用に供するときには、垣根に穴をあけて畜類がコッチから隣へ行ける樣にして置きます。此仕切は大抵垣根か又は土壘でしますが、時には土壘の上へ更らに生籬を作ります。此れは境界を一目瞭然たらしむる爲めです。英國あたりでは汽車の窓から見渡すと此の垣根や生籬が見えまして、成程茲は調節穀菊耕作法でやつて居る所だなと云ふことが直ぐ分ります。獨逸でもメクレンブルヒやホルシュタインでは左樣です。

稍々集中的となる

此の耕作法は餘程集中的です。永久牧場のない丈けでも大變に違ひます。又小區分を取換へ引換へ違つたものを植ゑますには、是非資本を多く注がねばなりませんし、秩序的・計劃的にやる必要が大でありまし

休耕地の利用

併し永久牧地はありませんが、休耕地がありまし。即ち其れ丈け未だ土地の利用が疎であるのです、故に、より集中的にしようと云ふには、此點を改めなければなりません。其第一着手は耕地に於て餘計に飼料

を生産して畜類を改良し、兼て良い肥料を作ることにあります。これをするに一番便な方法は、休耕地に飼料となる植物や食根植物や莢豆を植ゑるにあります。

改良三圃農法

此改良は先づ三圃耕作をやつて居る所に行はれました、之れが改良三圃農法であります。即ち第四圖に示した通り、全耕地を三圃に分つて、一圃を冬穀、一圃を夏穀とすることは從前の通りですが、第三圃の從來全く休耕して居た處を三分・六分・九分・十二分又は十五分しまして、其處に飼料植物・食根植物・莢豆等を色々入れ換へに植付けるのです。此改良は一方に休耕地と云ふものを全廢し、他方には『ツメグサ』(英語クローヴアー)の播種を普及し、兼て又た放牧の代りに畜類はチヤンと飼舍で飼養する樣になり、從つて從來の樣な強制耕作や牧場地役が無用に歸する事になつたので、農業上に一大光明時代を齎したものであります。獨逸ではシューバートと云ふ人が恰も我邦の二宮尊德翁の如くに此改良を卒先して天下に敎へて、農家の恩人と崇められて居ります。其改良の第一歩は『ツメグサ』の栽培から始めた故、此人を『ツメグサ畑のシューバート』と稱へて居ります。農民の恩人たると共に『ツメグサ』栽培によつて農畜に取つても恩人であります。

第五　改良穀蒭耕作法

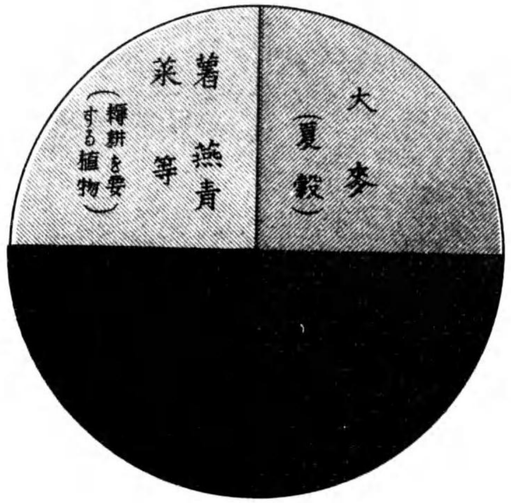
(獨名　Verbesserte Feldgrasswirtschaft)

四割　穀作地　三割五分　ツメグサ作地
一割　油菓作地　一割　莢豆作地
五分　休耕地　永久牧地無し

第六　輪栽農法

(獨名　Fruchtwechselwirtschaft)

五割　穀作地　二割五分　耨耕地
二割五分　ツメグサ作地　休耕地無し
永久牧地無し



改良穀菽耕作法

三圃農法に改良三圃農法が出來た樣に、穀菽耕作法にも改良穀菽耕作法と云ふのが起つて來ました、第五圖に示したは是です。獨逸では之を verbesserte Feldgrasswirtschaft 又は verbesserte Koppelwirtschaft と名づけて居ります。此は主として穀物以外に猶野菜とか莢豆とか所謂商業植物を栽培して穀作の範圍を擴張したのです。又飼草も野生に放任しないで、『ツメグサ』を植付けて善い飼料を作り出します。

輪栽農法

改良三圃農法も改良穀菽耕作法も、更に一歩進むと、第六圖に示した輪栽農法となります。英語で之を Rotation of Crops と云ひ獨逸語では Fruchtwechselwirtschaft と申します。此法には休耕地と云ふものは全く存しません。休耕地と穀作地と交代する必要も亦ありませんで、其代りに穀作と簇葉植物卽ち莢豆・飼草・食根植物・商業植物等を交代に植付けます。其順は同一又は似寄つたものを續けて植ない樣にします。畢竟同一又は似寄つたものは地中から同一の養分を吸取りますから、之を續けて植ゑると地力が早く盡きますから、成る丈け種類の異つたものをり換へて植ゑて、地力が恢復するを得る樣にするので

す。種類が異へば地中から吸收する養分も異ひますから、前の植物が吸はないで殘してあるものを吸ひ、前の植物が吸取つたものを續けて吸取らないのです。否前の植物の爲に吸取られて減つた養分は、却つて後の植物が之を地中に返すことがあります。かく植ゑるものを巧く輪番に換へるによりて、自然に地力を恢復させて、休耕の必要のない樣にするのです。又『ツメグサ』や飼草は根を張るものですから、軟か過ぎる土地を硬くする力を持つて居り、又た窒素を供給して土地を肥やします。蕎麥は雜草の種を亡ぼす力を持つて居ります。馬鈴薯や莢豆は土壤を分解して空氣に觸れしめる作用を致します。而して一番肝要なのは簇葉植物でありまして、地力を恢復するに大に效があります。土地の化學的性質も物理的性質も其爲めに增進しまして、人間の加へる勞働や施す肥料の利目を甚だ大ならしめるのであります。

甚だ集中的

輪栽農法は甚だ集中的な耕作法であります。而して此の法を實行するには資本も勞働も澤山に要ります。畜類の數も質も著しく增進します、人間も餘計要ります。又た種も澤山に要りますが、收穫は大變に殖えるのであります。全面積の五割乃至六割は穀物を生じ、其餘りは他の各種の植物を生ずるのが例となつて居ります。

第七　自由農法

（獨名　Freie Wirtschaft）

全部穀作地　植穀に制限無し
休耕地無し　永久牧地無し

英國が本家本元

輪栽農法は人口稠密で、農民の豐な處に行はれます。北伊太利では中世に於て既に行はれました。佛國では巴里から北フランドル地方に掛けて、又たローン河、ガロン河流域に行はれ、瑞西ではツューリヒ附近、獨逸では萊因沿岸地方、其他大都市隣接農村で行はれます、然し其本家本元とも申す可きは英國で、殊に東南地方、倫敦の附近、ノーフオルク等で盛んに行はれます。獨逸では彼の有名な農學者アルブレヒト・テーアが英國から學んで之を自國に鼓吹してから大に行はれる樣になつたのであります。英國が嘗て世界一の農業國、農業の模範國と云はれたのは、此の輪栽農法の賜であります。

自由農法

最後に起つた最も集中的な農法を自由農法と申します。あらゆる土地を洩らさず耕し、之を最高度まで利用するので、其の輪栽農法と異る所は、資本と勞働とを更らにより多く注ぎ、殊に農藝化學の進歩により肥料の改良が大に行はれ、各土地に其々最も適する肥料を遺憾なく施すによつて、栽培物を一定する必要なく、何んでも望む物を欲しい時に自由自在に耕作することが出來る點にあります。何等の制限も拘束

も受けませんから、之を自由農法又は自由耕作法と名づけるのであります。耕地には其地味や氣候に最も適し又市場の狀況に應じて經濟上最も利益あるものを植ゑ、之に必要な肥料を施し、其他あらゆる手段を盡すのであります。而して之は二つに分けることが出來ます。第一は直接人間の生活に必要な植物を栽培するのと、第二は飼料の栽培及牧畜に重きを置くのと是れであります。第一を主穀自由農法と名づけ、第二を牧畜本位自由農法と稱しても宜うございます。要するに地味や氣候に從ひ、又其地方の販路の狀況に從ひ最大の利益ある方法を選ぶにあります。

土地改良の要點

序に土地改良の要點をあげて見ませう。耕作法の進歩は右申上げる通り、資本と勞働とを加ふるによつて土地の自然的恢復力を働かせて、其豐度を高めるを目的と致します。然し斯く高められた豐度は、植物を植ゑると其れ丈け減ずるものでありますから、我々は絶えず其の恢復に勉めなければならないので、一度資本と勞働を加へたから其で永久に地力が高まると云ふ譯には行きません。然るに土地改良は永久的に豐度を高める所以であります、一度資本と勞働を加へて土地改良を實行致せば其效力は永い間繼續するのであります。是が兩者の異る點です。さて土地改良には種々の仕方があります、其重なるものをあげて見れば左の通りであります。

一　耕地面積の增加
　イ、河端・海岸等を堤防にて圍ひ込んで耕地を作ること
　ロ、湖・沼等の埋立、並に水路の調節により耕地を作ること
　ハ、沼地の開墾
　ニ、不毛地の開墾

二　既耕地の保安
　防水設備・護岸設備・土砂防扞・地盤崩壞防止等の設備

三　土地利用法の變換
　森林を耕地とすること、草地・牧地等を耕地とすること、又は耕地を草地・牧地とすること、耕地を葡萄畑とするの類

四　耕地の物理的並に化學的性質を變更して豐度を增進すること
　土壤の混和、地中の石塊を取除くこと、地面を平にすること、殊に人爲的の灌漑と疏水

五　耕地整理

交錯圃・散圃の全廢を目的とし、一人の有する土地を可成一ケ所に一括する爲め所有地を交換すること

右で大略をあげた積りであります。斯く土地改良は永久的で、耕作の進歩は一時的でありますが、何れも人間の努力により資本と勞働とを多く加へて土地の可變性・豐度を高め土地の生ずる收穫を增進して、益々增して行く人間の需要に應ずる點に至つては同一であります。

一定面積の土地が養ふ人口數比較

さて耕作法の發達も土地改良の進歩も、共に土地の不變性に打克つ工夫に外ならないので、人一人を養ふに要する土地の面積を成可少くするのであります。昔に比べると今日は、一人を養ふに要する土地は甚だ少しで濟みます。同じ事を反對に申すと、一定の面積の土地の養ひ得る人間の數は非常に多くなつたのであります。シュモラーと申す學者が其經濟學原論に於て古今の各種民族に就て、一平方哩に養はれる人口數を擧げたのを紹介して見ませう。

民族又は地方	一平方哩に住む人口數
一　北極附近の土地磯角の所に住む狩獵・漁撈民族	〇・一——〇・三
二　ブッシュマン、パタゴニア、濠洲の狩獵民	〇・一——〇・五
三　印度人、ダヤク、パプア、黑奴の如き半農狩獵民	一〇——四〇
四　西北亞米利加、ポリネシア等の漁撈民族	一〇〇以內
五　遊牧民族	四〇——一〇〇
六　亞弗利加內部、馬來等の半農半工民族	一〇〇——三〇〇
七　西曆紀元以前のケルト民族、古獨逸民族	二八二——六七五
八　熱帶地方の半農遊牧民	二〇〇——五〇〇
九　熱帶地方の半農漁民	五〇〇以內
十　歐洲中の氣候最も惡き所	五〇〇以內
十一　三圃農法時代の中部及南部歐羅巴民族（紀元前四百年より三百年に至る希臘、紀元前三百年より紀元後百年に至る伊太利、並に紀元後千二百年より千五百年に至る中部歐洲）	一〇〇——一五〇〇
十二　千六百年より千八百五十年に至る中部歐洲	一五〇〇——二〇〇〇
十三　南歐洲の純農業地方	四〇〇〇以內
十四　現今中部歐洲	四〇〇〇——六〇〇〇
十五　印度・爪哇・支那	一〇、〇〇〇
十六　歐洲大工業地方	一五、〇〇〇

十七　葡萄栽培地方・工業中心地・鑛山業地方　一七、〇〇〇——一八、〇〇〇

右は元より概測で必ずしも精確とは申せませんが、兎に角文明の進歩は一定面積の土地が養ひ得る人口の數を大に增すもので、其れでなければ文明の進歩は到底望まれないこと丈けは明白であります。

第二十章　土地收穫の增加　殊に收穫遞減の法則

二個の問題

前章に於て土地の面積は極めて有限で之れを增すことは出來ませんが、土地の可變性卽ち物理的・化學的性質は人力を以て大に增進することが出來るもので、其手段は集中的耕作法と土地改良との二であることを御話致しました。此二者を實行すれば土地の總收穫が增すのです。

ソコデ玆に二つの問題が起つて參ります。第一の問題は、其ならば土地總收穫の增加は無限に出來るものであるか否かです。第二の問題は、土地の純收穫を增加するには如何なる條件が必要なりや是であります。此二問題は實際上甚だ肝要であつて又餘程込入つて居りますから、間違つた事を申上げない爲めに、一々其昔プレンタノ先生から習ひました所によつて、其に私の考へを補足して以下成る丈け分り易く說明致しませう。猶先生の名著『農業政策。理論的緖論』と云ふ本には、詳しい說明が載せてあります。

土地收穫の增加は無限に可能なりや

土地の收穫の增加は何等の制限なく何處までも出來得るものなりとは常識から云つても考へることは出來ません。乃ち此問に對しては否と答ふる外はありません。如何に農藝化學が進步し、耕作法が發達し、又た土地改良を行つても、一反の土地から日本全國の人間を養ふ可き收穫を得ることの出來ないは言ふまでもない所であります。故に土地の可變性は人力を以て之を大に增すことが出來ますけれども、其は無限に行はれるものでなく早晚此以上增すことが出來ないと云ふ點に達します。從つて土地の可變性にも亦た制限があるものです。此根本事實は我々が經濟上土地の事を考へるに付て決して忘れてならぬ所であります。土地の面積は有限であるのみならず、其の豐度もつまりは矢張有限であるのです。ですから我々は種々の工夫をして、此有限に打克つ爲めに、絕えず心を用ひなければならないのです。

偏農論者の謬想

然るに農業家殊に農學者は能く申します。日本の米の收穫は今四千萬石あるが、少し工夫を用ひ又保護を加へれば、其五割を增すことは容易である、否現在の收穫を倍にすることも方まで難事ではないと。是は獨り日本計りではありません、西洋でも偏農主義の學者や論客は能く同じ樣なことを申します。彼等は土地收穫の增加には制限のあるものなるを殆んど忘れて居る樣に見えます。之が爲に實際上飛んでもない失敗を招いた例がイクラもあります。リービヒと云ふ大化學者は化學の力により土地の豐度を大に增し得ることを敎へた農界の大恩人ですが、其弟子達の中には師匠の說を誤解して、唯だ土地豐度をさへ增せば宜しいものと考へ、米國の人口稀少な所で學理的耕作をやつて大失敗を招いた實例があります。今日でも所謂地主黨の人々や農學者中の或人々は土地の收穫は事實上無限に增し得る樣に主張して居ります。

チュルゴーの土地收穫有限說

然るに經濟學の上に於ては此等の農業偏重論者の說の誤りなることは夙に道破せられて居ります。卽ち土地には收穫遞減の法則なるものゝある事は、既に十八世紀の終頃から認められて居ります。始めて此法則の事を說いたのは、佛蘭西の有名な大政治家であり兼て經濟學者であつたチュルゴーと申す人で、此人は千七百六十八年に著した一小論文に於て、土地に費用をかけるのも或點までは之に相應した增收を得

ーゴルュチ・クッヤジ・ルーベロ・ヌンア
Anne Robert Jacques Turgot
(1727—1781)

られるが、其點を過すと收穫の全量は成程增すであらうが、其割合は段々少くなり仕舞には土地の豐度は盡きて、イクラ費用をかけても些しも收穫を增すことが出來ない樣になると唱へました。然るに大言俚耳に入らず、チュルゴーの此卓說は彼一人の主張丈けに止まつて之を受け繼ぐ人のなかつたのは、甚だ殘念な事であります。

千八百十三年に於ける英國の穀價調節論

所が十九世紀の初に方つて英國に於て穀物殊に小麥の價が大變に騰貴致しました、即ち十八世紀の終に於て一クオーター（一クオーターは八ブツシエルで、我一石六斗四升九合に當ります）に付て六十志位であつた小麥は、千八百十三年には百六志許りとなりました。其と共に英國の耕作面積も非常に擴張致しました。千八百十三年と云ふのは、英國が佛國と大戰爭を致して居た眞最中で、丁度此度の歐洲大戰の百年前に當りまして、當時の英國は今日の獨逸に當り、當時の佛國は今日の英國に當ります。佛國は新興國の英國を如何かして滅ぼして仕舞ひ度いと思つて、前にも一寸申上げて置いた通り、大陸封鎖によつて英國の糧道を絕たうと試みたのであります。英國は封鎖を受けて外國から穀物が這入つて來ませんから、自國民の食料に當てる穀物（主として小麥）は皆自國の土地で生產せなければならなかつたのです。故に

惡い土地、豐度の極めて低い土地迄も悉く之を耕作致しましたから、耕作面積は非常に殖えましたが、其代り穀物の價は右申す通り非常に騰貴致したのであります。其時に地主黨や農業黨の人々は、佛國との間に講和が成立する樣になれば、大陸から安い穀物が又這入つて來る樣になつて、穀物の價は暴落し、地代も地價も亦下落して、農民は慘憺の苦みに陷るであらうし、耕作面積も再び縮少することゝならう、是れ看過す可からざる大問題であるから、今に於て豫め之が救濟策を立てゝ置かねばならぬと主張致して、其論は大いに勢力がありました。天が下には新しきことなしとは西洋の諺にあることですが、今日我邦一部論者の議論と、千八百十三年時代の英國偏農論者の議論と、如何にも符節を合せた樣に似て居るのは面白いことであります。歐洲戰爭の爲めに我日本の經濟界は思はぬ利益を占め、成金大繁昌、株屋萬能の世の中となり、米價を始め諸物價が騰貴しましたが、一朝講和が成立するときは、此形勢に著しい變化が起るだらうから、今から何とかして置いて一度上つた米價の下らぬやうにしたいと望む人は、地主黨や農民黨の中には少からずあります。自分さへ善ければ國民一般は高い米を喰い高い物を買はせられて、困つても少しも構はないのであります。

マルサス、ウエスト、リカルドの土地收穫遞減論

然るに此の謬論に反對して異議を唱へたのが、當時有數の經濟學者であつたマルサス、ウエスト、リカルドの三人でありました。而して三學者とも世上に行はるゝ議論の誤りなるを示めす爲めに學問上主張したのが、土地には收穫遞減の法則なるものがあつて、豐度は決して無限に增加することが出來るものでないと云ふ一事であります。マルサスは英國に於る穀物の價が諸外國よりも高いのは、英國に於ては增加する人口の需要に應ずる爲に年々地力の乏しい土地を新たに耕作する必要に迫られて居るからで、其爲め勞働も費用も段々餘計要ることになるので、英國の穀物の生產費は外國よりも高く付いて居る爲め、其價が高いのであると論じました。此は千八百十四年の春頃のことであります。處が翌千八百十五年の初頃に、ウエストと云ふ學者も亦た一書を著はして、耕作區域の擴張するに從ひ、一定の收穫を得るに要する費用は段々多くなる、卽ち土地の純收穫の總收穫（純收穫と費用とを加へた高）に對する割合は段々遞減するものであると說きました。リカルドは主として此兩說を土臺として同年に一書を著して、一　人口が增加する爲め段々惡い豐度の乏しい土地を耕す必要が多くなり、從つて耕作の費用が多くなり農業の生產力を減ずることになる、二　但し農業の耕作法に進步が起れば其は別問題である、三　然し原則としてはイクラ耕作法が進步しても、早晩豐度を減じ費用は多くなり、農業の生產力は減る外はないと主張致しました。此が土地收穫遞減法則に關する學說の成立でありまして、其以來今日迄此法則は學問上の定說となつたので

あります。

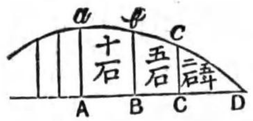
土地收穫遞減法則の定義

ソコデ分り易く此法則に定義を下して見ますと、土地に勞働と資本とを加へる度を段々増して行くと、或度までは之に應じて絶對的にも相對的にも收穫を増して行くけれ共、其度を超して猶加へて行くと、收穫は絶對的には増加するけれども、相對的には却つて減じて行き、仕舞には絶對的にも増さなくなつて仕舞ふ、但し其間に農業の技術に進歩があつて、或は耕作法を改良するか、或は土地改良を加ふる時は此限にあらずと云ふのであります。之を數字で説明して見ますれば、

土地に注ぎたる資本及勞働の總費用	一ケ年の收穫	一ケ年の收入	投下總費用に對する年收百分率
五千圓の場合	十石	五百圓	一割
一萬圓〃	十五石	七百五十圓	七分五厘
一萬五千圓〃	十七石五斗	八百七十五圓	五分八厘餘

となります。絶對的の年收穫は、投下資本及勞働額の増すに從ひ増す事は増しますが、其増し方は十石・二十石・三十石でなく、十石・十五石・十七石五斗でありますから、其收穫率は一割・七分五厘・五分八厘と云ふ樣に減つて行きます。即ち絶對的の收穫は増しますが相對的の收穫は減じて行くのです。圖で示して見れば左の通りであります。

土地收穫遞減圖



ABCDを百圓づつの投下費用とします。之に對する收穫はAabB BbcC CcDで表はします。Aaの處に至る迄は收穫は絶對的にも相對的にも漸次増しましたが、此の點から先きは圖の如く絶對的には増しても、相對的には減るのです。即ちACに對しては絶對の全量は十五石となりますけれども、其の増加は十石でなく唯五石に止まり、ADに對しては全量は十七石五斗となりますが、増加は二石五斗に止るのです。Dから先きは絶對的にも殖えません。

一の前提あり

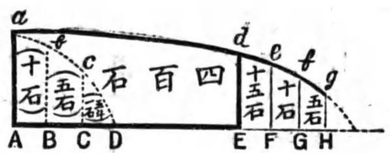
此の收穫遞減の法則には一つの前提があります。即ち右の但書に示した通り、農業技術に變化ない場合丈に限ることで、其變化があつて耕作法の進歩、土地の改良が實施せられますときは、此法則は其作用を支へられて、中止して仕舞ひます、否當に中止するのみならず、却つて反對に相對的にも收穫は遞增する場合も澤山あるのです。有效な肥料を發明したり耕作法が變つたり農具の改良があつたり新に灌漑疏水の方法が行はれたりすると收穫は俄かに增します。再び前の例を取つて數字で說明して見ませう。

投下費用	收穫率
五千圓	一割
一萬圓	七分五厘
一萬五千圓	五分八厘

費用	收穫高	收穫率
五千圓を加へると	四百十五石となり	一割九分七厘六毛に當る
一萬圓〃	四百二十五石となり	一割九分三厘一毛に當る
一萬五千圓〃	四百三十石となり	一割八分六厘九毛に當る

なる場合に假りに、灌漑疏水の爲めに八萬五千圓の費用を投ずると します。左樣すると、一萬五千圓に八萬五千圓合計十萬圓の投下費用に對して、四百石の收穫となるとすれば、收穫率は二割となる譯です。トコロが其れから先は

となるが如き是であります。之を圖で示して見ませう。

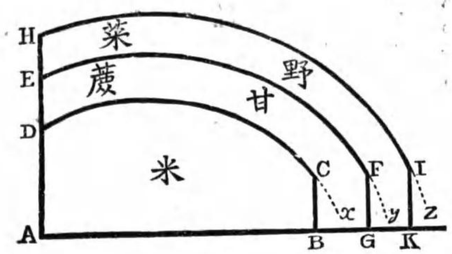


AEを費用十萬圓としますと、之に對しAadEの收穫即ち四百石が得られます。然るに更らに上F五千圓を加へますと、其增收は十五石、更らにFG五千圓を加へると增收十石、GHを加へると增收五石しか得られず、結局費用十一萬五千圓即ちAHに對する收穫はAagHの四百三十石しか取れないのです。

栽培物の變換は此法則を中止す

以上は同一の植物を續けて耕作する場合に就て云ひましたのです。即ち米なり小麥なりを繼續して耕作するに就て、種々其耕作法を改良したり、又は土地改良を實行したりする場合の話であります。處が土地利用法を換るによつて收穫遞減の傾向を支へる方法は未だ外にあります。即ち栽培物を換ることは是であります。例へば從來米を栽培して居て、其で收穫遞減の始まる限界點に到達した場合でも、今度は米作を已て、或は麥を植ゑるとか、野菜を植ゑるとか、臺灣で申せば米田を變じて甘蔗を植るとかすれば、收穫遞減の作用は全く中止せられる場合が往々あるのです。此點は昔の學者は餘り注意しなかつたのですが、實際上屢々見る例であつて、之を看過してはならないのであります。再び左に圖解して見ませう。

上に掲げた圖で申せば米作を繼續する時には Cx の線に沿つて收穫率は減じますが、之を已めて甘蔗を植ると收穫率は EF 線に上るのであります。更に又甘蔗畑を變じて野菜を植ゑると收穫率は HI 線まで上るが如き場合があるのです。殊に西洋の農業は牧畜を伴ふのが常でして、植物性の生産から動物性生産に移り、穀作の代りに牧畜を營む樣になれば、收穫遞減の作用は、却て變じて遞增となることが澤山あります。此點から見ると西洋の樣に土地利用方法の數の多い農業と、我日本の如く農業と云へば米作か麥作にのみ限られた姿である處とは、大分違ひます。西洋ならば穀物の外に牧畜を營み、食畜や牛乳を賣出したり葡萄酒の原料となる葡萄を植ゑたり麥酒の原料となる葎草を植ゑたり、又同じ穀物にしても、大麥あり、小麥あり、オート麥あり、ライ麥あり、獨逸小麥あり、其他馬鈴薯や甘菜（砂糖大根）を植ゑたりすることが發達して居ますから、栽培物を換へるによつて、土地收穫遞減の作用を大に緩和し、又は全く中止し、又は反對に遞增の實を擧げ得る機會が多いのです。然るに我邦の樣に米と麥とに限られて居る處では、其の餘地が乏しく、從つて收穫遞減の法則の壓迫を早く且つ餘計に蒙ることになるのであります。



猶一つの方法あり

土地收穫遞減の作用を免れるに猶未だ一つの方法があります。其は單に土地のみを目當としないで、土地から生産する物に加工することを農家が兼營すること是であります。卽ち山から伐つて來た木を製材したり、紙を漉いたり、火酒や麥酒・葡萄酒を作つたり、牛乳から牛酪を製したりして、農産物を其の儘市場へ出さずに之れに多少の加工を致す樣になりますれば、少い面積の土地でも可成多くの收益を擧げることが出來て、地力の遞減を感ずることなくして濟むのであります。

以上を要言すれば

之を要するに同一種の穀作を墨守して居れば、收穫遞減の法則の起る場合でも穀物の種類を換へれば、投下費用を增しても收穫は絕對的にも相對的にも殖える樣になることがあり、穀作にのみ限つて居れば收穫が相對的に減る場合でも、穀作を已めて他の植物、馬鈴薯とか、甜菜甘蔗とか、葡萄・葎草・野菜・果樹などを植ゑる樣になれば、投下費用を增しても相對的にも收穫が殖える樣になることもあり、純粹農耕にのみ限つて居れば收穫遞減する場合でも、精製加工を兼營する樣になれば收穫は却つて遞增する樣にな

る等の場合のあることは、土地收穫遞減の法則を考へるに方つて決して忘れてはならぬ點であります。即ち此法則の現に行はるゝ範圍は以上種々の方法によつて大に縮少せらるゝのでありまして、人力によつて土地の豐度を高め得る範圍は事實上餘程廣いものであるのです。

第一の問題に對する結論

故に土地收穫の增加は無限に可能なりやとの問題に對しては、次の如く結論を下す可きであります。土地の收穫は絕對的無限に增加することは出來ません、イクラ投下費用を何百何千萬圓かけても、一反歩から日本國五千萬の人口を養ふ可き米を收ることは到底出來ません。之れが絕對的の限界であります。此は勿論明白の事柄で言ふまでもない事ですが、此點に達するズツト以前に既に限界があります。即ち投下費用を增すときは絕對的には收穫を增すことは出來るが、相對的には最早殖えないで却つて其割合が減ずる點に達するのであります。此の限界は一定不動のものでなく、人間の工夫次第で動くものであります。即ち最も早く此限界に達するのは、農業技術が依然として變化なく且つ其栽培する植物を換へずに同一のものを繼續する場合是であります。之に反し、集中的の耕作法を實行し、土地改良を行ひ、栽培植物の種類を改むるときは、其限界は遙かに遠くなりまして、一切の改良を施し盡して此以上の工夫がないと云ふ點になつて、收穫遞減の作用が始まるのであります。

純收穫を增すには如何なる條件必要なりや

ソコデ第二の問題に移ります。純收穫を增す、言葉を換へて申せば利益を減ぜずに收穫を增すには如何なる條件が必要であるか是れであります。更に詳しく申しますと、集中的耕作法を採用し土地改良を行ふことは技術上は出來るとしても、其れが利益を減じては何にもなりません、栽培植物の種類を換へたり、純粹農業の外に精製加工を兼營したりすることを、利益を減ぜずしてやり得るには如何なる條件が必要であるかの問題であります。

さて此問に對しては次の如く答へなければなりません。集中的耕作法を採用したり土地改良を實施したりすれば收穫は增すには相違ありませんが、其れには費用が餘計に要ります。此費用を補つて餘あるのでなければ收穫の增加はあつても利益は却つて減るから何んにもなりません。即ち無條件に土地改良、集中法の實行は出來るものではなく、此によつて得る增收が之に要する增費を補つて餘ありと云ふことが必要の條件であるのです。

第一編に於て、經濟とは收支適合を圖ることの謂で、其適合とは單に收支同額と云ふのではなく、收か

ら支を差引いて餘剩と云ふものが出るのが、經濟の目的であることを段々御話致して置きました。今土地利用の場合に就て此道理が最も明白になつて來るのであります。我々が土地を耕作する目的は總收穫を餘計取る爲めではありません、純收穫を餘計取る爲めであります。總收穫とは絶對的の收穫の全部を云ふので、是から一切の費用を差引いたものが純收穫であります。イクラ土地改良耕作改良によつて總收穫が殖えても、費用が嵩んで之を償ふことが出來なければ、純收穫は減ります。ソレでは農家經濟の目的は達せられないのであります。從つて斯の如き場合には技術上道理上出來ることであつても、實際の經濟問題とはなりません、土地改良も耕作改良も却つて行はない方が宜いのであります。故に我々は改良を實施して純收穫が殖える場合のみを問題とす可きであります。

然らば純收穫の增す樣に改良を採用し得るのは、如何なる場合でありませうか、是れ我々が研究しなければならぬ重要の點であります。以下少し詳しく說明を加へて見ませう。

同一豐度の土地に就ての原則

先づ第一に土地が凡て同一の豐度を持つて居り、改良を加へ得る資格も同一であり、又た其作物を販ぐ可き市場に對する關係も同一であると假定して見ます。此場合は、總收穫の增加を得る爲めには其收穫の

ーアシッロ・ムルヘル＊ヴ
Wilhelm Roscher
(1817—1894)

価格が高いと云ふことが必要の條件であります。故に人口が稀少で富の程度の低い處には、集中的耕作を行ふことは不可能であります。人口が稀に富が少ければ、農作物に對する需要も小でありまして、之に高い價を拂ふことは望む可からざるとであります。かう云ふ處では、必ず地價は安く、利子や勞銀は高く、穀價は低いのです。ですから費用のかゝる集中耕作をやる等と云ふことは問題になりません。之に反して人口が增加し穀物に對する需要が殖えますれば、地價は段々高くなると共に、利子や勞銀は却つて安くなりますから、集中耕作に進むことが出來ます。否、是集中耕作を採用して段々高くなる土地を出來る丈け儉約して使つて、小い面積から澤山の收穫を取る樣にせねばならなくなります。

ロッシアー氏の用ひたる一例

有名な故ロッシアー先生は其農業經濟學に於て、左の如き數字を以て此道理を說明して居られます。

	總收穫（單位シェツフェル）	總收穫の價格（單位ターラー）	費用（單位ターラー）	純收穫の價格（單位ターラー）
（一）野生穀物耕作地	四〇〇	一〇〇	五〇	五〇

穀物一シェツフェル（三斗餘）に付價

F II, 30.

(二)三圃農法地	一二〇〇	三〇〇	三〇〇	〇四分の一ターラー
(三)改良穀蒭耕作地	三〇〇〇	七五〇	一〇〇〇	不足　二五〇と假定す
(四)輪栽農法地	七〇〇〇	一七五〇	三〇〇〇	不足　一二五〇

人口が稀少で穀物の價が一シエツフエル僅か四分の一ターラー（約三十七錢五厘）だと、集中的耕作を行ふ方が却つて損となることを示めしたので、一番粗放的な野生穀蒭耕作法で耕して居る土地は、收穫は僅かに四百シエツフエルしか取れませんが、費用が掛りませんから、結局純收穫は五十ターラーありますが、一番集中的な輪栽農法でやる土地は、收穫は七千シエツフエルありましても、費用が三千ターラーかゝりますから、結局純收穫は無いのみならず、却つて千二百五十ターラー丈け損となります。故に右の場合では野生穀蒭耕作法を捨てゝより集中的な方法に移ることが出來ないのであります。

所が人口が增加して穀物に對する需要が殖えますと其價は騰貴します。尤も費用の方も騰貴しますが、其比例は同じでないのが常であります、一番高くなるのは土地の價であります。勞銀は名目丈けは騰貴しますが實際は却つて安く付き、利子は無論安くなるのが一般です。故にロツシアー氏は穀價が二倍に騰貴しても費用は一倍半しか騰貴しないものだとして居ります。ソコデ一シエツフエルの價が半ターラーに騰貴すると假定しますと左の如くなります。

	總收穫（單位シエツフエル）	其價格（單位ターラー）	費用（單位ターラー）	純收穫の價格（單位ターラー）
(一)野生穀蒭耕作地	四〇〇	二〇〇	七五	一二五
(二)三圃農法地	一二〇〇	六〇〇	四五〇	一五〇
(三)改良穀蒭耕作地	三〇〇〇	一五〇〇	一五〇〇	〇
(四)輪栽農法地	七〇〇〇	三五〇〇	四五〇〇	不足　一〇〇〇

即ち穀價騰貴の結果として、野生穀蒭耕作法よりは一段上の集中法たる三圃農法を行ふ所が百五十ターラーの純收穫を生ずることゝなりまして、此法に依つた方が引合ふことになります。然るに更に穀價が一ターラーに騰貴しますと左の通りになります（總收穫高には變りがありませんから略して御目にかけます）。

	總收穫の價格（ターラー）	費用（ターラー）	純收穫の價格（ターラー）
(一)野生穀蒭耕作地	四〇〇	一一二・五	二八七・五

(二)三圃農法地	一二〇〇	六七五・〇	五二五・〇
(三)改良穀芻耕作地	三〇〇〇	二二五〇・〇	七五〇・〇
(四)輪栽農法地	七〇〇〇	六七五〇・〇	二五〇・〇

二ターラーに騰貴すると

(一)野生穀芻耕作地	八〇〇	一六八・七五	六三一・二五
(二)三圃農法地	二四〇〇	一〇一二・五〇	一三八七・五〇
(三)改良穀芻耕作地	六〇〇〇	三三七五・〇〇	二六二五・〇〇
(四)輪栽農法地	一四〇〇〇	一〇一二五・〇〇	三八七五・〇〇

一ターラーに騰貴した場合には、三の改良穀芻耕作法が最も有利となり、更に二ターラーに騰貴致せば、右の内最も集中的の耕作法たる輪栽農法が最有利となるのであります。即ち前の場合には第三が七百五十ターラーと云ふ最高の純收穫を示し、後の場合には第四が三千八百七十五ターラーと云ふ最高の純收穫を示して居ります。

右より得る結論

右によつて次の如き結論を下すことが出來ます。集中耕作又は土地改良によつて土地の收穫を增し得るは、之に要する資本及勞働の總費用と收穫物の價格との關係が、都合の宜い比例を保つ場合に限ります、即ち改良の可能なるや否やは、費用と穀價との兩者によつて支配せられるものであります。但し此は土地の豐度も、地位も、作物の種類も、同一なりと假定する場合の話であります。豐度や地位が夫々に違ひ、又は作物の種類を異にする場合には、此原則は當てはまりません。故に地主黨や農業黨の人々が此原則を利用して土地の改良や農業の進歩を實現する爲めには必ず穀價の高きを要すると主張するのは誤りであります。實際に於ては、豐度や地位は夫々非常に違ふものでありますし、又常に同一の作物のみを墨守して居らねばならぬと云ふ道理は決して無いのです。我邦の偏農論者は今日未だ此の如き學理を利用して立論する人は無く、唯獨斷的に農は國の基なりとの抽象論を振廻して米價の調節(低い場合に引上げる意味で、高い場合に引下げることは調節と云ふ語の中に含めて居ないのです)は急務なり等と唱へて居ります。世間が無頓着無知識なのを善い事にして抽象獨斷論を以て横行して居ます。然し今に段々世間の眼があいて來ると、モウ少し學理的に緻密な論法が必要となるに相違ありません、其時は西洋の偏農論者の眞似をし

て、右説明致した原則を利用することになるだらうと存じます。然し其れは矢張駄目であります、右の原則は豐度も地位も悉く同一と云ふ前提の下に立つて居るのであります。其れが同一でないときは此原則は亦自から變化を蒙るのであります、其事を次に御話して見ませう。

土地の豐度が異なる場合

先づ土地の豐度が同一でなく夫々に違ふ場合から御話します。土地の豐度高ければ高い程、集中的耕作法に進むことが容易であります。何故となれば豐度が高いと云ふことは、つまり費用に比例して總收穫が多いと云ふことに外ならないのであります。同じ三百圓の費用を使つて、甲の地は十石、乙の地は八石の總收穫があるとします。此の場合には甲の土地は乙の土地より豐度が高いと申すのであります。又は甲の土地は十石の收穫を得るに三百圓の費用が要り、乙の土地は同じ十石の收穫を得やうとするには四百圓の費用が要ります、此場合には甲の土地は乙の土地よりも豐度が高いと申すのであります。而して其豐度は土地自然に具はる豐度でも、人力の工夫によつて土地を改良した結果の豐度でも、道理に於て二つはないので全く同一の作用を持つものであります。

さて豐度が自然的なり人工的なりに異ふ場合には、豐度の高い土地の方が集中的耕作法に進むことが容易であると云ふ道理を、例を以て説明して見ませう。玆に甲乙二つの田があります。甲は乙よりは豐度が高いと假定します。ソコデ甲の田では一斗の米の生産費が五圓かゝり、乙の田では五圓五十錢かゝるとします。而して其收穫高は甲乙兩田とも一石だと假定します。然るに此甲乙兩田どもへ人造肥料を新たに加へ、其費用は七圓五十錢だとしませう。其結果甲田は二斗の增收、乙田では一斗の增收あつたとしますれば、左の如き勘定となります。

		收穫高	總生産費	一斗當り生産費
甲田		一〇〇斗	五〇・〇〇円	五・〇〇円
	人造肥料を加へた場合	一二〇〇斗	五七・五〇	四・七九
乙田		一〇〇斗	五五・〇〇円	五・五〇円
	人造肥料を加へた場合	一一〇〇斗	六二・五〇	五・六八

即ち甲田では人造肥料を加へた爲め、一斗當りの生産費五圓から四圓七十九錢に減りましたが、乙田では收穫高は增しましたが、一斗當りの生産費は五圓五十錢が五圓六十八錢に增しました。故に乙田では米價が騰貴した場合でなければ、七圓五十錢かけて人造肥料を加へるのは引合ひません、米價が騰貴すれば其れが出來ます。然るに豐度の高い甲田では、米價が少し下落しても構ひません、人造肥料を加へて改良

を實行することが出來ます、穀價が高くなれば農事の改良は行はれないと云ふ論は此れで打破られるのです。其論は惡い土地、豐度の低い土地には當てはまりますが、豐度の高い土地には當てはまらないのであります。

地力の乏い土地は、穀價が高くなければ成程改良は出來ませんが、地力の豐かな土地は、穀價が安くても改良は之を施すことが出來るのであります。

豐度高き土地ほど集中耕作に進み易し

而して今日までの實驗に徵すれば、何處の國でも集中的耕作法の採用は地力豐かなる土地に早く行はれ、地力の貧弱な土地には容易に起らないのであります。伊太利のロムバルヂア地方では、既に中世紀に於て輪栽農法の樣な集中耕作の行はれたのは其地味豐沃であるからです。

生産費減少の行はれ得る場合

次に集中耕作・土地改良を實行するには穀價が高くならなくてはならぬと云ふ原則は、何かの工夫によつて生産費を減ずることの出來る場合には當てはまらないのであります。生産費の減少には色々原因があります。先づ土地の位置が特に便利な所にある爲め生産費の減ずる場合があります。例へば河流が近くにあつて灌漑の水を得るに容易であるとか、又は近くに大都會があつて作物を賣る機會が多いとか、都會住民の下肥を肥料として使ふことが出來るとか云ふ樣な事です。水を得る便が大なれば土地改良の費用が少なくて濟みます、都會の近くなれば米穀野菜の運賃が餘り掛かりません、其爲に總收穫に對する費用の割合が少くて濟み、總收穫は地位の惡い處と同じでも、純收穫は遙に多いことになります。從つて耕地改良や、耕作の進歩によつて總收穫が殖えますと、其增加は絕對的の增加であるのなら、、相對的の增加となることになります。故に斯ろ云ふ所では假令穀價が安くても集中耕作に進み、土地改良を行ふ餘地があるのであります。加之都會や市場に近い土地は是非集中耕作に進まなければならない事情があります。其は外の事ではありません、都會や市場が近くにあれば、農作物を需要する人口數も多いのです、從つて地價は高く反對に勞銀や利子は安いのが常です。ですから資本や勞働は餘計使つて集中耕作をやり、其代り土地の面積は成る丈け少しで濟む樣に節約する必要に迫られるのです。

右の說明

右の道理を例を以て說明して見ませう。玆に地力の同一な甲乙丙丁の田があつて、市場への距離は夫々

に違ふと假定します。ソコデ農作物の運賃が一石に付き甲田は三圓、乙田は二圓、丙田は一圓、丁田は五十錢掛るとします。其農作物の市場價格は一石六圓と假定しまして、前のロッシアー先生の例によつて勘定して見ますと左の通りになります。

	甲田	總收穫數量	同上價格	耕作費	運賃	費用合計	差引純收穫
(一)	輪栽農地	七〇〇〇石	四二〇〇〇円	三〇三七五・〇円	二一〇〇〇円	五一三七五・〇円	不足九三七五・〇円
(二)	改良穀蒭農地	三〇〇〇	一八〇〇〇	一〇一二五・〇	九〇〇〇	一九一二五・〇	不足一一二五・〇
(三)	三圃農地	一二〇〇	七二〇〇	三〇三七・五	三六〇〇	六六三七・五	五六二・五
(四)	野生穀蒭農地	四〇〇	二四〇〇	五〇六二・二五	一二〇〇	一七〇六・二五	六九三・七五

然るに運賃が一石二圓の乙田に於ては左の通りになります。

	乙田	總收穫數量	同上價格	費用合計	純收穫
(一)	輪栽農地	七〇〇〇石	四二〇〇〇円	四四三七五・〇円	不足二三七九・〇円
(二)	改良穀蒭農地	三〇〇〇	一八〇〇〇	一六一二五・〇	一八七五・〇
(三)	三圃農地	一二〇〇	七二〇〇	五四三七・五	一七六二・五
(四)	野生穀蒭農地	四〇〇	二四〇〇	一三〇六・二五	一〇九三・七五

運賃が一石一圓の丙田では（收穫數量は省いて置きます）

	丙田	總收穫價格	費用	純收穫
(一)	輪栽農地	四二〇〇〇円	三七三七五・〇円	四六二五・〇円
(二)	改良穀蒭農地	一八〇〇〇	一三一二五・	五八七五・〇
(三)	三圃農地	七二〇〇	四二三七・五	二九六二・五
(四)	野生穀蒭農地	二四〇〇	九〇六・二五	一四九三・七五

運賃一石五十錢の丁田では

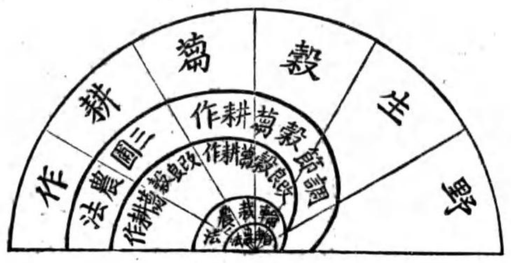
	丁田	總收穫價格	費用	純收穫價格
(一)	輪栽農地	四二〇〇〇円	三三八七五・〇円	八一二五・〇円
(二)	改良穀蒭農地	一八〇〇〇	一一六二五・〇	六三七五・〇
(三)	三圃農地	七二〇〇	三六三七・五	三五六二・五
(四)	野生穀蒭農地	二四〇〇	七〇六・二五	一六九三・七五

一石三圓の運賃の要る甲田卽ち地位の便の最も惡い所では、最も粗放的の耕作法たる野生穀蒭法が最も

有利で、三圃農法も多少の利益がありますが、其以上集中的の耕作法は却つて損が行くのです。一石二圓の運賃の乙田では、改良穀菊耕作法が最も有利で、輪栽農法は未だ損が行きます。一石一圓の丙田では、何れの耕作法も損はないのですが、改良穀菊耕作法が最も有利であります。地位の最も善い丁田では、最も集中的の輪栽農法が最も有利で、以下粗放的になればなるほど利益が少くなるのです。

市場に近きほど集中耕作行はれ易し

ソコデ耕地は市場に近ければ近い程、其耕作法は集中的であると云ふ結論が下せます。獨逸の有名な經濟學者のフオン・チューネンと云ふ人は、此道理を出立點として、有名な『孤立國論』と云ふ書物を著しました。其議論は大分込入つて居りますが、大要は左の圖を御覽になれば容易く諒解が出來ます。



圖の說明

鐵道・運河・河流何れかの交通の便がある所を中心として、其れに一番近い所が、自由農法、少し離れた所が、輪栽農法、其れから改良穀菊耕作、調節同上、最も遠い所が野生穀菊耕作の行はれる有樣を示したのです。

同一の豐度を有し同一の交通要具による土地なれば、市場に一番近い所では自由農法が行はれ、其次に近い所では輪栽農法、其次は調節穀蒭耕作、其次は三圃農法が行はれ、一番遠い所では野生穀蒭耕作法が行はれること圖に示した通りであります。此のチューネン氏の説は實際に合つて居ります、都會の隣接郡村では自由農法が多く行はれて居ります、交通の便が開けて居て市場へ作物を搬出するに容易な地方（例へば英國の東南地方の如き）では十八世紀の頃から輪栽農法が行はれて居ますが、此と豐度は同じでも交通の便が開けず市場より遠い地方では、他のより粗放的な農法が行はれて居るのであります。露西亞や米國の樣な廣い國では、鐵道が掛つてから交通の便を得まして農作物の爲めに市場を開いたのであります。

其他肥料の價の安くなることも右と同樣の作用があります。肥料の價が安くなれば穀價は高くならなくとも、集中的耕作法に進むことが出來るのであります。是れ又た生産費減少の一方法であるのです。

全體の結論

以上段々御話致した通り、收穫遞減の法則が土地の豐度を支配することは到底免れることは出來ないのであります。然し此れには種々の例外があります。第一に農業技術に進歩が起り、土地改良や耕作法の進歩を行へば此法則が支られ、場合によつては却つて反對に收穫は相對的にも遞增する樣になります。第二には同一植物斗り栽培しないで植る物を換へると、此法則が中止せられることがあります。第三には純粹農業のみを墨守して居ないで農産物の精製加工をも兼營する樣になると、此法則に逆行することが出來ます。然るに此等の努力を致しても單に總收穫が殖える許りでは何にもなりません、純收穫が殖いとるのが經濟の本旨であります。其れには總收穫と費用との關係が甘く行つて、總收穫から費用を差引いた餘剩が多くなる場合でなければ改良進歩は實際の問題とはなりません。ソコデ此純收穫の殖える樣に土地改良なり集中耕作を行ふには、豐度や地位の狀態が全く同一の土地ならば農産物が價高く賣れる場合でなければならないのです。人口が增加し商工業が發達し國の富が增して農産物の價が高くなれば、集中耕作は自から行はれる樣になるのです。處が豐度も地位も全く同一の土地許りと云ふことは實際に於ては無いことであります。從つて第一には、豐度の夫々に異ふ土地に就て申せば、自然的なり又は人爲的なりに豐度の高い土地ほど集中的の耕作を行ひ、土地改良を施す餘地があります。第二には、生産費を減ずる工夫が出來れば、農作物の價は高くならずとも、以上の改良進歩を行つて農家の利益を增すことが出來ます。殊に交通の便が開けて農作物の運賃の安くなることは、集中的耕作に進むに最大の機會を與へます。故に都會や市場に近い所ほど集中耕作法が行はれるのです。肥料の價が安くなることも亦同樣の作用を致します。此等凡ての便の備はつて居る所ほど土地收穫遞減の法則は其作用を支られ、土地に資本と勞働とを多々益々投

じても、相對的に純收穫が減ずることなく、却つて增加して行くことが出來るのであります。土地收穫遞減の法則は自然の大勢であつて、之を全廢することは人間には到底出來ないのでありますが、種々の工夫により種々の機會を利用することを忘らないときは、實際上に於て其作用を餘程遠くの點まで延ばすことが出來るのであります。經濟の進歩とは卽ち此を申すのであります。若し此の進歩がなかつたら收穫遞減の法則は遠慮なく我々を壓迫して、人間は疾うの昔に於て食料の不足農產物の不足の爲に滅亡して居たでありませう、考へて見れば人間の天然に打克つ力は偉大なものであります。然し、イクラ人間は天然に打克つと云つても、全然天然の大勢を無くして仕舞ふことは出來ません。乃ち收穫遞減の法則は其作用を延期し得るのみであつて、此の法則の依然として存在して居ることは我々が寸時も忘れてはならぬ所であります。我々は更に人智の工夫を進めて、益々此法則に打克つことを勉むる大任を有することを忘れてはならないのであります。而して收穫遞減の傾向なるものは獨り土地に付てあるのみならず、我々の經濟生活の全般に涉つて存するものであることは、後編に至つて更に詳しく御話を致します。

第二十一章　人口の增加殊にマルサス氏人口の法則

土地と人口

前章に於て土地の收穫には收穫遞減の法則があつて、其增加は無限なることを得ない所以を御話致しました。然るに此の土地收穫を以て養ふ可き人口の數は段々增加して行くものであつて、而も其增加の速度は土地收穫の增加よりも遙かに大であります、從つて兩者の間に大なる不釣合が起る傾きあることを免れないのであります。ソコデ收穫遞減の法則に對して、マルサス氏の人口法則なるものがあつて、此二つの法則は切つても切れぬ密接の關係を有するものであります。土地の收穫は早晩增加することの出來ない限界に達するものであり、其限界に達する前にも、絕對的には增加しても相對的には却つて減ずるものでありますのに、此收穫を食物として生きて居る人間の數は、遞減ドコロか無限に增加せんとする傾向を持つて居るものであります。此道理を經濟學上創說致したのは英吉利の學者のマルサスと申す人であります。

其説を名づけてマルサスの人口の法則と申します。詳しく申せば人口增加の法則であります。

マルサス人口論の由來

マルサスは十八世紀の末に起つた人で（千七百六十六年に生れました）あります。深く人口の事に思を潛めて千七百九十八年に一つの書物を著はして彼れの獨得の意見を述べました所が、それが非常に世の中の注意を惹きました。そこで彼れは更に研究を積んで、澤山材料を集めて初めの論旨を著しく改めて訂正した其第二版を千八百三年に至つて出しました。其以後續いて彼れの生きて居る間に第六版迄出しました、彼れが死んでから後も尙ほ絕えず版を重ねて居ります。かくてマルサスの人口論といふものは、英吉利人は經濟學者でなくても一通りは知らなければならぬものになつて居ります。

誤解謬傳甚だ多し

所がこれ程に有名なものでありますが、其眞相は隨分誤り傳へられて居ります。ボーナーといふ人はマルサスの事を評して面白いことを言つて居ります。大家といふものは世人が其人の書物を讀んだ振をする人の謂である。有名の人の説といふものは猶貨幣の樣なものである、世の中に轉々して誰も其本來の模樣

スサルマ・トーバロ・スマト
Thomas Robert Malthus
(1766—1834)

を知らなくなつて仕舞ふ、貨幣が段々磨り減つて仕舞つて菊の御紋だか桐の御紋だか一錢だか二錢だか分らない位に摺減たのが貴い如くに、マルサスの說も色々の人の手に掛つて元々マルサスの言たことゝは大分違ふ樣になつて仕舞つたと云ふ樣なことを申して居ります。如何にも其通りであります。經濟學の學說の中でマルサスの人口論の如く有名なものは少いのです。が又たそれと同時にマルサスの人口論の如く誤り傳へられて居るものも少いのです、飛んでもない間違つた說が擴がつて居ります。此頃新しい男とか女とか申す人々がありまして、如何なることから發心せられたかは存じませんが、產兒數制限は母性の尊重に必要だとか、新賢妻良母主義とは避姙を必要の前提とするとか唱へて、切りとマルサスの人口論を引合ひに出して居られます。是れは驚く可き出鱈目でありまして、避姙とか無產兒性交（此頃の言葉で之をコントラセプション（反姙）と言つて居ります、近頃流行のマリー・ストップス女史の近著は、此語を其書題として居ります）とか云ふことの利害得失は今日の我々に取りては、確に考究を要す可き一大問題ではありますが、十八世紀末のマルサスは、確かに之を罪惡なりとして極力排斥して居るのであります。是は一例に過ぎませんが、一知半解の謬傳の爲めにマルサスは實に甚だしい迷惑を被つて居るのです。

反對論者無數

抑も人口問題といふものは、人間生活の根本問題に關係して居るものでありまして、誰も之に付いて何分の考へを持て居ることであります。從つて一寸聞いたことを直ぐ鵜呑にする人もあれば、又た其が腑に落ちないと言つて直に反對する人もあるので、滅茶苦茶に混線して仕舞ふのです。マルサスが生きて居つた時でさへも贊否の論は區々で甚だし喧かつたのです。反對論者はマルサスの論を以て世の中を棄るものなりと極言し、贊成するものは非常に賞讃して此議論位世の中の爲になるものはない抔と申して居りました。贊否其極端に馳せました。

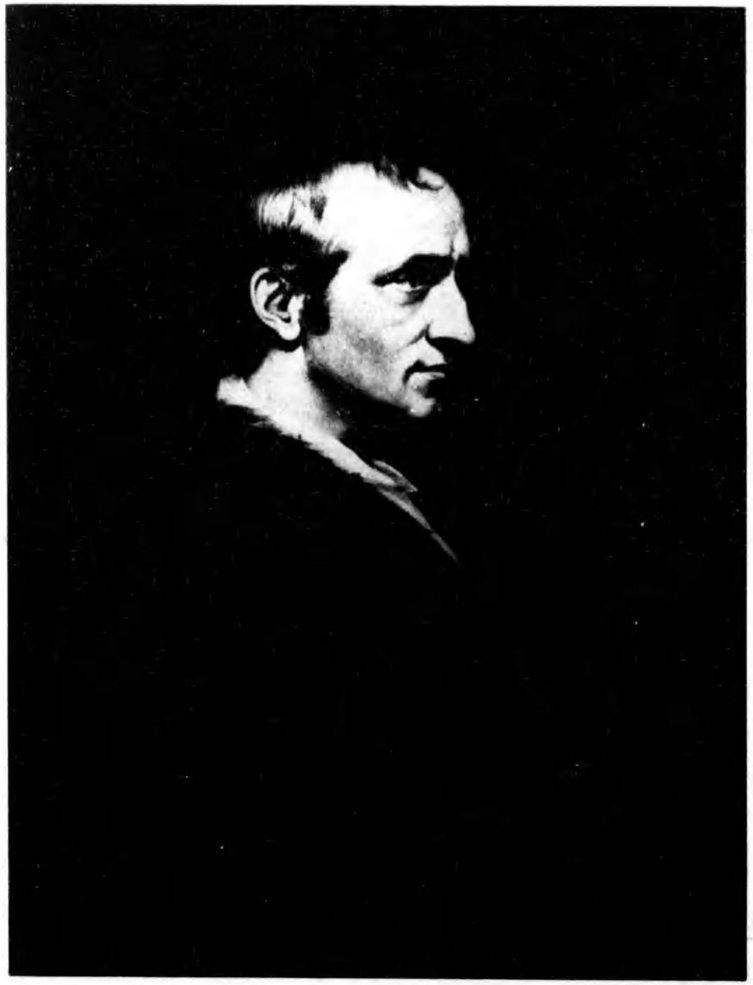
マルサス人口論當時の英國の國情

マルサスの人口論が斯く盛んに論ぜられましたは、一は當時の英國の事情によるものであります。十八世紀の終に於ける英國の狀態は前章にも申上げた樣な次第で、殊に當時實際問題として大に困つたことは、貧民の數が非常に殖えたこと是であります。英吉利に於ける救貧制度といふものは、非常に大仕掛なものでありまして、外の國に例の無いものであります。尤も佛蘭西でも獨逸でも墺太利でも、歐羅巴中貧民救助の制度の無い所はありませぬ。殊に耶蘇教の坊さんは始終貧民救助の事には係はつて居つたものであります。併し乍ら英吉利に於きましては、これを全國一般に强制的にやりまして、其實行は耶蘇教の坊さんの手に委せてありました。義捐とか寄附とかいふことでは基礎が薄弱であるからとて、强制的に坊さんが救貧の爲に稅を課することを許してありました。これを救貧稅（Poor rate）と申します。稅といふものは國家若くは地方團體、卽ち公の權力を持て居る者しか課せない筈のものですが、英吉利に於てはパリシュ Parish（教區）に課稅の權利を持せてありました。全國を多數の教區に分つて、一教區毎に區民から稅を取つて其稅の上り高で救貧所や授產場を建てゝ貧民を收容して居りました。然るに十八世紀の半頃から其數も殖え且つ大規模になりまして非常に多數の貧民を收容する樣になりました。從つて少し困る者は、直ぐ貧民だと稱して救助を受けます、貧民になつた方が遙かに樂であるからです。一個獨立の市民で貧民でなければ、自分自らの生計並に家族の生計を支ふるに加へて、貧民を救ふ爲に救貧稅を出さなければなりませぬ。トコロが一旦貧民だと申せば其等一切の負擔を免れて生活必要品は悉く給與せられますから、些つとも生活の心配がないことになるのです。これが偶に救貧院に這入ることならば恥て行かない者も起りますけれども、誰も彼れも救貧院に這入るといふことになれば、恥かしい等と云ふ念は無くなつて、皆相率ゐてドシ〳〵救貧院に這入ります。斯く救貧院に入る者が多くなつた結果、費用が激增して非常に困る樣な有樣になり、又之に關聯して社會上色々な弊害が起りました。救貧制度がありますから、困れば自分達は勿論生んだ子も皆救貧院へ入れゝば濟むと云ふので、貧民が子供の扶養の責任を感じませ

ん、イクラでも生み放題と云ふ有樣で、養育する力の有無を計慮する必要がないことになります、從つて貧民の子供がドン〳〵生れることになりました。救貧院に於きましても何とかして職業を與へなければなりません。之を多數纏めては各種の工場抔に出しますと、子供の事でありますから安い給金で働きます、英吉利のランカシーアの紡績工場抔では成年の男工若くは女工一人を使ふ代りに、救貧院の子供を澤山使ひました、其でも得です丸で無代で給金を貰つても貰はぬでもよい、此救貧院の子供を安く使つて寄宿舍に入れて置きます。交代で寢させるから一つの臥床が空いたことがないと云ふ有樣で、從つて病氣が流行り傳染病が流行り子供の死ぬ者が多く大變弊害が起りました。ソコデ千八百二年兒童健康道德保護條例なるものが發布せられました、此が抑も工場法の濫觴であります。つまり餘り弊害が甚だしかつた爲めに此法律が出來たのです。

ゴドウキン現はる

十八世紀の末から十九世紀の始にかけての英國の有樣は此くの如くでありまして、識者は何れも此問題に頭を痛めて居つたのです。ところがマルサスの書の顯はるゝ五年前卽ち千七百九十三年にウキリアム・ゴドウキンと申す一人の坊さんがありまして『政治的正義』と題する一書を著はしました、續いて千七百



ウキリアム・ゴドウキン
William Godwin
(1756—1836)

九十七年即ちマルサス人口論出版の前年に『研究者』と云ふ書物を著はして此問題に論及しました。彼は一種風變りの人でありまして、一生著述する所も多かつたのですが、殊に此二書によつて所謂無政府主義の開祖と認められて居ります。無論今日の無政府主義とは違ひます、言はゞ極く思切つた社會主義論者であります。彼は基督教の坊さんですけれども『デセンター』と申して英國の國教に屬さない坊さんであります、從つて國教の坊さん達のすることに感服しませぬ。ソコデ申すには、今日の救貧制度のいけないのは國教の坊さん達にやらせて居るからである、否政府が悪い、凡て人爲の制度を設け人間が淺墓な智慧を以て社會を支配するから色々な弊害が起るのである。悪いのは人である、天ではない。人の本性はさう悪い事を爲す者でない。人の性は本善で、完全な德性を發揮し得られるものであると（彼は之を人間の完全可能性 Perfectibility of man と名けて居ります）。然るに人間の淺墓な智慧に本づいた政治・制度・法律抔と云ふものゝ爲に此完全性を破壞して仕舞ふ。此等の愚劣な法律や制度を其儘にして置いて改良しやうと思ふのは迚も出來ない相談である、社會上の弊害を取去るには根本的に此等人爲の愚法・愚制を一擊に捨てゝ仕舞はなければならぬ、政治も制度も法律も打捨て仕舞つて、人間の本性、神樣の與へた通りの性にさへ從へば世の中には弊害がなくなつて黄金時代になると主張致しました。此は勿論極端な架空論でありまして、政府・法律・制度を廢し得た例は未だ會てありません、又廢したら社會上の弊害も皆無くなる

と云ふことは申されません。併し當時の英國の政治は餘り干渉し過ぎて、有ゆる事を政治や法律の力でやらうと致したことは慥かに弊害の基でありました。從つて此時勢に慊らなく思つて居た人々は、ゴドウキンの議論に大に耳を傾けたのであります。

マルサス起る

所がマルサスの御父さんのダニエル・マルサスと云ふ人は篤學の坊さんでありまして、英國へ渡つて來て大哲學者のヒュームの友情を無視して散々手古摺らせた佛蘭西のルーソーと云ふ急進論者の莫逆の友で『したが、ゴドウキンの書物を讀んで自分の說に合する所ありとて大いに感心しました。所が倅のトマス・ロバート・マルサスは當時三十二歳の壯年でありましたが、常に御父さんと學問上の討論を致して互に琢磨すると云ふ、美ましい程親子仲の善かつた間柄でしたが、此ゴドウキンの說に就いて、御父さんと色々の議論を闘はして居る內に、自分の說を世間に公けにして見る氣になりまして、筆を取つて著述したのが、他日有名となつた人口論の第一版であります。彼の自序には『此書はゴドウキン氏の『研究者』に關し一友と談話したるに端を發す』とありますが、其一友とは外ならぬ自分の賢父さんであります。

マルサスは自序に書いて居ります。友人と此問題に就て議論をして居る內に自から社會將來の改良の事に論及した、ソコデ自分は口頭で論じ合ふよりは、筆を取つて自分の考へを記述した方が友人に趣意を明かにするに宜からうと思付いたが、筆を取つて見ると又新らしい考へも浮んで來たから、寧ろ之を世の中に公にしたら多少の益もあらうかと考へ直したと。ソコデ彼は其書を匿名で出版致しました。トコロが其は大いに當りました。此匿名の一壯年者の著述の評判は盛でありました。故にマルサスは更に研究を續けて材料を殖し、又議論の趣きも著しく改めて、千八百三年にはチャントと自分の名前を署名して第二版を出したのです。其以來人口問題に就ては、マルサス全勝の勢で反對論者のゴドウキンの方はスツカリ忘れられて仕舞ひました。學者にも運・不運はあるもので、ゴドウキンとて決して侮ることの出來ない學者ではありますが、其名前さへ知らない人が多いのに、マルサスと云へば百年後の今日まで猫も杓子も知つて居ると云ふ有樣です。畢竟其以來經濟學はマルサスの人口論を旗印として採用し、ゴドウキンは全然見捨られて仕舞つたのです。

マルサスのゴドウキン評論

マルサスは申します、ゴドウキン氏の著述全體の根本に横はる大誤謬は、社會に起る凡の罪惡や窮乏は皆人爲の制度から起ると云ふ考へ是である。成程人爲の制度から起る弊害も尠からずあるには相違ない、

併乍其は表面上の事で眞に深く根柢に横はる原因は外にある、ゴドウキン氏の言ふ樣に人爲の制度を全廢すれば社會上の弊害が無くなつて仕舞ふものなら、コンナ簡單容易な話はない。又ゴドウキン氏の云ふ樣に、人間は自然にさへ任せて置けば自から完全になるものなれば譯もない事である。然るに實際は其正反對である。法律や制度があるから未だに人間社會の弊害は極端に陷らないのである。若しゴドウキンの主張通りに一切全廢して仕舞つたら其れこそ弊害は救ふ可からざるものとなるであらう。弊害の無くなるとか少くなるとか云ふことは迚も考へられない。今日の社會に起る罪惡や窮乏や、百般の弊害は決して人爲の産物ではない、人間の本性に具はつて居る一の不可抗的大原因から來るのである。其は何であるかと云へば、人間の增殖は人間を養ふ可き食料の增加よりも勝れた力を持つて居ると云ふ事是である。食ふ人間と食はれる食料との增加が相伴はないから種々の弊害が起るのであつて、是れは自然的根本的の大事實であつて、人爲の制度抔の産み出す所ではない。ゴドウキン氏は樂觀の誤りに陷つて居る、予の考へは甚だ悲觀的であるけれども、其が實際の事實だから如何とも致し難い。是がマルサスの說の依つて起る所であります。

人口論第一版の要領

扨て右の根本思想に基いて立てたものが有名なマルサス人口論でありますが、第一版の議論と第二版の議論とでは餘程趣きが變つて居りまして、マルサスも自分で、第二版は第一版の訂正と云ふよりも、寧ろ一の新しい著述と見て貰つた方が適當であるとさへ申して居ります。故に先づ第一版の方の議論から御紹介申しませう。

二個の前提

マルサスは二個の前提から立論します。一　食物は人間の生存に必要である。二　男女兩性間の慾情は必然的のもので且殆ど不易のものである。此二つの前提は自然の定則であつて、今日まで少しも渝らず行はれ來つたものであるから、將來に於ても宇宙の主宰者たる神樣が特に之を變更せられない限りは、現狀と變る事なきものと認めなければならぬ。さて第一の人の生存に食物が必要なりと云ふ點は誰人も之を拒まないが、第二に就ては現にゴドウキン氏は異つた考へを持つて居て、男女間の慾情は早晩消滅し得るものだと主張して居る。尤もゴ氏自ら之は　の想像に過ぎないと斷つて居るから、深く追窮するには及ばない譯であるが、ゴ氏は人間が段々完全の域に進むと云ふ道理を、人間の野蠻時代から今日迄の進步の實際に就て立論して居るが、男女間の慾情の消滅と云ふことに就ては昔から今日まで何等依る可き實績を示め

して居らない。二千年・四千年前と今日と此點に於ては少しも變つて居らないではないか。尤も個々の場合に就て例外のあることは昔も今も同じ事であるが、此例外の數も一向增加はして居らない。然るに此例外が原則となり、原則が却つて例外となる可しと主張するのは哲學者にも似合はない議論である。そこでゴ氏の論は成立たぬものとして、以上二つの前提に誤りなきものとすれば、人口增加の力は人間を養ふ可き食物を土地が生産する力よりは無限に大であると云はねばならぬ。

幾何級數的と算術級數的

乃ち人口は制限せられない場合には幾何級數的（等比的）に增加し、食物は算術級數的（等差的）にしか增加せぬ。從つて兩者の差の甚だ大なることは少し數字の考へのある者には直ぐ分るだらう。然るに人間は食物なくては生きて行かれぬものであるから、何等かの方法によつて人口增加の力と食物增加の力とを調節しなければならぬのである。乃ち食物を得ることが困難になつて、人口を制限する力が強く又絶えず働く事を要する。此食物難は何處かへ落こつて來なければならぬので、人類の大部分は其苦しい作用を必ず受けなければならないのである。動物界でも植物界でも、天然は生命の種を贅澤に蒔き散らかすものである。然るに其種を養ひ育てる場所と養料とを與へることは割合に吝である。地球上にある生命の種は之に與ふるに十分な食料と場所とを以てすれば、數千年の間には世界を數百萬寄せても容れきれない程の生物が出來る可きであるが、天然の大則たる必要と云ふ力は其增殖を一定の範圍に制限する、動物も植物も此大法則の下に縮こまつて仕舞ふ。人間のみ獨り此大法則から免れると云ふ譯には行かない。ソコデ植物や動物は此大法則の作用を受けて種の腐朽・病・早死等と云ふ現象を起すし、人類に於は窮困と罪惡を喚起するのである。窮困は此大法則の絶對的・必然的結果である。罪惡は必ずしも絶對的必然の結果ではないが、大抵の場合には起るもので、又實際に於ては甚だ普及の現象である。さて斯く人口の力と地球生産の力とが自然的に異つて居つて、而も天然の大法則は絶えず其結果を同じならしめると云ふことが、社會を完全にする上に於て打克ち難き大困難となるのである。他の原因の如きは此に比ぶれば言ふに足らないのである。此大則は總ての生物を支配するもので、人間と雖も到底之を免かれることは出來ない。如何に人智を以て工夫しても駄目である。

ソコデ人口增加の力と食物增加の力とに就て少しく立入つて說明して見やう。人口は制限せられない場合には幾何級數的に增加し、食物は算術級數的に增加すると云つた、果して左樣であるか否かは吟味して見やう。我々の知る限り社會の風俗が純潔質素で又た食物が充實して居て、早婚構ひなしと云ふ樣な國は、古往今來未だ見たことはない。だから人口增加の力が一の制限を被らず完全な自由を以て働いた國と

云ふものは未だないのである。人間社會に於ては、婚姻の到度があつてもなくつても、人の天性並に道德は、一人の男子をして早くから一人の女子に思を寄せしむるものである。ソコデ道德の高く且つ平等の行はれる國ありとして、食物も亦た豐富だと假定すれば、人は皆夫々に配偶を求めるに何の制限を被らないから、其の社會に於ける人口の增加は、今日まで實際にあつた何れの國に於けるよりも遙かに大であらう。今日現在（マルサスの時代）の北米合衆國は先づ多少此れに近い國と云つて宜からう、即ち歐洲諸國に比ぶれば食物は遙かに潤澤であり、風俗も遙かに純潔で、早婚の碍げも少い、故に歐洲に比ぶれば人口の增加は遙かに多いのであるが、此合衆國の人口は二十五年毎に倍になるのが實際の狀態である。此は決して最高增加とは云へないが、現實の經驗の結果であるから、予は之を基として論じて見よう。ソコデ次の如く言ひ得る、人口は制限せられないときは二十五年毎に倍になる。即ち幾何級數的に增加するものである。さて之に對して食物の方は如何と云ふと、例へば英國に就て食物增加の割合を見るに最善の方法を講じ新墾地を增し農業に大なる奬勵を與へて、初めの二十五年に英國の收穫を現在高の倍にすることが出來れば其れが精々であつて、次の二十五年には四倍にすることは迚も不可能である、土地の性質に關する吾人の知識は左樣な望を起すことを許さない、次の二十五年に於て現在の收穫高丈け增し得れば其が我々が考へ得る限りの最極度の增加である。これは事實よりも遙かに增加の割合を大きく見たのであるが、精々讓歩して此を原則とすれば次の如くに言へる、土地の收穫は我々が耕作に最善の努力を盡しても、二十五年毎に現在の收穫丈け以上は迚も增すことの出來ないものである。是は即ち算術級數的增加である。今英國の人口は約七百萬である（十八世紀の末のこと）而して現在に於て是れ丈けの人口を養ふ收穫はあるものと推定して見ると、今より二十五年の後には人口は七百萬の二倍即ち千四百萬となり、食物も現在の倍に殖えるから兩者は調和する、トコロが更に二十五年經つと、人口は二千八百萬となり、食物は二千百萬を養ふ丈けにしか殖えない勘定である。又更に二十五年後には人口五千六百萬となり、食物は丁度其半數を養ふ丈けにしか增加しない。ソコデ今から百年の後には、人口は一億千二百萬で、食物は三千五百萬人を養ふ丈しかない譯となるから、七千七百萬人丈けは食物を得られない勘定である（マルサスが斯く申した百年後の英國の人口數は如何になつたかと申すと、一八九一年には英蘭及ウエールス人口總數は二千九百萬人、一九〇一年には三千二百五十萬人でありました）。

右の道理を全世界に擴げて考へて見ても同じ事である。即ち人口は一・二・四・八・十六・三十二・六十四・百二十八・二百五十六・五百十二と云ふ風に增加し、食物は一・二・三・四・五・六・七・八・九・十と云ふ樣にしか增加せぬから、二百二十五年後には、人口の五百十二に對し食料は僅かに十しかなく、三百年の後には、四千九十六の人口に對し十三しか食料がない勘定となるのである。

豫防的抑制と積極的抑制、窮困と罪惡

さて斯く人口の增加と食料の增加とは相伴はないものである、而して人は一日も食物なくして生きて行け無いものであるから、食物のある丈の人間しか生きて居ない、其餘りのものは天然の大法則の作用によつて制限せられるのである。其抑へ方に二つある、一つは豫防的抑制、一つは積極的抑制是である。豫防的抑制とは子供を產んでも之れを育てることが出來ないのを慮かつて、結婚を見合せたり、又は何かの方法によつて子を產まない樣にすることを言ひ、積極的抑制とは既に生れた人間の中、食物以上の餘分のものが、何かの天然的原因で死んで仕舞ふことを云ふ。英國の如き國に於ては豫防的抑制は總ての階級を通じて行はれて居るが他の舊國に就ても亦同樣の事實を認め得る、其結果殊に結婚を抑制する結果は、世界何れの部分に於ても幾多の罪惡を惹起して男女とも之が爲めに不可救的不幸に陷つて居る。積極的抑制は主として下層階級に起る現象で、生れた許りの子供の死亡數の多いことや其他一般の死亡となつて顯はれる。此二つの抑制の外に、婦人に關する不德な習慣。大都會・不健康な工業・奢侈・疾病・戰爭等を擧げねばならぬ。要するに食物の足らない丈けの人口を淘汰する一切の抑制は、之を主觀的・具體的に云へば、窮困と罪惡との二つだと斷言して差支ない。此二つの事實ある爲めに、各國に於ける實際の人口の增加は非常に抑られて、兎に角食物の分量と調和が取れて居るので、人口の增加が右云つた法則通りに大でないのは、決して男女間の慾情が衰へた結果ではない、男女の慾は今も昔も相變らず强いものである。

第一版の結論

從つて次の如く結論することが出來るのである。第一、人口の增加は必ず生存の資料によつて制限せられる、第二、生存の資料が增せば人口は必ず增加する、第三、此の人口增加の優勢を抑へ、實際の人口數を食物の分量に調和せしむるものは、窮困と罪惡とである。

極めて悲觀的なる自然萬能論

以上が人口論第一版に於てマルサスが述べた說の大要で、成る丈マルサスの言葉通りに紹介致しました。其說たる極めて悲觀的なもので殆んど絕望に近いものであります。イクラ文明が進步し、人智が進み、道德が發達しても、人間男女の慾情許りはチツトモ變らない不相變强いもので、從つて其結果として子供の產れることは如何することも出來ない。然るに左樣澤山生れても之を喰べさせる食物がない、ソコデ或は赤兒の中に死んで仕舞ふものもあれば、年を取つてから死ぬものもあるが、つまり餘計な人間丈けは屹度

F II, 32.

淘汰せられる、其が窮困と罪悪と云ふ二つの現象となる。尤も人間が豫め之を慮かつて或は結婚を見合せたり、又は結婚しても子供を生まない樣にすることも行はれる、此によつて餘計な人間の世の中に出て來ることは豫防出來るけれども、此豫防法の結果は男女間の道德を却て大に紊すことになつて、窮困を生じない代りに罪悪を多くする。ダカラ人口と食物との增加力の不調和を保つものは、豫防的に抑制せられる場合でも、積極的に抑制せられる場合でも、結局總て皆罪悪か窮困か此二者の中を出でないと言ふのであります。如何にも人間の運命を果敢ないものと看做した說で、又人生の尊嚴人間の自尊心を大に傷ける嫌ひがあります。故に此書一度顯はれてから贊否の論が喧しくなりましたが、反對論者の勢は猛烈でありましたのも無理のないことであります。殊に當の論敵とせられたゴドウキンは直ちに此論に駁擊を加へました。マルサスは此等反對論を一々研究し、殊にゴドウキンの說に接しまして、自說の餘りに極端で又餘りに悲觀的なるを悟りました。ソコデ更に非常に勉強して材料を集め又た靜思熟考した結果、第二版に於ては大分其極端な點を緩和致しました。次に第二版の所說の大要を紹介して見ませう。

人口論第二版の要領

社會の進步に關する研究の當然の順序として、我々は、第一人類の幸福の進步を妨ぐる原因を研究し、第二將來に於て此等原因を全部又は一部取除くことを得るや否やを考へることが必要である。予は今其原因の總てを論じやうとするものではない、其の中、人間の天性と密接に關係ある一大原因丈けを考究しやうと思ふものである、此原因の存することは昔から人は知つて居るが、其自然的・必然的結果の如何なるものなるかは毫も研究せられてない。其原因とは即ち總ての生物は之に對して具へられる食物以上に增加せんとする不易の傾向を有すと云ふこと是れである。天然は生命の種を贅澤に蒔散らかす、植物や動物は其種類を增加しやうと云ふ强い本能のみによつて動かされて居る、彼等は其產兒の養育に就て何も心配することはない。人間も矢張り同じ强い本能に支配せられて居るが、動植物とは違つて理性を具へて居るから、本能によつて驅らるゝ儘ではない、產む所の子を果して養育し得るや否やを豫め考慮するものである。

人間も食物以上に增加せんとする不易の傾向を持つて居る。北米合衆國では二十五年に倍になる、又た或る所では十五年に人口が倍になる。ユーラーの研究によると三十六に對する一の死亡率を基礎として死亡率一に對し出生三の割合とすると、人口が倍になるには十二年五分の四しか掛らないと云ふ。是れは机の上の勘定ばかりでなく、實際左う云ふ事實はあつたといふ。又たサー・ウヰリアム・ペテーは其『政治算術』と云ふ著述に於て人口は十年で倍になることも出來ると推定して居る。然し可成確實を期するため以

上の中一番晩いのを取つて、人口倍加に二十五年を要すとして置かう。食物の方はどう云ふと、國中凡ての可耕地が皆耕されて居るとすると、収穫を増加するには土地改良による外はないが、土地其もの、性質として収穫を増すドコロか却つて段々減じて行くのが當り前である（前章に説明致しました収穫遞減の作用をマルサスは茲に於て漠然乍ら認て居るのです）。支那や日本に關する報告に徴すると、此兩國では人間が如何に力を盡しても其現在の収穫を倍にすることは何年經つても望まれない樣である。歐洲はソンナに人口が稠密でなく、又人力を盡せば収穫は大分増せる見込がある、殊に英國や蘇格蘭では農學が大に發達して居るし又未耕地面積も大分ある。然し此英國に於て最善可能の方法を用ひ農業に大奬勵を加へても、最初二十五年に現收を倍にする位が關の山である、次の二十五年には迚も四倍にはならない、農業の事を少しでも知つて居る人は、耕作の擴張するほど收穫増加の割合は漸次且つ規則的に減じて行くものなるを知つて居る。だが一番多く増收する場合を取つて、食物は二十五年毎に現在の收穫高丈け殖えて行くものとして宜からう。即ち人口は幾何級數的に一・二・四・八・十六・三十二抔と云ふ樣に増加し、食物は算術級數的に一・二・三・四・五・六としか殖えて行かないものとの結論を得る。

二種の抑制

ソコデ此不調和を取除く抑制に豫防的と積極的とある。豫防的抑制は人間限りに特有のものであつて、其理性の著しく優れて居る爲めに行はれるものである。動植物の増加には積極的抑制あるのみである。文明國の人間は産兒養育の困難を慮かつて其の天性を抑制して早婚を差控へる。此抑制は實際に於ては罪悪を惹起するのであるが、其れさへなくば、人口の法則から起る弊害中最も小なるものと云ふ可きである。早婚の抑制は一時的の不幸福たるは勿論であるが、之を他の抑制より起る弊害に較べれば輕微のものと云はねばならぬ。併し事實としては、此の抑制は男子の間にありては甚だ多く、又た女子の間にあつても可成多く、罪悪を生み出すのであつて、然る場合には、之れより生ずる弊害は誠に著しいものである。殊に出生を妨ぐる迄の程度の亂交の如きは、人性の尊貴を害する甚だしきものである。男女間の道德が一般に棄れるときには其結果は家庭的幸福の源泉に毒を流し、夫婦親子の愛情を弱くし、殊に夫婦協力して子供を教育する美風を傷ひ、從つて社會一般の幸福と道德とを減ぼすに至るのである。殊に種々の悪い手段を講じて男女亂交の結果を隱す（避姙等を申すのです）ことは多く罪悪の原因となる。積極的抑制の數は甚だ多い、凡ての不健康なる職業・辛き勞働・極度の貧乏・子供養育の不足・大都會・一切の亂行・種々の悪疫・流行病・戰爭・飢饉等皆是れである。

さて豫防・積極の兩抑制は之を具體的に見れば　一　道德的抑制　二　罪悪　三　窮困の三となる。豫防的抑

制の中不正なる滿足を伴はないものを道德的抑制と云ふ。茲に道德的と云ふのは最早狹い意味で云ふので、豫慮的動機から結婚を差控へ、而も其克己の期間嚴密に道德的行爲を守ることを云ふので（即ち一切性交を絶つこと）、左樣でなくて唯結婚丈け差控へるのは之を豫慮的抑制とか、豫防的抑制の一――其一番重なもの――と名く可きである。道德的と云ふ可きでない（即ち獨身者の私交を云ふのです）。亂交・不自然慾情・夫婦間の濫行・不正性交の結果を隱すこと（避姙の如き）は豫防的抑制ではあるけれども、明かに罪惡に屬するものである。尤も婦人との不規則結合（所謂共同生活の類を云ふのです）が其男女の幸福を增し誰人も害さない場合のあることは予と雖も少しも疑はない、此等は其個人に取つては窮困に屬すべきものである、然し社會全體から見れば矢張り一つの罪惡と云はねばならぬ。

積極的抑制の中、自然の大則から不可避的に起るものは全部窮困に屬するが、吾人自ら之れを招くもの即ち戰爭、濫行・其他之を避けんとせば避け得られるものは、窮困と罪惡との混合である。即ち其原因は罪惡であつて、其結果は窮困である。

第二版の結論

ソコデ、結論を下して見れば、第一、人口は必然的生存資料によつて制限される、第二、生存の資料が增加すれば何かの甚だ力强い明白な抑制によつて妨げられざる限り人口は必ず增加する、第三、此等の抑制並に人口の增加の優勢を抑へ、其結果を生存の資料に調和せしめる抑制は、總て之を道德的抑制・罪惡及窮困の三つに分つことを得と。

第一版と第二版との比較

以上が第二版に於るマルサス說の要領であります。第一版に比べると大分趣きが異つて居り、殊に人口增加の抑制を必ず罪惡か窮困かの二者何れかに屬するものだと斷言致したのを改めて、道德的抑制を加へ之に大きに重きを置いた點は根本的の變化と申す可きであります。從つて豫防的抑制の意味も變つて居ります。第一版に於ても豫防的抑制を說きましたが、其は寧ろ從たるもので、積極的抑制即ち天然自然の作用を主として居りました、又た豫防的抑制も、つまりは窮困か罪惡かに歸着するものであると致して居りますのに、第二版に於ては、人間任意の行爲たる此の豫防的抑制の方を主として說き、且つ其の中に道德的抑制があつて、罪惡にも窮困にも陷らないで、能く人口增加を抑制する力を持つものだと論じたのは、マルサスの考へが根本から變じたのであります。即ち分り易く表によつて示しますと、左の通りになります。

第一版の說

- 人口增加の抑制
  - 積極的抑制 ― 窮困 ― 客觀的
  - 豫防的抑制 ― 罪惡 ― 主觀的

第二版の說

- 人口增加の抑制
  - 積極的抑制 ― 窮困 ― 客觀的
    - (一)避く可からざるもの
    - (二)避け得るもの ― 結果
  - 豫防的抑制 ― 罪惡 ― 原因
    - (一)不正行爲伴ふもの
    - (二)不正行爲伴はざるもの ― 道德的抑制

永久不易の大眞理

さてマルサスの第二版に於て訂正した說は、今日に至るまで學問上の定說となつて居りますが、之に對する反對論又は修正論も數多くあります。併し如何なる反對論と雖も、生物は之を支ふべき生存資料よりも增加する力大なること丈けは、之を否定することは出來ないのでありまして、今日學問上に重大な影響を及ぼして居るダルウキンの進化論も、マルサスの此議論から考へ付いたもので、ダルウキン自らその自叙傳中に其事を告白して居ります。進化論は自然淘汰といふことを土臺とします。生物の中には優劣があります、其優者のみが生き殘つて劣者は段々自然に淘汰されて行きます、此作用があるから生物は段々進化し向上して行くのです。然るに優劣に就て淘汰する爲めに、自然は澤山生命の種を其處に蒔散かして、而して其中の劣者が段々死んで仕舞つて優者のみが殘るのです。つまり此優勝劣敗の淘汰作用を行ふ爲めに、自然は食物よりも生物の方を餘計產まれさすので、手近く申せば、始めから活かす積のない無駄な生命を澤山に生み出すのです。誠に贅澤な話ですが、其贅澤によつて生物に進化と云ふ事があり、向上と云ふことが起るのです。人間も矢張り此の大則に洩れないで、テンデ活きて行ける見込のない人間がドシドシ生れるのです。マルサスは主として人間に就て此道理を發見したのですが、ダルウキンは更に一切の

生物に就て此道理を確め、其に基いて自然淘汰論・生物進化論を唱へ出して、終に今日凡ての學問を支配する樣になりました。さればマルサスは進化論の發端をなした人で、彼の効績は永久不滅と申しても宜しいのです。乍併此論を説明する爲に言つて居る事の中には、今日は最早採るとの出來ない點もあります。

マルサスの所説に三部分あり

マルサスの議論は詳しく解剖して見ますと、三つの部分から成立つて居ります。第一は、人口の增加は食物の增加よりも速かなる傾向を有すと云ふ一の自然的の大法則を説く部分でありまして、是は永遠不朽の眞理であります。彼の説の主要部分は此點に存するのでありまして、他の部分は云はゞ附けたりであります。卽ち第二には、食物の增加は人口に對する需要の增加と看做す可きものであつて、若し人口に對する需要が增さなければ食物は增加せぬ、食物の增加するのは畢竟人口の增加を必要とするからである、土地が收穫遞減の作用を中止して反對に收穫を遞增する樣になるのは、要するに之を以て養ふ可き人口を要するからであると云ふ説であります。此説はマルサス以前にも同樣な事を唱へた人も可成ありまして、殊にマルサスより少し前に英國に起つた大農學者のアーサー・ヤングと云ふ人等は最も熱心に此説を主張致しました。マルサスは第一の説に附帶して此説を稱へました。此説に自然の大則を經濟上に應用した樣なもので、大體に於ては矢張り正しい説だと存じます。土地の收穫は天然上面積に限りあり、人力上豐度の增進に限りがありまして、無限に增せるものではありませんが、然し天然が更に、、より多くの人口を必要とするときは、早晩豐度が增進して收穫は遞增し、餘計な人口を養ひ得る樣になるのであります。人間の側から見れば、あらゆる人智を盡し人力を用ひ土地の改良や耕作法の發達を工夫して豐度を高めるので、是は文化作用・人爲的努力の結果たることは前章に段々御話致した通りでありますが、人は遂に天に勝つこと能はざるもので、天然が餘計な人口を必要としないときは、イクラ人間が奮勉努力しても豐度の增進卽ち收穫の遞增は起り得ないのです。然るに天然が人口の增加を必要とし、餘計な人間の生存することを許すときには、人間の農業上の努力は之に應ずる結果を現はし、資本や勞働を餘計注げば、豐度の增進が起り得るので、人間の文化的努力と雖もつまりは天が之を許し天の大勢が之と合致するときにあらざれば効果はないものです。マルサスは此道理を第二點として主張したものであります。然るに彼は又第三に、右の説を敷衍して、將來に於て人口の供給は天然の需要に超過して不調和を生ずる傾向がある、卽ち歐洲諸國に於ては人口過超と云ふ現象を生ずる大なる虞があると主張しました。而して更に之に附加へて、故に我々は全力を盡して此の人口過超の起ることを豫防するに勉めなければならぬ、若し我々が豫防しなければ、所謂積極的抑制として罪惡や窮困は益々增大することを免れない。人口と食物とは必ず調和しなけれ

ばならぬもので、天然の需要に超過する人口の供給は何等かの抑制によつて必ず取除かるゝと云ふのが人口の法則の教ゆる所である。我々がボンヤリして居れば、天は我々に代つて窮困と罪悪とを以て此抑制を實行する。我々にして此抑制より起る窮困や罪悪の悲惨を免れたいならば、天が抑制するを待つまでもなく、人間が自ら進んで豫防的抑制を實行して、人口過超の起らない樣にしなければならぬ。豫防的抑制中にも罪悪を伴ふ不道徳的のものがある、これは宜しくない、我々は所謂道徳的抑制を實行し、正しく道徳を守り性交上の純潔を保ちつゝ早婚を慎む外はない、然らざれば社會に今も存する窮困と罪悪とは段々増加する一方あるのみであると主張したのです。是は天然の大法則を基として立てた一の道徳訓並に一の政策論であります。而して此はマルサス以後百數十年の今日に至るまでの各國の實蹟に照して考へれば、一の杞憂に過ぎない無益の道徳談であつたと斷言せなければなりません。即ち此點に於てはマルサスは全く誤謬に陥つて居るものです。此點から彼の說を少し吟味して其誤りの依つて基く所を明にして見ませう。

マルサス說の批評

先づ第一に人口の増加は幾何級數的で、食物の増加は算術級數的であると云ふ說は請け取り難いのであります。然し、マルサス自らも後に附錄を附けて、コレハ唯だ事柄を分り易すくする爲めに用ひたので、決して自說の要部ではないと明かに斷はつて居ります。兎に角、人口は二十五年に倍になると云ふ說は、實際の事實に合はないのであります。一寸其のことを說明して見ませう。

人口二倍年數のこと

歐洲學者の研究の結果では婦人は一生の中平均二十二年の間姙娠力を持つて居るものであります。而して此の姙娠力のある年齡の婦人は總人口千人中百六十五人ありまして、其中平均十五人は石婦であります から、差引總人口千に就て百五十人が姙娠力を有する割合になります。ソコデ此二十二年の間に婦人が唯一人しか子供を產まないものとすれば、總人口千に付て出生數一ケ年平均六・八となる勘定であります。其式は

$$\frac{150\times1}{22}=6.8$$

であります。更らに此式によつて算出しますと左の通りになります。

婦人一生中の產兒數	總人口千に付き出生率
二人とすれば	一三・六となる

三人〃	二〇・四五〃	
四人〃	二七・二七〃	
五人〃	三四・九〃	
六人〃	四〇・九〃	
七人〃	四七・七〃	
八人〃	五四・五〃	
九人〃	六一・三六〃	
十人〃	六八・一〃	
十一人〃	七五・〇〃	
十二人〃	八一・八〃	

婦人が二十二年の間、毎年一人づつ子供を産むと致せば、全人口千人に對する出生率は百五十となる譯であります。尤も始終二子や三ツ子を産めば、もつと殖える譯でありますが、ソレは事實にないことですから論外と致します。

出生數から死亡數を引いたものを人口の自然增加と申します（マルサスも移出入の事は省いて論じて居りますから玆には其を省きます）卽ち右の出生數から死亡數を差引かなければなりません。處が出生數が多いと死亡數も又多いのが通例であります。ブレンタノ先生のマルサス人口評論に載せてある計算を左に御目にかけませう。

二倍年數算出表

婦人一人の總產兒數	總人口千に付き出生率	同上死亡率	人口千に付き自然增加率	人口二倍となるに要する年數
一	六・八〇	一五・五〇	減 八・七〇	人口皆無となる數 四四二・二〇
二	一三・六〇	一四・〇〇	減 〇・四〇	同上 一七六四七・〇〇
三	二〇・四五	一五・五〇	減 四・九五	以下二倍年數 一四〇・三八
四	二七・二七	一七・〇〇	一〇・二七	
五	三四・〇九	一八・五〇	一五・五九	六七・八四
六	四〇・九〇	二〇・〇〇	二〇・九〇	四四・八〇
七	四七・七〇	二一・五〇	二六・二〇	三三・五一
八	五四・五〇	二三・〇〇	三一・五〇	二六・八〇
九	六一・三六	二四・五〇	三六・八六	二二・三五
十	六八・一〇	二六・〇〇	四二・一〇	一九・一五
十一	七五・〇〇	二七・五〇	四七・五〇	一六・八一
				一四・九四

十二	八一・八〇	二九・〇〇	五二・八〇	一三・五二
二十二	一五〇・〇〇	四四・〇〇	一〇六・〇〇	六・八八

右表算出に用ひます二倍年數算出の式は

$$2=\frac{3}{3-\log(1000+p)}$$

であります。

ソコデ右の式に基き各國の實際統計に就てブレンタノ先生の算出せられた二倍年數は五一四頁に掲げた表の通りであります。此表の數字は大分前の統計であります。

大正十一年日本帝國人口動態統計記述篇によりますと、最近（大正十一年）の我邦の出生率は人口千に付三四・一六でありますが、諸外國の數字は、今分つて居るのは大正十年が最新でありますから、これと比較する爲めに同年の率を見ますと三五・一でありました。之れに對する諸外國の率は、我邦より多いのは、右書に掲げた諸國には一もありません。何れも我邦より出生率は低いので、唯臺灣丈けが四三・三と云ふ大いなる數を示めして居るのみであります。即ち

$$2=\frac{\log 2}{\log(1000+p)-\log 1000}$$

で、皆無年數算出の式は

	朝鮮	臺灣	樺太	關東州
大正十年	二九・七	四三・三	三一・二	二五・四
同十一年	三二・六	四二・二	—	二六・四

大正十年

	英	佛	伊	獨	墺	洪	瑞西	白	丁
	二二・五	二〇・七	二八・一	二五・三	二二・八	二七・九	二〇・八	二一・四	二四・〇
和	瑞典	諸	西						
二七・四	二一・四	二四・四	三〇・五						

我邦は近年出生率が大分殖え、反對に歐洲文明國の出生率は段々減つて來たのです。是は大に注目に値する重大な現象でありまして、歐洲の識者・學者が頭を痛めて居る所です。殊に此の度の大戰爭で壯年男子が澤山死亡しましたから、愈々以て重要な問題となつて參りました。併し我邦は死亡數は減らないのに、歐洲では出生數は減じましたが死亡數も減りましたから、結局の自然增加の上では我邦は右の振合に參りません。或人の調査によると實際の人口平均一年の增加率（移出入數をも加減して）は北米合衆國が

人口二倍年數表

國名	I 調査の年	II (人口一萬に付)平均出生超過數	III II より算出せる二倍となるに要する年數
1. ニユー・ジーランド	1861—1905	230	30,5
2. ニユー・サウス・ウエールス	1860—1905	216	32,4
3. ウルガイ	1882—1903	214	32,7
4. サウス・オーストラリア	1861—1905	214	32,7
5, クキーンス.ランド	1860—1905	208	33,7
6. アルヂエンチン	1895—1905	183	33,2
7. ヴキクトリア	1854—1905	179	39,1
8. ウエスト・オーストラリア	1861—1905	173	40,4
9. タスマニア	1861—1905	172	40,6
10. ブルガリア	1881—1905	170	41,1
11 露國（歐洲）	1871—1900	151	46,2
12. セルヴキア	1861—1905	142	49,1
13. 那威	1841—1905	140	49,8
14. ザクセン	1841—1905	132	52,9
15. スコツトランド	1856—1905	128	54,5
16 イングランド及ウエールス	1841—1905	123	56,7
17. プロイセン	1841—1905	122	57,2
13. 丁抹	1841—1905	120	58,1
19. バーデン	1841—1900	119	58 6
20. ミシガン	1868—1902	117	59,6
21. 瑞典	1841—1902	112	62,2
22. 獨逸帝國	1841 - 1902	112	62,2
23. 和蘭	1841—1905	111	62,8
24 フインランド	1841 - 1900	107	65,1

國名	I 調査の年	II (人口一萬に付)平均出生超過數	III II より算出せる二倍となるに要する年數
25. ヘツセン	1841—1900	105	66,4
26. 匈牙利	1876—1905	105	66,4
27. ウルテンベルヒ	1841—19.0	102	68,1
28. 白耳義	1841—1905	97	70,3
29. ルーマニア	1861—1905	96	72,5
30. 葡萄牙	1886—1900	96	72,5
31. 伊太利	1866—1905	92	75,8
32. 漢堡	1851—1900	91	76,5
33. 日本	1879—1903	88	79,1
34. バイエルン	1841—1905	84	82,9
35. 瑞西	1871—1905	83	83,8
36. 墺太利	1841—1905	79	88,0
37. マサチユーセツツ	1849—1905	76	91,5
38, エルサス・ロトリンゲン	1841—1905	73	95,2
49. コネクチカツト	18 3—1903	71	98,1
40. 希臘	1864—1883	69	100,8
41. 愛蘭	1866—1905	66	105,6
42. 西班牙	1861—1870 1881—1905	64	108,6
43. ロード・アイランド	1874—1900	55	126,4
44. 智利	1880—1905	54	128,7
45. メーン	1892—1904	46	151,0
46. ヴアーモント	1871—1900	46	151,0
47. 佛國	1841—1905	22	316,9
48. メキシコ	1895—1901	2	3464,1

第一で千に付一九、我邦が二番で一四・七八、露國が一三・七、獨逸が一三・六、墺洪國が八・七、英國も八・七で、佛蘭西は僅か一・八であると申すとであります。此勘定で申すと我邦は四十八年で人口が二倍となり得る譯で、右表の七十九年よりはズット短かくなつたのですが、それでもマルサス說の二十五年の二倍かゝる譯です。米國は三十五年計で二倍になる勘定です。マルサスの人口論の出た十八世紀末の我邦の人口は大約二千五百萬計りありました。私共子供の頃小學校で謠つた唱歌では三千餘萬兄おとどもよと申て居りましたが、今日（大正十二年推計）は五千八百五十萬（領土を合算すると八千七十萬人）となつて居ります。餘程殖えたものですが、それでもマルサス以後百二十年餘もかゝつてやつと倍になつたのであります、中々以て二十五年二倍抔の話ではありません。歐洲諸國何れも左樣であります。故にマルサスが人口は二十五年に倍になると申し之に基いて幾何級數と算術級數とを說いたのは當らないのであります。

マルサス說の價値は減ぜず

併し此點を捨たとてマルサスの說の價値は減ずるものではありません。マルサスは唯一つの說明として擧げたので、且つ實際に於ける人口の增加はマルサスの論じた各種の抑制の既に働いた結果でありますから、此を以てマルサスの論を打破ぶる譯には行きません。我邦でも歐洲諸國でも食物增加に調和す可く豫防的抑制や積極的抑制が行はれて居たからこそ、百年も百二十年もかゝらなければ人口が倍にならなかつたので、食物が大に增加すれば其抑制の力は弱くなつて人口は著しく增加することは疑ひを容れません。歐洲諸國でも我邦でも人口の增加は近年になつて著しくなつたのであります。

我邦人口增加の大要

我邦の人口數に就ては故横山由清翁は『本朝古來戸口考』と云ふ論文に我邦の人口を左の通りとして居られます。

弘仁十四年	（八二三）四曆	三、六九四、三三一
貞觀以降	（八五九）以後	三、七六二、〇〇〇
天曆以降	（九四七）	四、四一六、六五〇
文治以降	（一一八五）	九、七五〇、〇〇〇
延享元年	（一七四四）	二五、六八二、二二〇
寛延元年	（一七四八）	二五、九一七、八三〇

寶暦六年（一七五六）　二六、〇六一、八三〇
文化元年（一八〇四）　二五、六二一、九五七
明治六年（一八七三）　三三、三〇〇、六七五

又た井上瑞枝氏は『大日本古來人口考』に於て左の如く擧げて居られます。

御代	年紀（神武紀元）	人口數
崇峻天皇二年	1249	3,931,152 4,031,050 4,988,842
推古天皇十八年	1270	4,990,000 4,969,899
元正天皇養老五年	1381	4,584,893
聖武天皇自神龜元年至天平二十年	1384—1408	8,000,000 2,000,000 4,899,620 8,631,074 4,508,551 8,631,770
嵯峨天皇弘仁四年	1473	3,694,331
清和天皇貞觀以後 醍醐天皇延喜以前	1520以後 1560以前	3,762,000
醍醐天皇延長元年	1583	1,12 ,167
村上天皇天暦以後 一條天皇正暦以後	1610以後 1650以後	4,416,650
後宇多天皇弘安年間	1938—1947	4,484,828
後奈良天皇天文二十二年	2213	22,330,996

人口數
24,000,000
24,994,606
26,065,422 26,548,99 , 26,921,816
26,153,450 26,162,230 2 ,682,220
25,926,720 25,917,830 25,920,830
26,080,000 24,061,830
24,891,441 25,471,033 25,621,957 25,455,842 26, 17,729
27,201,400 27,063,907 21,441,646 26,602,110
27,201,400 25,000,000
31,866,389

本庄博士の『德川幕府の米價調節』に附載せられた同博士最近の調査を參考として左にあげて置きます。

御代	年紀（神武紀元）
靈元天皇	2325—2346
東山天皇	2348—2366
中御門天皇 享保六年 同十一年 同十八年	 2381 2386 2393
櫻町天皇 延享元年	2404
桃園天皇 寛延三年	2410
寶暦元年 同六年	2411 2416
光格天皇 寛政四年 同十年	 2452 2458
文化元年	2464
仁孝天皇 文政十一年 天保五年 弘化三年	 2488 2494 2506
孝明天皇 嘉永五年 安政三年	 2512 2516
明治天皇 治明五年	2532

年代	西暦	人口總數	指數
享保十年	1721	26,065,425	98.17
同十一年	1726	26,548,998	100.00
同十七年	1732	26,921,816	101.02
延享元年	1744	26,153,450	93.51
寛延三年	1750	25,917,830	97.24
寶暦六年	1756	26,061,830	98.16
同十二年	1762	25,921,458	97.25
明和五年	1768	26,252,057	98.88
安永三年	1774	25,990,451	97.51
同九年	1780	26,010,600	97.57
天明六年	1786	25,086,466	94.49
寛政四年	1792	24,891,441	93.71
同十年	1798	25,471,033	95.93
文化元年	1804	25,517,729	96.11
同十三年	1816	25,621,957	96.50
文政十一年	1828	27,201,400	102.45
天保五年	1834	27,063,907	101.93
弘化三年	1846	26,9 7,625	101.35

右によりますと十九世紀の中葉弘化三年にはやつと二千六百六十萬に過ぎなかつたが明治五年卽ち千八百七十二年には三千二百萬となり、其以後駸々として增加して今日の五千三百萬となつたので、明治五年からザツト四十年の間に二千餘萬殖えたのは、開國進取の結果人民を養ふ國力が大に增進して各種の抑制の力が弱くなつたからと存じます。卽ちマルサス說の第二の部分に當る事實を證明して居るもので人口に對する需要が增したものであります。英國の如き現にマルサスは七百萬として居りますが、(千八百〇一年の實數英蘭及ウエールス全人口數八百八十九萬) 今日は英蘭丈けでも三千五百萬、之に蘇格蘭、ウエールスを加へれば四千萬以上の人口があります。卽ち十九世紀中に於て人口は殆んど四倍になつたのです。ポーター氏の『英國民の進步』に揭げた英蘭及ウエールス人口數表を左に御目にかけます。

英國人口增加の大要

年	人口總數	年	人口總數
一八〇一	八、八九二、五三六	一八六一	二〇、〇六六、二二四
一八一一	一〇、一六四、二五六	一八七一	二二、七一二、二六六
一八二一	一二、〇〇〇、二三六	一八八一	二五、九七四、四三九
一八三一	一三、八九六、七九七	一八九一	二九、〇〇二、五二五
一八四一	一五、九一四、一四八	一九〇一	三二、五二七、八四三
一八五一	一七、九二七、六〇九	一九一一	三六、〇七五、二六九

右によりますと千八百一年の英蘭及ウエールスの人口と千九百〇一年の其と比べると此百年間に二十六割五分八厘增加したので、其最も增加の著しかつたのは千八百十一年から二十一年に至る十年間(一割八分)と千八百七十一年から八十一年に至る十年間(一割四分四厘)であります。我邦が二千七百萬の人口を有して居た十九世紀の中葉には英蘭及ウエールスの人口は千八百萬に過ぎませんでしたが、明治四年には二千二百萬となり今日は三千六百萬になつて居ります。國が富み榮えて來れば人口は著しく增すことは是でも分ります。國が富めば人口を養ふ力が殖えます。此力が殖えれば人口は又た之に應じて殖えるのです。卽ち人口に對する天然の需要が增加するのであります。故に二十五年倍加は少し言過ぎては居りますが、大體の趨勢に至つては誠にマルサスの主張した通りで、キツチリ二十五年にならないからと大威張りでマルサスの誤謬を證明し得た等と公言するのは見つともない事ですが、隨分世間には此くの

如き淺薄な揚足取りを好む學者があります。此類の學者は自分で研究もせずブレンタノ先生の御説等を生嚙りにして、マルサスに統計上の誤謬あり抔と誇り顔に申します、片腹痛いことであります。二十五年を改めて三十年とし五十年としたとて一向差支ありません。唯だ人口の殖えんとする勢は食物增加の力よりは遙かに大であることさへ證明し得れば宜しいのです。幾何級數の算術級數のと申すには及ばないのです。

北米合衆國人口增加の大要

殊にマルサスが二十五年に二倍になる例とした北米合衆國人口の增加は其以後左の通りであります（白人・有色人の合計をあげます）。

年	人口總數	一ケ年平均增加百分率	年	人口總數	一ケ年平均增加百分率
一七九〇	三、九二九、二一四		一八六〇	三一、四四三、三二一	
一八〇〇	五、三〇八、四八三	—	一八七〇	三八、五五八、三七一	三・五六
一八一〇	七、二三九、八八一	三・五一	一八八〇	五〇、一五五、七八三	二・二六
一八二〇	九、六三八、四五三	三・六四	一八九〇	六二、九四七、七一四	三・〇一
一八三〇	一二、八六六、〇二〇	三・三五	一九〇〇	七五、九九四、五七五	二・五五
一八四〇	一七、〇六九、四五三	三・二七	一九一〇	九一、九七二、二六六	二・一〇
一八五〇	二三、一九一、八七六	三・五九			二・〇七

マルサスの時代に三百萬であつた總人口は其後百二十年かゝつて九千二百萬に殖えました、即ち約二十三倍になつたので無論マルサスの申した通り三十二倍にはなつては居りませんが、三十年に倍になると云つたとすれば十六倍に當る勘定で、二十三倍は其れよりズツト多いのであります。無論之は米國で生れた人口の增加許りでなく澤山の移住民が含まれて居りますが、兎に角米國は二十三倍の人口を養つて行けるのであります。米國は新進の國で食物增加の力が大でありますから、從つて右の通り人口が殖えたのでマルサスの説を確めるとも之を打破る例でないことは明であります。

道德的抑制の事

次に、マルサスが第一版に於て人口增加の抑制は窮困と罪惡と丈けだと申したのは無論言ひ過ぎでありまして、第二版に於て改めた説の方が遙かに宜しいのです。殊に道德的抑制に重きを置き、天然の力にの

み支配せられるものでなく、人間の意志の力を以て此悲慘な運命を免れ得るものとして、極端な悲觀説を緩和したのは大に取る可き點であります。ブレンタノ先生はマルサスに心理上の誤りありと主張して居られます、即ち人間男女の慾情を一定不易のものと認たのは大なる誤りである。文明の進歩につれ此慾情は著しく減ずるものであると申されます。此點は既にゴドウキンがマルサスに反對して極力主張したことでありまして、私も此點に於てブレンタノ先生並にゴドウキンの説に從ふ可きものであると存じて居ります。

歐洲に於ける出生率の減少

最近歐洲諸國に於て出生率が目に見えて減じて居ることは誰も知つて居る事實です。此點に於て佛國が一番先輩であります、今表にして御目にかけます。

毎五年平均一ヶ年の佛國出生率（人口千に付き生産）

年	出生數	年	出生數
一八〇六—一〇	三一・七	一八六六—七〇	二五・九
一八一一—一五	三一・七	一八七一—七五	二五・五
一八一六—二〇	三二・〇	一八七六—八〇	二五・三
一八二一—二五	三一・五	一八八一—八五	二四・七
一八二六—三〇	三〇・五	一八八六—九〇	二三・一
一八三一—三五	二九・六	一八九一—九五	二二・四
一八三六—四〇	二八・四	一八九六—一九〇〇	二二・〇
一八四一—四五	二八・一	一九〇一—一九〇五	二一・三
一八四六—五〇	二六・七	一九〇六—一九一〇	一九・九
一八五一—五五	二六・一	一九一一—一九一五	一六・二
一八五六—六〇	二六・六	一九一六—一九二〇	一四・〇
一八六一—六五	二六・七		

（一九一四年以後は大戰の爲め特に出生率は減じましたが、最近は反對に回復しまして、一九二一年即ち大正十年には、二〇・七に激增して居ます）

即ち千八百二十一年以降（六十一年代を除き）出生率は年々減少する許りであります。之は佛蘭西許りの特殊現象である樣に考へて居た人もあり、又一時的部分現象である樣に思つて居た人もありましたが、

間もなく英國でも矢張同じ樣な傾向が現はれました。卽ち英蘭及ウエールスでは千八百四十一年から七十五年に至る迄は出生率は段々增加して居たのですが、七十五年に人口千に付き三五・五と云ふ極點に達し、其以後は反對に段々減じ始めたのです。獨逸も英國ほどではありませんが、千八百八十年の三九・二を極點とし其以後は段々減少を示して居ります。左表を御覽下さい（毎五年づつの平均數です。一九一四年後は戰爭の影響が大なることは無論です）。

英獨出生率の比較

年	英蘭及ウエールス	獨逸	年	英蘭及ウエールス	獨逸
一八四一—四五	三二・三	三六・七	一八八一—八五	三三・五	三七・〇
一八四六—五〇	三二・八	三五・六	一八八六—九〇	三一・四	三六・五
一八五一—五五	三三・九	三四・五	一八九一—九五	三〇五	三六・三
一八五六—六〇	三四・四	三六・〇	一八九六—一九〇〇	二九・二	三六・〇
一八六一—六五	三五・一	三六・八	一九〇一—〇五	二八・一	三四・八
一八六六—七〇	三五・三	三七・五	一九〇六—一〇	二六・一	三一・六
一八七一—七五	三五・五	三八・九	一九一一—一五	二三・六	二六・〇
一八七六—八〇	三五・四	三九・二	一九一六—二〇	二〇・二	一九・二

其他諸國に於ける出生率

其外墺太利・匈牙利・瑞西・伊太利・濠太剌利亞等、何れも近年に至つて出生數の減少を示して居ります。我邦も明治四十四年（三四・一）迄は增加の傾向を示し、其以後極めて僅かではありますが減少の傾向がありましたが、大正九年（一九二〇）には增進しました。

年	墺太利	匈牙利	瑞西	伊太利	濠洲	日本
一八七一—七五	三九・三		三〇・三	三六・九	三七・三	二三・〇
一八七六—八〇	三八・七	四四・三	三一・五	三七・〇	三六・三	二五・二
一八八一—八五	三八・一	四四・六	二八・九	三七・八	三五・二	二七・四
一八八六—九〇	三七・六	四三・五	二七・六	三七・三	三四・四	二九・二
一八九一—九五	三七・三	四一・七	二七・八	三五・九	三一・五	二八・六
一八九六—一九〇〇	三七・〇	三九・四	二八・六	三三・九	一七・三	三一・〇
一九〇一—〇五	—	三七・二	二八・一	三二・四	二六・三	三一・八四
一九〇六—一一	—	—	—	—	—	三二・九八
一九一二	三一・三	三六・一	二四・一	三二・四	—	三三・三

一九一三	二九・四	三四・四	二三・一	三一・七	—	—	三三・二
一九一四	一七・一	三四・六	二二・五	三一・〇	—	—	三三・七
一九一五	—	三三・六	一九・五	三〇・五	—	—	三二・一
一九一六	—	一四・三	一八・七	二四・一	—	—	三二・七
一九一七	—	一三・四	一七・六	一九・〇	—	—	三二・三
一九一八	一四・四	—	一八・四	—	—	—	三二・二
一九一九	一七・九	二七・四	一八・七	二一・〇	—	—	三一・六
一九二〇	二二・四	三一・二	二一・〇	二九・四	—	—	三六・二
一九二一	二二・八	二七・九	二〇・八	二八・一	—	—	三五・一
一九二二	—	—	—	—	—	—	三四・二

我邦の出生率

大正六年内閣統計局刊行の『大正二年日本帝國人口動態統計略說並死因統計略說』第一六・一七頁・に我邦の出生率のことを、左の通り說いてあります。

大正二年の本籍生產（死產に對して云ふ出產）總數は一、七七八、一〇六人にして、之を前年に比すれば二一、五五三人を增したり。（中略）內地生產總數は一、七五七、四四一人にして、前年に比すれば一九、七六七人を增せり。其千に對する生產率は三三・二一％となり、之を前年に比すれば〇・一〇％の減に當れり。

本邦の生產率は嘗て甚だ高きものにあらざりき

明治七年より同十一年に至る平均は二五・二〇％

にして、次の五年平均も等位なりしが、二七・三四％

同十七年より二十一年に至る平均は二八・六一％

となり、三〇・一六％

次の五年平均は又上りて

又次の五年平均は（明治三十一年に終る）三二・二〇％

に上れり。以上は本籍人口に對する本籍人生產の比例なり。爾後現在人口に就て見るに上昇の趨勢は依然として昂まり。

明治三十二年より三十六年に至る平均は二八・七八％

に上りしが、玆に生產率の一頓挫を見たるは、彼の日露戰後にして、從來一高一低せる生產率は玆三十七年以降大

に低下し、三十九年に至りて、最も甚しく三一・三六％

其の率

の低きを見たり。夫故に

明治三十七年より四十一年に至る平均は

に低下したり。斯くも低率を現したる後を受け、最近の五年平均は反動的に上昇したり、即ち四十年以後隆々として上り、

F. II, 34.

四十四年には實に前に四倍なきてふ高率をも現したり。夫故に

大正二年を終とせる五年平均は　三三・六六％

なる高率を呈したり。併し乍ら此最近五年を細觀するに、四十四年を頂上として、前後に山脚を引ける山を現す。而して其の山脚は前に於ては頗る緩にして後に於ては急なり。其前に緩なるは四十年・四十一年の上昇ありて四十二年は既に頂巔に近づきたる爲なりしなり。然れば戰後盛なりし國民發展の趨勢は、四十四年の高率に至るまで發現し、同年の高率を極點として爾後低下するに至れるか。抑又此の低下も一時の現象にして、軈て再び上昇するの前提なるか。之を他國の事實に比するに、彼の獨逸が普佛戰後國民發展の趨勢に促され、一時隆々として上昇せる生産率も、軈て千八百七十六年の四二・六％を極點として爾來漸を逐ふて低下したり。是普佛戰役を一動機として進展せる國民經濟の大變化に伴ふ自然の趨勢なり。本邦の日露戰役は之を獨逸の普佛戰役と比すべし。獨逸の四十餘年前と本邦の今日と國民經濟の狀態果して如何の逕庭ありや、思ふて玆に至れば僅かに一兩年の生産率低下も有意味の暗示なるが如く感ぜらるゝなり。敢て記して之後攻に待たんと欲す。

最近の生産率

大正五年の生産率は三二・六八でありまして、漸落の有樣を呈して居ります。之に就て大正八年刊行の『大正五年日本帝國人口動態統計』の概説第三・四頁に左の通り論じてあります。

本邦の生産歩合は、嘗て甚だ高からざりしが、高低起伏の間にも自ら上昇の歩武を取り、日露戰役以後は殊に隆々として上り、明治四十四年には三四・一てふ實て見ざる高率に達したるに、其の翌年より下降し（大正三年に小隆起ありたれども）遂に本年の低位を見たり。（中略）出生歩合の低下には、其の直接の原因として先づ婚姻歩合の低下を認む可く、婚姻歩合或る一定位に達して又甚しく下らざるに至れるとき、玆に姙孕力の減耗を著明に現ずるを常とす。惟ふに本邦現時の出生歩合低下は、未だ之を歐洲諸國の出生減耗と比すべきものにあらざるべし。近き既往の最高生産歩合（明治四十四年）を一〇〇と爲したる六年後の大正五年の指數は九六・四八に當り、婚姻歩合の近き最高（明治四十一年）を一〇〇と爲したる六年後（大正二年）の指數は八七・一二に當れり。即ち婚姻歩合の低下の度合は生産歩合に比して遙かに强し。（中略）現時の出生歩合低下は尙未だ姙孕力減耗を徵知するに至らざるものと看做す可きか。

然るに、右の漸落の傾向は大正八年で底を入れ、大正九年には飛躍しましたが、大正十・十一兩年は、再び山を降り始めて居ます。左に前に申上げた最近出版の動態統計記述篇に掲げてある圖表を借用して御目にかけて置きます。

マルサスの政策、道德論は取る可からず

右の事實に徵しますと、マルサスが其人口の法則から演繹して第三點として政策論を立て將來歐洲に於て人口過超に苦しむだらうから、道德的抑制を行つて之を防ぐ必要があると申したのは、全く杞憂に屬し

で、今日に於ては歐洲の識者は何れも出生數の減少を大に苦に病んで居る有樣で、此點から申せば、マルサスの豫言は全く外れたものと申さなければなりません。

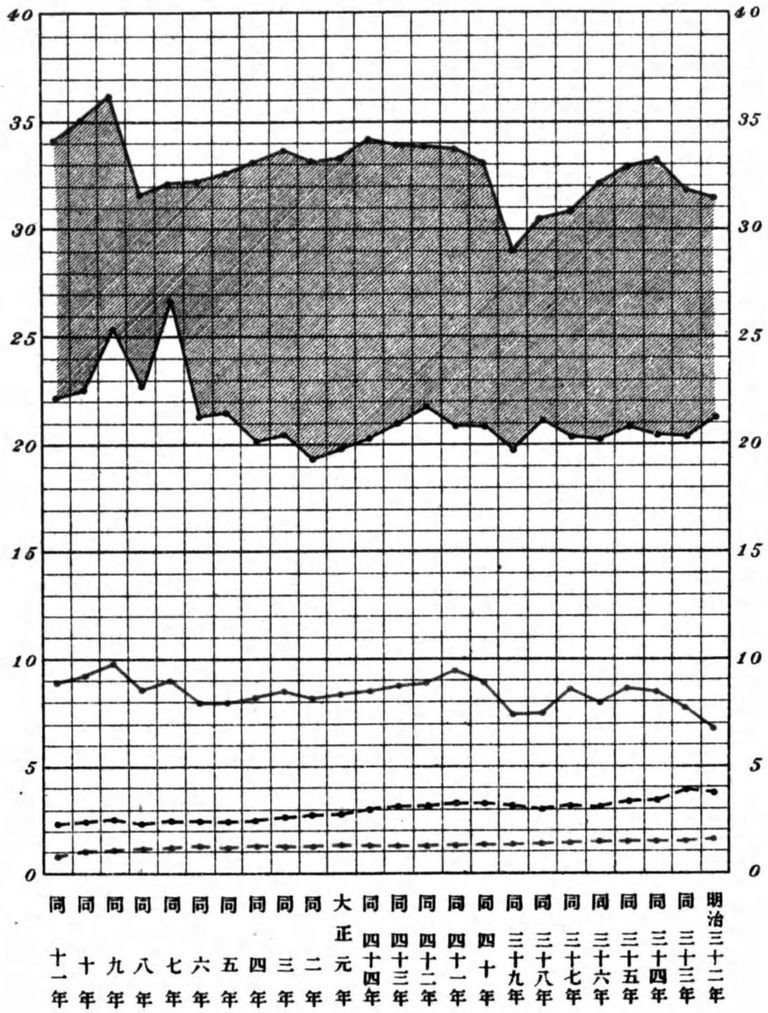
出生率減少の原因

さて斯く出生數の減少するには、二つの原因があり得るのです。第一は結婚數の減少で、第二は夫婦間産兒數の減少であります。歐洲文明先進國・北米合衆國及濠洲等に於きましては、近年此兩方とも大體に於て減少の傾向を示して居るのであります。我邦も最近少しく其傾向を示して居ります。高野博士最近の名著『本邦人口の現在及將來』四十九・五十頁に載せてある表を左に借用して掲げて見ませう。

歐洲並に本邦に於ける結婚率

人口千に付十ケ年平均一年の結婚數

	一八四一—一八五〇年	一八五一—一八六〇年	一八六一—一八七〇年	一八七一—一八八〇年	一八八一—一八九〇年	一八九一—一九〇〇年	一九〇一—一九〇五年
匈牙利	—	—	—	一〇・二	九・五	八・七	八・六



セルヴヰア																
歐露西亞																
英蘭	八・〇	八・五	八・四													
蘇格蘭			七・〇													
愛蘭			五・二 (4)													
瑞西																
伊太利																
瑞典	七・五	七・六	六・五	六・六	七・四	八・六	八・二	七・八	八・五	八・六	八・〇	七・九	七・五	八・二	七・三	六・六
那威	七・八	七・七	六・六	七・二	七・九	八・四	八・六	八・〇	八・一	七・二	四・七	七・七	七・七 (5)	七・九	六・八	六・五
丁抹	七・九	八・八	七・四	七・二	六・八	七・七	七・七	七・八	七・八	七・八	七・三	七・〇	七・九	七・三	七・〇	七・九
墺太利	八・二	七・六	八・六	八・四	八・〇	七・八	七・八	七・四	七・一	七・三	七・五	七・一	七・三	七・五	七・一	八・〇
獨逸	八・一	七・八	八・五	八・六	八・六	八・〇	八・二	七・五	八・二	八・二	七・二	七・七	七・七	七・五	八・一	八・〇
佛蘭西	八・〇	八・〇	七・八	七・九	七・三	七・一	七・四	七・九	七・五	七・六	七・六	七・六	七・五	七・六	七・五	七・八
和蘭	七・四	七・九	八・二	八・一	七・三	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇
白耳義	六・八	七・四	七・五	七・五	七・〇	七・一	七・一	七・〇	七・九	七・九	七・九	七・九	七・九	七・九	八・一	八・一
西班牙	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

ルーマニア	—	—	六・九	六・四	七・二	七・一	八・一
ブルガリア	—	—	—	—	—	—	一〇・〇
日本	—	—	—	—	八・三	八・八	八・二

(1)一八九一—九九年、(4)一八六四—七〇年、(7)一九〇一—四年、(2)一八九一—九七年、(5)一八七二—八〇年、(8)一九〇一—三年、(3)一九〇三年、(6)一九〇一—三年、(9)一八八六—九〇年、

博士は濠洲と米國とを擧げて居られませんから、ブレンタノ先生のマルサス評論から左の通り算出して見ました。

濠洲及北米に於ける結婚率

人口千に付一ヶ年平均結婚數（毎五ヶ年平均）

年	全濠洲	クインスランド	コネチカット	マサチユーセツツ	ロードアイランド
一八六一—六五	八・五	一三・五	八・〇五	九・三	—
六六—七〇	七・六	九・〇	九・二五	一〇・四五	—
七一—七五	七・三五	八・七五	八・五	九・九	一〇・四
七六—八〇	七・三五	七・三	七・三五	七・八	八・九
八一—八五	七・八	八・六	七・九	九・三	八・九五
八六—九〇	七・四	八・四五	八・一	九・三	九・〇五
九一—九五	六・四五	六・五五	七・四五	九・二五	九・二
九六—一九〇〇	六・九	六・六	七・六五	八・七	八・二五
一九〇一—〇五	七・四五	六・一	七・五五	八・九	—

我邦の結婚率は左の通りであります。

人口千に付き毎五年平均一ヶ年の結婚數

明治一七—二一	七・九三	明治三二—三六	七・八七
二二—二六	八・三九	三七—四一	八・二七
二七—三一	九・六七		

明治四十一年は最高率九・三二を示しましたが、其以後は段々低落しました。即ち

四十二年	八・八〇%
四十三年	八・七四%

四十四年	八・四二%
四十五年〜大正元年	八・二五%
大正二年	八・一五%

となりました。是れに就て前掲の『統計略說』に左の如く說いてあります。

四二―大正二年此五年の平均八・四七%と爲り、寧ろ前五年の平均よりも高し。故に曰く、本邦の婚姻率は概して上昇したれ共、近き五年に於ては漸次下降せり。即ち明治三十二年より同三十六年に至る五年平均と、次の三十七年より四十一年に至る五年平均との差は〇・五六%の上昇なれ共、三十七年より四十一年に至る五年平均に對する四十二年より大正二年に至る五年平均の差は〇・一九%の上昇に過ぎず。知らず今後の婚姻率は此下降の狀態を繼續するか將何等かの變化を見るか、注意す可き所なりとす。

大正二年の婚姻率を地方別に見るに

青森縣の	九・八二%	最も高く
宮城縣の	九・三六%	之に次ぎ
富山縣及靜岡縣の共に	九・〇九%	
新潟縣の	九・〇五%	等其高きものに屬す。
岩手縣の	八・九六%	
石川縣の	八・九四%	
埼玉縣の	八・九二%	
大阪府の	六・五五%	最も低く
長崎縣の	七・一二%	之に次ぎ
宮崎縣の	七・三三%	
京都府の	七・三七%	
鹿兒島縣の	七・四六%	等其の低きものに屬せり。
神奈川縣及兵庫縣の共に	七・五二%	
東京府及沖繩縣の共に	七・五九%	

而して此高低の狀は殆ど年々相似たり。然れば本邦の婚姻率は北に高く、南に低く、而して又大都會を包有する地は低きものゝ如し。

然るに大正五年の結婚率は底を入れて七・八五に下りましたので歐洲と同じ傾向が聊ながら窺はれたのでありますが、其後歐洲にても結婚率が大分增加しつゝあり、我邦は左程著しくはありませんが、稍々强氣配を示しつゝありまして、大正十一年には九・〇に昇つて居ます。これは歐洲に於ては戰爭の影響が大いに關係あることで、常態を以て見ることは出來ません。我邦のは、寧ろ常調を以て見る可きであると存じます。參考の爲め二三の數字をあげて置きませう。

人口千に付結婚數

年次	日本	英國	佛國	獨逸
一九〇六	七・三	七・五	七・八	八・二
一九〇七	八・八	七・六	八・〇	八・一
一九〇八	九・四	七・一	八・〇	八・〇
一九〇九	八・八	七・二	七・八	七・八
一九一〇	八・七	七・三	七・八	七・七
一九一一	八・四	七・四	七・九	七・九
一九一二	八・三	七・四	七・五	七・七
一九一三	八・二	七・六	四・二	六・八
一九一四	八・四	九・四	一・九	四・〇
一九一五	八・二	七・一	二・七	四・一
一九一六	七・九	六・五	四・〇	四・七
一九一七	八・〇	七・一	四・四	五・三
一九一八	九・〇	九・五	一三・四	一三・四
一九一九	八・六	八・一	一五・九	一四・五
一九二〇	九・八	—	一一・七	一一・八
一九二一	九・一	—	—	—
一九二二	九・〇	—	—	—

一配偶産兒數の減少

次に夫婦間の産兒數は如何かと見ますに、十五歲より四十九歲に至る婦人千人に付英國では千八百四十六年以後毎十ケ年の平均一ケ年餘婚婦十人に對する公生兒の數は、二四二、二四四、二五二、二五〇、二二九、二〇三と云ふ樣に減じて居ります。獨逸では千八百七十六年以後毎十ケ年平均は二六八、二五八、二四三、佛國では千八百四十六年以後同じく、一七九、一七二、一七二、一六七、一五〇、一三四、伊太利では千八百七十六年以後同じく、二四八、二四九、二三二と云ふ風で、何れも減少の傾向を現はして居ります。我邦に就ては、前段の引用句中にある通り、婚姻率の指數八七・一二生産率指數六九・四八から推定して、一配偶産兒數は減少したものとは云へぬと存じます。

結婚數減少の原因

即ち文明國近來の大勢としては第一に結婚者の數が減少し、第二に結婚して居る人々が産む子供の數も減少する傾きがあると申して宜いので、我邦は例外に屬するのであります。結婚數の減少にも色々原因はありませうが、ブレンタノ先生は之を以て、マルサスが男女の慾情は一定不易のものだと主張したことの

誤りなるを示して餘ある現象であると申して居られます。先生は文明の進歩殊に富の增進に伴つて出生數の減ずる所以を審らかに論じて居られます。併し私の考へではブレンタノ先生は少々無理な非難をマルサスに加へて居られるものと存ぜられます。即ち先生は以上の事實をあげて、マルサスが生殖慾は一定不變だと云つたのは間違である。一體男子には生殖慾と云ふとは寧ろ甚だ弱いので、性交慾が強いのである。女子は生殖慾と子供に對する慾が強く、性交慾は男子に比すれば少いものだと申して居られますが、マルサスも決して生殖慾とは申して居りません、男女間の慾情 Passion between the sexes と申して居るのですから、ブ先生の非難は多少的を外れた嫌があります。然しブ先生の申さるゝ通り、其性交慾も又決して一定不易のものとは申されませんので、此點はマルサスの誤謬と斷定せなければならぬかと私も存じて居ります。ソコで斯く結婚數の減少するのは、マルサスの所謂道德的抑制の大に行はるゝ證據であるか否かと云ふことが問題になります。即ち歐洲の人間が、事實に於てマルサスの忠告に從つて道德的の豫防抑制を行ふことが、結婚數の減少となつて現はれたものならば、其論の立て方には誤謬があつても、其歸着點に於ては以上の事實はマルサスの議論を打破るドコロか却つて之を裏書する譯であります。然にブレンタノ先生は結婚數の減少は決して道德的抑制の結果ではないと論じて居られます。先生は結婚數減少の原因を列擧して、一　上流社會にあつては職業に對する準備が段々程度を高めて來る爲中々結婚が出來なくなること、二　文明の進歩に伴ひ家族を養ふとが段々困難となること、三　婦人の地位の向上すること四　男女の交り以外の娛樂の數が殖えて來たこと、五　教育知識が進むにつけて適當の配偶を見出すことが段々困難となることの、五原因を數へて居られます。此は何れも左樣ある可きことゝ存じます。而して此等は直ちに目して道德的抑制と云ふことの出來ないことは、ブ先生は佛國の統計をあげて、男女の貞操に關する犯罪が段々增加して行くのを見ても知れると申して居られます。故にマルサスの所謂道德的抑制でなく、矢張彼に言はせれば罪惡に屬するものが殖えて來たのであります。

配偶間産兒數減少の原因

次に夫婦間産兒數の少いとに就ては、ブ先生は、一　生殖器病の增加　二　精神病者の增加の二原因を擧て居られます。即ちマルサスに言はせれば罪惡と窮困の增加に外ならないのでありますが、實際に於て猶一の大なる原因は、彼の二兒制度とか一兒制度（夫婦間に二子又は一子しか生まない樣にすることを云ひます）とか申して、實は避姙（産兒制限・反姙（バース・コントロール　コントラセプション）などと申す）と云ふことが盛んに行はれることであります。是もマルサスに言はせれば慥かに罪惡に屬するのであります。

罪惡と窮困の增進を意味す

新マルサス主義と申すのは、寧ろ避姙を慫慂するのでありまして、名はマルサスを冠して居りますが、實はマルサス本來の趣意とは却つて全然反對のことを主張するもので、マルサスは自分の名を其んな事に利用せられるのを、草葉の蔭で大に憤つて居ることゝ存じます。ソコデ、ブレンタノ先生は以上の事實をあげてマルサスは心理上の誤謬に陷つて居る、又た彼の道德的抑制論は少しも行はれて居らぬと主張して居られますが、私は恩師の御說ではありますが、此には賛成致し兼ねるものであります。成程性交慾は何時も一定不易だと前提するのは間違ひでありますが、歐洲に於ける結婚數の減少は直ちに性交慾減少の確證とは申せまいと存じます。結婚を差控へ、又た結婚しても出生を差控へるは、生殖慾の減少には相違ありませんが、性交慾の減少とは申せないと存じます。文明の進步・敎育知識の進步の爲めに、性交慾の抑制も大分行はれるには相違ありませんが、之を數字的に調査することは殆んど不可能と存じます。故に以上丈けの事實を以て、マルサスの性交慾論は人間の心理を誤解したるものなりと一概に斷言することは無理な樣に存じます。而して道德的抑制は一向行はれ居らぬ、道德的意味のない原因によつて結婚數も減じ產兒數も減ずるのだと云ふブレンタノ先生の御論は如何にも御尤も千萬でありますが、其は些しもマルサスの誤謬を立證するものではない樣に考へます。道德的抑制が行はれないで、男女に關する犯罪が殖えたり、生殖器病が殖えたり、避姙の風が普及したりして、出生數の減ずるのは、卽ちマルサスの所謂窮困と罪惡とが行はれて、人口の增加を抑制して居ることを却つて證明するものではありませんか。私は左樣に解釋して、此點に於てマルサスを誤れりと言ふことは出來ない、否却つて彼の說は彼の死後百何十年の歐洲の實際によつて益々確められたものと觀察する方が、眞理に合するものと考へて居ります。

人口過超の杞憂

私の考へでは、マルサスの說の中で明かに誤謬と目す可きは、將來必ず人口過超の事實が起ると豫言し、人口の將來を悲觀した一點のみにあることゝ存じます。其他に於ては大體に於て彼の人口の法則は動かす可からざる大眞理であると思ひます。ソコで今日實際の問題としては、人口の過超を憂ふると云ふことは無用の事でありまして、各國各々國を世界の表に立てゝ居る現在に於ては、人口の增加は卽ち國力の增進を意味するもので、マルサスの考へた如く、畢竟天が人口の增加を許し人口に對し需要を多くする所以で、佛國の如く人口增加の遲々たる國こそ却て甚だ憂慮す可く、我邦の如く人口增加率の殖えて行く國は大に喜ぶ可き次第であると言はねばなりません。生めよ殖えよ地に充てよとエホバの神樣が仰せられ

たことは今日の國家に直ちに當てはめ得可き鐵則かと存じます。此意味に於てマルサスの樣な心配は無用の杞憂であつて、殊に新マルサス主義等と云ふ說は國家に害のある俗論愚說として、斷然排斥す可きものと存じます。佛國を始め人口增加の少い國では、其の反面に於て其れ丈け罪惡が行はれ、窮困が存して居るのであつて、國として甚だ希はしからざる次第であります。我邦の新らしい男とか女とかゞ一知半解的に新マルサス主義を唱ふる反面にも、亦此意味の罪惡と窮困との蔓延を意味して居りはしませぬか、果して然りとするなれば、其れこそ誠に有害不健全な思想として斥けねばならぬと確信致します。此は文明の弊とこそ申す可けれ、決して新らしい思想でも何でもありません。

死亡率の減少を尙とす

さて、同じく人口の增加するに付ても死亡率は減ぜないで出生率が甚だ高い爲め人口增加するよりは、出生率は餘り殖えないでも死亡率が著しく減ずる結果として人口の自然增加の多い方が遙に健全なる狀態で、我邦の現狀は此點から申すと未だ以て安心することが出來ないのであります。我邦では死亡率は餘り變らないで獨り出生率が段々高くなつた結果自然增加が殖えたのであります。英國や獨逸では出生率も減じましたが死亡率も亦著しく減じて居ります。最近十年大正の統計によりますと、我邦の死亡率は人口千につき一ケ年に二二・七でありますが、英國は一二・五、獨逸は一四・〇、佛國は一七・七であります。我邦も英・獨・佛國の如く此上死亡率が減少することを勉め、出生率は高く死亡率は低くて、人口增加の率が更らに高くなることを心掛け、以て健全な人口狀態を現出することを勉めねばならぬのであります。死亡率は餘り減じて居らぬのは、喜ばしからざる現象と申さねばなりません。

我邦の死亡率

是れに就て大正八年刊行の『大正五年日本帝國人口動態統計』概說中頁五に說いてあることは、大に我々の心を用ひねばならぬ處と存じます。今其一節を揭げて御目にかけませう。

本邦の死亡步合は、嘗て急性傳染病跋扈の時代に於て甚だ高きことありしが、一時鎭靜し、幾何もなく又高低起伏著しく、最近には稍下向し、大正二年に一九・五の低率をさへ見しが、翌三年には稍上り、四年に減少したるも尙甚だ降らず、本年（大正五年）に至りて二一・五一の高率を見たり。死亡步合の高低は、當に出生步合の高低に支配せらる。出生多ければ自ら乳兒の死亡多し、乳兒の死亡數は本邦に於ては、全人口の死亡總數の約四分の一を占む、故に出生步合高きときは、從つて死亡步合も亦高きに至るなり。乍併、死亡步合と出生步合とは必ずしも併行するものにあらず、多くの場合に於て、線を以て描ける兩者の間に多少の角度を生ず。而して其の角度の大小は、聽て國民健康の標尺たる可きものにして、之れに據りて討究すれば、或は異常なる自然力の逼迫に由り、若くは何等か特殊の死亡原因に由りて、死亡の增多せるものなるを發見すべし。（中略）歐洲諸國が近世の出生減耗と同時

F. II, 35.

に　而も夫以上に死亡歩合を低下せしめ、人口の自然増殖率に大減なきを得つゝあるは、決して自然の成行に委したるものにあらずして、國家も社會も、將た個人も鋭意之れに盡せる衞生法の賜ならずんばあらず。飜つて本邦の事態の既に生産歩合の低下あり、軈て來る可き惡風潮の兆見ゆるにも拘らず、縱しや、自然力の異常逼迫ありたるにもせよ、此の死亡歩合の著しき増高を見ては、轉た痛嘆に堪へざるなり。

大正五年以後の我邦の死亡率は、五年の二一・五から以降、二一・四、二六・八、二二・八、二五・四、二二・七、二二・三と云ふやうに或は昇り或は降りて、十一年に於ては五年よりも高い率を示して居るのであります。

人類進化の爲めの犧牲

以上段々説明致した通り、マルサス説に三部分ある中、最後の第三點將來人口過超の事實が起るに相違ないと云ふ豫言丈けは外れました。然し乍ら第一・第二の點に至つては事實は愈々以てマルサスの説の當つて居ることを確證したのであります。殊に人間は食料よりも増加の度が速かであつて、生れる程の人間は皆必ずしも生延びて行けるものでない、生れるものゝ中何人かは必ず早く死ぬ可き運命を持て居る、出生者の全部は生存を必する譯には行かぬと云ふ大事實は、人力を以て是を如何することも出來ない自然の大則であります。此事實は否定出來ません、否之が無ければ人類の進化は止まつて仕舞ひます。人間として生れた者の中、精神上肉體上優れた者が優勝者として生き延びます。此淘汰がなかつたならば、人類はいつ迄も同じ所に居るか、或は文明は跡戻りする外ありません。これは甚だ悲慘な事實でありまして、生れる所の生物としては生きる見込がないのに生み出されるのは甚だ迷惑であります。其個體の爲には不幸であります。乍併生物全體人類全體の爲から申せば、それが卽ち幸福を増す所以であります。淘汰せられる個人は人類全體の進化の爲の犧牲たるのです。

生存競爭は自然の大則

我々人間でも生物でも生れるといふのは既に生存競爭の結果であります。母の胎内に宿るといふのは無數の同胞と競爭して勝つた結果であります。無數の種の中の一つが母體に宿るのです。其時に於て一つの種が宿る爲には、何千だか何萬だかの他の種は宿る機會を與へられないで滅びて仕舞ふのです。

贅澤なる天然

天然は初から非常に贅澤で、たつた一つの種を宿らせる爲に無數の種を作り出して置いて、其中一つを除いて他は皆滅ぼして仕舞ひます。其宿つた者が生れても今度は生れて間もなく死ぬ者もあり、一歲で死

ぬ者もあり、三歳・五歳・十歳で死ぬ者があります。殊に人間は五歳迄に死ぬ者が多い、即ち嬰兒の死亡率は大人よりも高いのが例となつて居ります。

嬰兒死亡數大なり

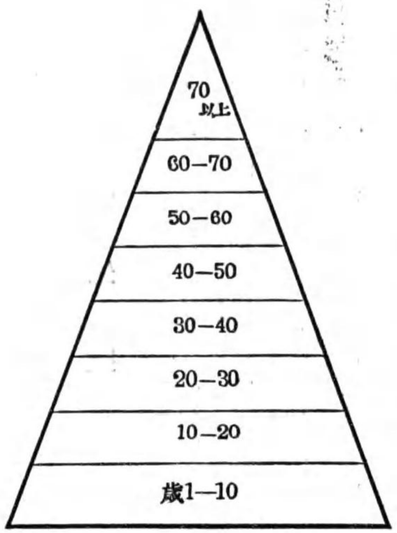
大正二年の調査によれば我邦では五歳以下の小兒の死亡數は五歳以下の小兒の總人口千人に付、男五八・七一、女五四・九七、總數五六・八六であります。五歳より十歳となると其れがズット減つて、千に付總數四・六八、即ち前數の十分の一以下となります。英・獨・佛何れも粗ぼ同樣であります。即ち其年齡に當る小兒千人に付

	五歳以下	五歳より十歳
英	四六・〇	三・六
獨	五四・二二	三・二七
佛	五二・七	四・六

の死亡數を示して居ります。大正十一年の死亡數では、五歳までの小兒死亡數は死亡全體の三割九分四厘ですが、五—九歳は僅かに二分七厘一毛であります。

其他の淘汰作用

又男女に就て申すと、男の兒の方が女の兒より少しづつ餘計に生れるのが通例です、所が生存者に付て言ふと高齡者には必ず女が多い。婆の方が爺より多いのです、男子は餘計に生れて餘計死ぬものです。即ち淘汰の作用を受けること女子よりも多いのであります。人口といふものは極理想的に行けば等邊三角形を形づくる可きものです。生きて居るものは皆一度生れたものに相違ありませんから、生まれたての者の數が一番多く、以上段々數が減つて行つて、仕舞には零になること上圖の如くなる可き筈です。トコロガ實際必ずしも左樣はなつて居りません。慈姑形・梨形・絲卷形・釣鐘形抔と統計學者の名づくる變形を現はすのであります。人口と申すものは偶然に生れ偶然に死ぬものでなく、夫々規則正しく出來て居るも



ので、自然淘汰の作用は統計の研究に於て極く正確に之を窺ふことが出來るのであります。それに付て見ますと、大體に於て生殘る者は優者適者で、亡びる者は劣者弱者であります。弱い者・劣れる者は淘汰せられるのです。

優生學

近來ユージェニックス Eugenics（優生學）と云ふものが起りまして、此優者生存を自然の淘汰作用のみに任せないで、人間の工夫盡力を以て、優者を多く作り出すことを研究して居ります。此マルサスの人口の法則から考へ附いたと申しても宜しいのであります。優生學は又一たび生れた子供に付て成るたけ善い所を助長させ、悪い所は取り去つて生延びて行ける樣に工夫をも凝します。生存競爭を全廢することは到底出來ませんが、人間の知識と學問とを以て其悲慘な作用を幾分緩和しようと云ふので、マルサスの趣意を取て更に一歩を進めた考へであります。

自然淘汰の外に文化淘汰あり

右に申した通り、人口は妨げる事情がない限は、無限に殖る力を持つて居るものであるといふマルサスの說は、萬古不易の眞理であります。併し一般生物と人間とは必ずしも同じくありません。人間は只生活して行けるだけを以て甘んじて居るものではないのです。一般生物は與へられたる自然の生活を營むのみで、之に就て生存競爭を致して居ります。從つて其の生存は自然的の生存であります。人間は單に自然的生存を營んで安んずるものではありません、同時に文化的の生存を營むもので、生活の程度(Standard of Life; Lebenshaltung）と云ふことが重大な關係を持つて居ります。

生活の程度

人間は一定の生活の程度を維持して生存するもので、此一定の程度を保てないときは死を意味します。人間は唯食べて活きて居られゝば宜いのでありません、一定の文化的程度に於ける生活をしようと勉むるもので、此の生活の程度を維持する爲には非常な努力を致します。此點が一般生物と人類と違ふ所であります。殊に勞働問題を論ずるに當つては生活程度の維持といふことは甚だ重要であります。勞働者が生きて居るだけの賃銀を貰へば、それで生活が維持せられて行くかと申すに決してさうでないのであります。勞働者には勞働者相當の、生活の程度があります。其の生活の程度を下してまでも働けと要求することは出來ません、强ひてやれば勞働者は自滅して仕舞ひます。さて此の生活の程度といふものは文化的のもの

であります。決して機械的のものではありません。どの位が生活の程度なりと申すことを斷言することは不可能で、其時、其處、夫々に應じて一々異ふのであります。文明の發達に從つて此の程度は向上發達致します。無論生活の程度の中には、極端に言へば不必要なものも這入つて居ります、それを省いた所で人間の生存に差支ないものもあります。然し其れがあることが人間の生活が文化的である所以であります。それを無くしては文化的生物としての人は生きて居られないのです。

認識の衝動

人間には各種の衝動があります。即ち生存の衝動・生殖の衝動・活動の衝動・競爭の衝動・模倣の衝動・營利の衝動等がありますが、一般の文明人を通じて最も強く最も普通なる衝動は、認識の衝動と申して、他の人類即ち同胞の認識を得たい、尊敬せられたい・同情せられたい、仲間外れにされ度くないと云ふ衝動であります。生活の程度は主として此衝動によつて定められます。即ち同胞から仲間外れにされない、或は尊敬せられる程度の生活を營み度いと云ふ念から其れ丈けの程度の生活は是非維持して行く、其爲には外の衝動を抑へ、他のものを犧牲に供しても構はないと考ふる位強いものであります。場合によつては絶對的に必要なものを已めても、尚ほ認識を得たいとするのであります。武士は食はねど高揚枝と申しますが、實は武士許りではありません。人間は皆多少其心を持つて居ります。乞食は人の殘した物を拾つて食べるが、如何に困つても一人前の勞働者は惡くても買つたものを食べたいと望ます。否、己の三度の食を節しても仲間の附合は致します。勞働者には勞働者相應の附合があります。己の一家族の費用を減じても附合の爲めに使ひます。殊に或一定の社會普通の常事になつて居るものは、若し是を行はなければ認識の衝動を非常に滿さないで終ることがあります。是が爲には他の必要缺く可からざる費用を節します。御祭の時に揃の着物を着る、正月でも稼がなくてはならぬが人が休むから休みます。葬式の時には喪服が要ります。家具家財を失つても之れを被たいと勉めます。中には無用な事も隨分ありますが、人間は一片の理窟で活て居るものではありません。衣服等も實用許でなく、認識の衝動を充す爲に被飾のであります。一定の身分には一定の衣服を要します。學校の教師が印半纏で生徒を教へる譯には參りません。社會の地位・身分・職業等に應じ夫々相應な無駄なことを致し、非實用的の費用を使ふと云ふことは免れないのです。此一定の認められたる生活の程度を下すと云ふことは社會的の死を意味します。歐羅巴の勞働者や亞米利加の勞働者の生活は非常に發達して來ました、是は生活の程度を下すまい、否之れを高めようと云ふ努力の結果であります。只豚の如く生活して行くに甘じたならば、今日の進歩した身心共に優れた勞働者は出來ませぬ。ミルは滿足せる豚よりも不滿足な人間の方が勝れりと申したことがありますが、即ち

此事を申したのであります。人としては相當に認められる生活の程度を維持せんとして、其が爲には非常な奮發努力をして、一定の程度を下らないといふことが、勞働者の抵抗力を非常に強くする所以であります、又彼等の能率を高める所以であります。從つて絶對的の物理的の生存といふ上から言へば、淘汰されなくても宜い人口でも、一定の生活の程度を維持し得ないで淘汰されるものが尠からず起るのです。即ち人類社會に於ける淘汰といふことは二樣に行はれます。自然淘汰許りではなく文化淘汰がありまして、此の力が遙かに有力重要であります。社會問題は主として此の文化淘汰の爲めに起るのです。

社會問題は文化淘汰より起る

ストライキやボイコットをすると云ふのも己の生活の爲には、必ずしもストライキをやらなくてもよい場合でも、勞働者としてはストライキをやらなければ己の仲間がやつて行かれぬからやります。彼等は何を要求するかと申すと、必ずしも自分達が生活が出來ないからではなく、一定程度の生活を維持したい、それには今の條件では困るから改めてくれと要求します。米國に於ける排日問題は此點から見ると大いに同情す可き點あるを發見するのであります。此れが驕て彼等の地位を向上せしめ、彼等の能率を高むる所以となるのです。算術の勘定にさへ合へば宜いといふ樣な支那の勞働者の樣では勞働者の向上・發展は中々六ケしいのです。斯く人間社會の淘汰は自然的意味許りでなく大いに文化的意味を持つて居るものであります。そこで淘汰の間に起る弊害を成るたけ少なくして、之が爲に無用なる苦痛を蒙らない樣にすることが人口政策の要目であります。

失職・無職者問題

然るに此淘汰は今日に於ては何の問題に於て重に現はれるかと申すと、謂ゆる無職業者問題・離職者問題となつて現はれます。英吉利に於てマルサスの人口論が現はれたときは、此の淘汰の作用は貧となつて現はれて居りましたが、今日は寧ろ失職者・離職者の問題となつて現はれて居るのであります。此問題は歐羅巴に於ては社會の基礎を動かさんとする樣な大問題であります。歐洲に於ては職を欲するけれども得られない人が澤山あります。然し絶對に職がないのではありません。職はあるけれども、ある所の職業の需要よりも職を欲する人の供給の方が多い、人あつて職を求めて居る、職よりも人の方が遙かに多いから職を得られない人が澤山殘るのであります。或はあつた職をも失ふ所の人が起ります。職を失ふ者を失職者と申し、テンデ職の無い者を無職者と申します。今日の文明國に於てはイクラでも人間が要らぬといふことはない筈です。どんな働きの少い人間でも多少働きが出來る間は要ります。働いて呉れゝば何かの役

に立ちます。然るに失職者・無職者の多いのはどういふ譯でありませうか。これは前にも申した過剰生産と申す事と同じ道理で、紡績會社で絲を拵へ過ぎては困るから聯合會を造つて、相互に協定して生産高を制限するが如きと同樣の理に基くものであります。

其の起る所以

國全體として言へば要らない人間のあり樣がないのです、人あれば必ず需要あり職がある譯ですが、無報酬で雇ふことは出來ません、多少なりとも報酬を與へなければなりません、賃錢を支拂ふ必要がありません。否、唯食べて居れば宜いといふのではありません、一定の生活の程度を維持し得る程のものを與へなければなりません。一たび職を與へるならば相當なる收入を得させなければならぬのです。これが出來ないから、失職者・無職者が出來るのであります。使つて居る職工と言へば相當の賃錢をやらなければなりません、所がそれ丈けの賃錢を拂つて仕て貰ふだけの仕事がないのです。只何でも無闇に働くならば宜いが、相當なる報酬をやつて働かせやうといふには收支償はぬのです。そこで見す〳〵働ける人があつても、之に與ふ可き職が無いことになるのです。

工場法の影響

殊に工場法が行はれますと、職工が餘程能く働いて呉れるのでなければ工場法で命ずる所を施設する費用は償ひませぬ。昔使つた樣な勞働者は使へぬ、能率の高い勞働者でなければなりません。そこで工場法の適用が擴まり、勞働者の保護の行屆くに從つて却つて無職者・失職者が殖えるのです。折角工場に於る勞働者を保護する爲に造つたものが、工場に一旦這入つた職工はよく保護しますが其の以外のもの、疎外せられたものは却つて困ることが起るのです。此頃我邦で工場法が愈々實施せられた爲め、未成年者や病氣のある者がドシ〳〵解雇せられて、大いに悲慘な現象を現したと傳へられて居ります。是は即ち文化淘汰の犧牲であります。殊に婦人勞働者に就て此淘汰が起ります。婦人を夜業に使つてはいかぬ、婦人は十二時間以上使つてはいかぬ、出産後四週間は工場に勤勞することを得ずとあります。此間は賃錢が貰へないので困ります。今日の文化はさういふ風に十分な健康狀態にない者の使役を許しません。機械的工業が發達して工場法が出來、勞働者の保護が出來る程被淘汰者たる無職業者が出來て、今や文明國の厄介問題となつて居ります。

苦汗制度

然るに之を利用する一の工業が起りました。工場に這入れない、今日の文化の程度に應ずることをするには仕事がない・さういふ者卽ち敗殘者を集めた所の敗殘者工業で、之を苦汗制度（Sweating・system）と名けます。そこに肺病も集る癩病も集る、敗殘者は皆集ります。さうして安い賃錢で働きます。是は實に容易ならぬ現象であります。折角工場法を設けて勞働者を保護しても、他方に苦汗制度の如きものが起つては何にもならないことになります。

離職の不安の特質

扨て此の失職者・無職者問題は、誰々が無職者になるといふことが分つて居れば問題は簡單でありますが、誰が無職者になるといふことが分らぬから問題は重大となるのであります。

今日は生活の保障一もなし

昔は一定の能力を備へ一定の見習を終れば必ずそれだけの職が得られる、縱しんば其收入は少くても安心で、生活の保障があつたのです。トコロが今日は其保障は誰人にも與へられてないのです。誰が文化淘汰の犧牲となるか見當が附かないから、問題は重大となるのです。封建制度の下に於ては大體に於て生活の保障がありました。御大名樣は當人が無能であらうが、低能兒であらうが、殿樣は殿樣、一萬石は一萬石、十萬石は十萬石、甚だしき失態があれば改易御家斷絕を仰付けられますが、然らざる限りは安心であります。士は士で、皆それ〴〵秩祿を戴いて居ります。役をすれば役に付いて收入が殖えるが、秩祿は家に付て居つて、當人の能不能に依らないのです。尤も能力を以て抱へられた役人は違ひます。劍術の御指南番が無能で、强い者が來て御前試合で負ければ役を免ぜられますが、此くの如きは極少數で一般の武士は當人の能不能に依らないのであります。農工商の階級に至つても粗ぼそれに近かつたのです。農といふ者は先祖傳來の土地を耕して居れば宜しい。米價の變動といふことも今日程ひどくありません。其代り餘り儲けることもない、商工でもさうで世襲の業を守つてさへ居れば安心でした。然るに今日は其反對で生活の保障はないのであります。一定の財產收入のないものには生活の保障は全くありません。財產の無い者は常に生活の不安を免れません。尤も之に對する色々の制度が起りました。此の頃實施された簡易保險の如きも多少其意味を持つて居りまして、此の制度によつて國民の大多數は幾分か生活の保障を與へられることになります。併し其れは極く微少な救しかありません、大體に於て生活の不安と云ふものは甚

だ大なる有樣であります。

例を以て說明す

手近な例で申上げて見ませう。近頃東京市の電車の滿員騷ぎが其れです。來る電車も來る電車も一杯につまつて容易に乘れません、停留場には山の樣に御客が待つて居ます。偶に少し空いた車が來るかと思ふと、唯人も此機失す可からずとして、急いで乘り後れまいとします。其れが爲めに大雜踏、女や子供は足を踏まれたり、袂をひつちぎられたり、中には怪我をする人もあります。私共の樣な力のない者は男子でも閉口してしまひます。コレハ乘る人は多く、乘せ得る餘地は少い爲め、待つて居る御客の中何人かは必ず乘り損ふにきまつて居るからです。然し皆が皆乘れない譯ではないのです。然るに大騷ぎをするのは、皆が皆であります。其れと云ふのは、乘損ふ人は誰になるか分らず、而して誰人も乘後れるのは厭やですから、待つて居る人々は悉く皆不安の念に驅られて、彼の大騷ぎを演出するのであります。今日の生活不安と云ふのは全く此れと同一なのであります。モ一つ例をあげれば、今汽船が沈沒せんとして居るときに、一艘のボートが來て二十人は乘せて上げようと申します。然るに御客樣は三十人あるとすれば、誰か十人は殘されて船と共に沈沒しなければなりません。誰が其運命に陷るか分りませんから三十人共に皆心配するのであります。

人口の法則の文化的擴張

此の樣に今日の社會では國民何れも皆生活の不安に襲はれて居るのであります。財產があれば宜いがさうでなければいつ何時職を失ふて生活に困る樣になるか分りません。又身體が達者で働ける時は宜いが、働けなくなつてくると不安心であります。斯くの如く社會組織の上に於て文化的に不安を增大したのであります。それが社會問題の依つて起る所以で、畢竟する所人口の法則が更らに文化的に擴張せられて働く結果に外ならぬのであります。

土地と人口との不調和を取除く工夫

要するに人口は無限に增加する傾向を持つて居るものであるのに、之を養ふ可き土地の收穫は遞減の大則の支配を受けて居つて、如何しても兩者の間に不調和が起ると云ふ生物學上の大原則が儼として働いて居つて、文化作用は一面には其作用を緩和し、又は逆行する力があると共に、他面には更らに此不調和の勢力を强める働きをすると云ふ此運命の下に我々は經濟生活を營んで居るものであります。從つて我々の

F. II, 36.

經濟生活の出發點は、此の不調和を取除き此有限不足に打克たうとする一事に存するのであります。此工夫、此努力は何によつて實現せらるゝかと申すと、勞働と資本とを手段とする所の我々の經濟行爲に外ならぬので、其經濟行爲は今日に於ては企業を中心として發動して居るのであります。今日の經濟上の現象は卽ち此れより起るのであります。一切の經濟の現象は、有限に打克ち不足を取除かんが爲めに起るのであります。從來の經濟學に於て物の有限性、又は稀少性と云ふことに、甚だ重きを置いて居たのは、必竟此爲めであります。然るに有限。不足は單に物の上に存するのみではありません。否今日の經濟生活に於て、最も痛切に感ぜらるゝ有限・不足は、物の有限・不足よりも、寧其物を以て人間の欲望を充たさんとするに當り、必ず無ければならぬ人間の働き、卽ち勞働力が甚だ有限にして不足なること是であります。此勞働力の有限・不足を取除くに最重要な作用を爲すものは、企業組織であります。故に以下先づ、物の不足・有限の打克者としての勞働のことを說明し、次に其勞働の有限・不足の打克者たる企業組織のことを申上げて生產論を終ることゝ致しませう。

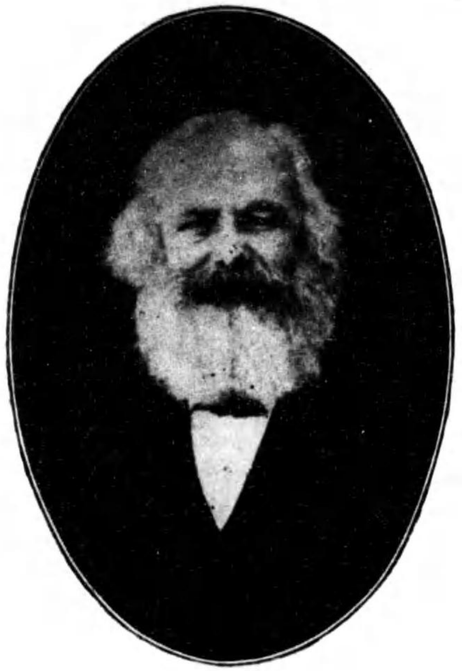
第五編　勞　働

第二十二章　生產の自然要素と文化要素

生產の自然的根本事實

今日の經濟組織に於ては、生產を主宰し、指導するものは企業でありまして、企業は各種の生產要素を流通生活に於て、買入れたり、借入れたり、傭ひ入れたりして、先づ此れを己の手に收め、さて自己の創意によりて定めた一定の計劃に從つて、此等總てのものを結び付け、夫々に按排し、適材を適所に置いて其の作用を十分ならしめ、其の結果として價値の發生・增進を實現するものなることは、段々御話致した所によつて御分りになつて居る事と存じます。此等企業の手に於て結び付けられる所謂生產要素なるものは普通、土地・勞働・及資本の三者なりと致してあります。併し乍ら此說は嚴格に申しますと、必ずしも妥當とは申せないのであります。同じ三要素として並列致しますけれども、土地丈けは、元來人間の力や

働きによらずして存在して居るもので、而して其經濟上・生産上の作用に就ても不變性なるものがありまして、人間の働きを全く超越し、文明の進歩に並行して增進せざるのみか、却つて之に逆行して、文明が進めば進むほど此の不變性は我々の生産に困難を增して來るものなることは、既に稍々詳かに御話致した通りであります。此點は十分諒解して置く必要がありますから、土地の制度等に付ても、少し細かに御話致したのであります。即ち我々の今日の經濟生活に於ても、土地は其自然的・技術的方面が甚だ重要な關係を有つて居るのでありまして、此點を知つて置かなければ、生産要素としての土地の作用を正しく諒解することが出來ないからであります。次に勞働と申しても、これは人間の動作の謂に外ならないのであります。從つて人間を離れて、勞働のことを論ずる譯に參りません。然るに人間は其の動作に於ては全く文明の産物でありますけれども、其れと共に其の死生・增減は一面に於て一の自然的事實であります。即ち我々の經濟生活、我々の生産行爲は一方には不變性を有して居て、如何にするとも其面積を增すことの出來ない土地と云ふ一の自然物と、他方には他に妨ぐる原因のないときは、食料の增加と共に、否之れにも勝りて其數を增さうとする傾向を有つて居る人口と云ふ一の自然物と、此二つを土臺として成立つて居るのであります。此事は何れの時代・何れの國・何れの民族にも共通の點であります。云はゞ文明の程度如何を超越する一の非文化的事實、文化に關係なき事實であります。故に之れは生産の自然的根本事實で



Meinem lieben
Jenny zum
Andenken
Alger. Ende April 1882

スクルマ・ルーカ
Heinrich Karl Marx
(1818—1883)

あります。第四編に於て、專ら此に付て御話を致したのであります。

生産要素に自然的と文化的とあること

右の如く生産の自然的根本事實が土地と人口とであることを認ると共に、必ず忘る可からざることは、文明の進歩に伴ひ土地と人口との間の不調和は益々大となる一事であります。文明の進歩とは、經濟上から見れば土地の有限的・獨占的性質が愈々痛切に感ぜられると共に、他方に於ては人口は益々無限增加の傾向を顯はし、從つて彼の限りある土地を以て此限りなからんとする人口を養ふことが益々困難となり、兩者間の不調和が彌々著しくなることを意味して居るのであります。經濟的文化を刺戟する最大原因は實に茲にあるのであります。否一歩進めて申せば、我々の經濟的活動は必竟此兩者を如何にかして調和せんとの努力に外ならないと言つても大過ないのであります。人間の經濟生活は有限と無限、土地の面積と人口の增加との調和を圖る生活の謂なりと申しても差支へありません。我々は自然に定まつて居る此根本事實を出立點として、之に順應す可く、我々の經濟的文化を作り上げて來たものであります。故に同じく生産の要素と稱しても、其性質に著しい差違があります。土地と人口とは生産の爲めに始めて生じた要素ではありません。否な我々の一切の經濟的活動に先だつて存して居るもので、經濟的活動・生産は其跡

を追つて起るものであります。從つて土地を生產要素と稱へることは差支はありませんが、其の爲めに土地を單に一の生產要素としてのみ見ると云ふ誤りに陷らぬ樣注意しなければならぬのであります。人間は生產の要素では無論ありません。唯其の動作が生產の要素となるのです。

生產の『フアクトル』と『エレメント』

プレンタノ先生は生產の『Faktor』（動因）は唯一つの人間あるのみで、土地や勞働や資本は決して生產の『フアクトル』ではない、單に『Element』（要素）たるものであると說かれます。私が生產要素と名くるのは、ブ先生が言はるゝ『エレメント』のことであります。『フアクトル』の謂では無論ありません。人間は生產の『フアクトル』（動因）であります、決して『エレメント』（要素）ではありません。人間は私の名くる生產要素ではなく、生產の、否一切の經濟的活動の動源であります。

人口論の取扱ひ方

生產論中に於て人口論を說く爲めに、恰かも人間を以て一の生要產素と認めるかの嫌があります。故に學者によると、人口論は全部之れを生產論から切り放して、全く別に之れを說く人もあります。然し經濟學に於て人口論の研究せられました由來は、生產論の一部としてゞありますから、以上の如き誤解、卽ち人間を生產要素と認めると云ふ誤りに陷らない樣に注意しさへすれば、人口論は矢張之を生產論中に置く方が、學問上當を得て居ります。强て新奇を求めて之れを別に置く必要は寸毫もありません。否我々の一切の經濟的活動、殊に生產の眞相を究めるには、先づ一方に有限なる土地、他方に無限に增殖せんとする傾向を有つ人口の二者があつて、而して其間に調和を持來さんとする努力が、取も直さず人間の經濟生活であることを十分に心得て置く必要があります。從つて人口論丈け之を引放して、遠く外の處へ持つて行つたり、殊にフツクス氏の樣に經濟原論の一番終りに讓つたりしては、抑も何の爲に、經濟學に於て、人口論を研究するのであるか、甚だ無意義になつて仕舞ひますから、私は斷じて之に服することが出來ないのであります。此くの如きは、經濟學成立の歷史を無視して、唯だ机の上で空想を旋らす弊に陷る眞があるかと存じます。

一貫せる經濟の本質

我々の經濟生活と經濟的活動とに對して、有限なる土地と無限增加の傾向を有して居る人口とが、相對立して居ると云ふ根本的事實を十分心得て置く必要のあること右の如くであります。此點を輕く見ると飛

んでもない誤りに陷り、其結果以下の經濟理法を究める力針を失ふ事になり、全く支離滅裂となつて仕舞ふ虞があります。少くとも、其樣な經濟論は一貫した條理の無いツギハギ細工的のものになります。經濟學の理論は始から終まで、チヤンと徹底した一の系統を形作つて居るものであります。思ひ付き次第に種々な事柄を、ゴチヤ〳〵と並べたものではありません。一の獨立した科學は皆一貫の理論に基かれなければならぬことは、前に御話致して置いた所を御記憶あること、存じます。其の一貫した理論とは、經濟學に於ては、經濟の本質是れであります。經濟の本質は收支適合を圖る所の秩序的計劃的活動、並に活動の組織であることも、前に充分御話致して置きました。我々の生活に於て、斯く秩序と計劃とに基いて收支の適合を圖る必要は、抑も如何にして起るかと申せば、我々人間は生物として數に於て無限に增殖する傾向を有つて居るものである、他方に於て我々人間が生活の資料を仰ぐ土臺たり源たる土地は、其面積に於て全く不可增的のものであり、其の豐度も或度以上は、收穫遞減の法則の支配を脫することが出來ないと云ふ事實が自然的の既定であつて、人力を以て之れを如何ともすることが出來ない故に、人間は玆に秩序・計劃を立てることによつて、其の調和を圖り、其の適合を勉めねばならないからであります。

經濟と節約

世間普通に經濟と云へば、直ちに之を節約・節儉と同一物なりと考へるのは、無論當を得ては居りませんが、併し節約・節儉は收支適合の一手段として甚だ有力なるもので、其重要なる一面を含んで居るのであります。有限の土地と其產物とを以つて、無限增加の傾向を有して居る人口を養はうとするには、先づ以つて節儉・節約を實行することが必要であります。若しも土地が無限に增し得るものであるか、少くとも其豐度が無限に增進し得るものであるなれば、收支適合は甚だ容易な事でありまして、節儉・節約と云ふことは殆んど其要を感じなくなるでありませう。

手近な一例

一つ手近な例を申上げます。毎年夏になりますと、東京では市民に向つて水を無駄にしない樣にと市役所等から御諭しが出ますし、新聞等でも大きな活字を並べて、市民は公德を重んじて水の使用を節約せよ、無暗に往來へ水を撒くな、撒くなら洗濯した汚れ水を撒け（汚い水を往來へ撒くのが公德を重ずる所以等とは、所謂文明國の矛盾で笑止千萬な事でありますが）、水道の口から水瀧をあびてはいけない杯と、事も細かに書き立てます。東京市の役人達は自分達が無能の爲に、毎年夏になると斷水騷ぎを起すのであると云ふ事は、餘り反省しないで、暑くて堪らない、切めて水でも十分に使つて凌ぎを附けようと思つて居

る市民に對して、其公德の不足を責めます。役人達が水道を作つたときに、チヤント前途の見込を正しく立てゝ、夏水の澤山要るときになつても、不足の憂のない樣に給水の設備をしてさへ置けば、苦しい思をして水の節約を市民に責める必要はないのであります。此れは隨分人を馬鹿にした話であります。然し現に水道の設備が不十分である今日に於ては、公德としては、夏暑くて苦しい時に水の節約をせなければならぬのであります。所が一歩窮屈な東京の外へ出て山間の地方へでも行きますれば、清水は滾々として流れて盡きず、誰れでも使ひ放題、晝も夜も寛の水は出し放し、臺所では流し放し、瀧をあびようが、道路へ撒かうが少しも差構はないのであります。即ち水に就て節約と云ふ必要はないのであります。水道敷設以前の東京では無論其れ程ではありませんでしたが、洗濯の汚れ水でなければ撒くな抔との馬鹿々々しい御說諭等を賜はつたことは決してありませんでした。諺にも、『金銀を湯水の如くに使ふ』と申します。節約と云ふことは全く度外に置くとの意であります。然るに今日は、湯水の如くに使ふと云ふことは、少くとも東京の夏では、却つて儉約すると云ふ意味になる譯です。其の通りで金錢も無限に存在し、無限に得られるものならば、山間の淸水の如く、惜氣もなくドシ〳〵使つても毫も不都合でも不經濟でもないことです。其が極めて有限であり、得ること容易ならざるが爲めに、金銀に就ては殆んど敎へずして、人間は節儉を行ふのであります。土地から得る作物を始め、今日我々の生活を支ふる資料は、殆んど皆右と同樣に有限のものであります。ソコデ節約・節儉が我々の心掛けねばならぬ第一箇條となつて居るのであります。

經濟は有限、稀少の資料の取扱

從つて經濟とは有限のもの、稀なるものを以つて、人間の生活を支へんとする努力なりと申しても宜しいのでありまして、經濟的と云ふことは、稀なるもの、限りあるものを資料とする人間の活動に關することの謂なりと說くのであります。財を分つて、自由財（又は非經濟財）と非自由財（經濟財）との二大別ありとするのが通說ですが、其自由財即ち非經濟財（兩者は必ずしも同じ事ではありませんが）と云ふのは、節約の必要ないもの、澤山に存在して居るもの丶事であります。反對に經濟財とは有限的なるもの、稀少なるもの丶謂であります。即ち節約する必要のあるもの、我々の節約的行爲の目的物たるものと云ふことであります。此區別は通說に於いては大いに重きを置きますが、實に有限と云ふことの最も强く作用するのは、人間の勞働力であります。タトへ無限に存する物でも、之を人の欲望滿足に充てやうとするには、必ず人の働きを要します。而して其の人力は極めて有限なものであります。從つて物の有限に重きを置くことは、私は學問上餘り必要と存じません。然し以上申上げた道理を說明する一例としては適切で

ありますから、一寸御話申して置きます。

經濟的活動は天の吝なるより起る

右の次第でありますから、我々の經濟的活動は畢竟天が吝なるより起ると申して大過はないのであります。他方に於ては、天は生物殊に人間の種を生ずるには極めて贅澤であつて、生かせる積りもなく、其の見込もない人間を生れしめて、之れを生存せしむ可く資料を與ふるには、甚だ吝でありますから、其吝さは更らに痛切となります。天が自由自在に土地を與へ、其の豐度を增すことを得せしめ、無限に各種の成り物を人間に與へて呉れますならば、我々は物の收支適合の爲に苦心する必要は持たず、節約・節儉は少しも讃めた話でないことになります。反對に天が吝なればなる程、收支適合は緊要のことになり、節約は重大な意義を有つことになります。

英國の『國民節儉野戰』

英國の如き國でさへ、戰爭開始後は、食物の節約・石炭の節約・石油の節約・一切の生活資料の儉約をしなければならぬ、然るに平時贅澤に馴れ拔いた英吉利人は、戰時にあつても中々節約をやらぬ、コレデハならぬと申して、National economy campaign（國民節儉野戰）と唱へて、有識者が演說をしたり、文書を配つたり、大騷ぎを致しました。即ち物が不足になつた爲め、平生必要を感じなかつた節儉が必要となり、之を行はないものは、公德心のないものと看做さるゝ樣になつたのであります。文明が進み、人口の數は增し、生計の程度は高まるほど、天の吝なることは彌々痛切に感ぜられます。從つて經濟的活動の必要が益々大となるのであります。我々は之によつて天の吝嗇に打克たねばならぬのです。

節儉は唯だ一面のみ

節約・節儉は經濟的活動の全部ではありません。一口に經濟と云へば、直ちに之れを節約と同意義と認めるのは大なる誤りであります。節約は唯だ其一面たるに過ぎないのであります。前既に十分御話申上げた樣に、收支適合は支を少くするによりても實現せられますが、又た收を多くするによりても實現せられます。大抵の場合には支を少くすると同時に、收を多くして、兩者の適合を圖るのでありまして、其一方にのみ偏す可きではありません。

收支適合は一の文化事實なり

即ち收支適合は一の自然的事實でなく、文化的事實であります。而して其は今日の經濟生活に於ては、

流通の支配の下に行はれるものであります。生産とは卽ち此の意味にての文化的事實であります。而して此の文化的活動は其根柢に於て土地と人口と云ふ二つの自然的根本事實を有つて居つて、更に之れに文化的生産要素を加へて、始めて生産は成り立つのであります。

以上複說の理由

以上を以て同じ生産要素と稱しても、土地は格別の意味を有つて居ることが、御分りになつたことゝ存じます。コレハ以下文化的要素のことを御話致すに、是非充分御記憶を願つて置かねばならぬのでありますから、重複を厭はず申し上げたのであります。

文化的要素の意義

さて生産の文化的要素は何々であるかと申せば、勞働・資本・組織の三つ是であります。土地と人口とはあらゆる社會生活の土臺となるものであります、獨り經濟生活のみに限られたものではありません。之に反して、文化的要素は社會生活の各部に就いて夫々に異つて來るのであります。故に文化的要素のことを社會的要素（詳しく申せば、社會的差別要素）と名けても宜しいのであります。畢竟我々は各種の社會的生活を營みます、其方面の異るに從ひ、土地と人口とに對する取扱ひを異にするものであります。

國家を以て例示す

例へば我々は國家てふ一の社會生活を營んで居ります。國家に取りても其根本の要素は、土地と人口とであります。此點は經濟生活と全く同じです、其れから先きが異つて參るのです。卽ち國家は此の土地と人口とを統治と云ふ關係に於て取扱ふのであります。國家から見れば、土地と人口とは、統治の對象として意味を成すものであります。ソコデ、統治の對象たる土地を、領土 territory と名づけ、人口を人民又は臣民と名けます。此は土地と人口との一切の方面を指して申すのではありません、唯だ其れが統治の目的物たる事實を指して申すのであります。統治と云ふのは一の文化的關係、一の社會的事實であります。自然的でもなければ萬世不易のものでもありません、所謂國亡びて山河在りで、統治の事實は亡くなつても、土地と人口とは依然として、其處に存在して居るのであります。或は又歐洲大戰の際獨逸軍の占領に歸した白耳義の樣に、國も土地も人口もあることはあつても、皆バラ〳〵になつて居る樣な妙な例もあります。

經濟生活の文化的要素

經濟生活も國家と均しく土地と人口とを其土臺とするものであります。唯だ彼に在つては、統治と云ふことによつて、此の土地と人口とを結び付けて居りますが、此にあつては、經濟と云ふことによつて此の兩者を結び付けて居るのであります。卽ち人間の生活維持の爲め收支適合を圖る可く秩序・計劃を立つることによつて、土地と人口とを結び付けて居るのであります。生產の文化的要素とは、有限なる土地と、無限增加の傾向を有つ人口とを結び付ける、人文的產物であります。勞働・資本・組織の三者卽ち是であります。

文化的要素にも自然的方面あり

斯く自然的要素に對して此の三者は特殊の意義を有つ文化的要素でありますが、其中全然文化的產物と稱す可きは組織であります。續いて資本、次に勞働と云ふ順になりまして、勞働は同じ文化的要素の中では、自然的方面を一番餘計に具へて居るものであります。從つて勞働のことを論ずるに方つては、其自然的方面を全く無視するのは當を得ないのであります。從來の經濟學に於ては、主として社會的人文的動作としての勞働のみを考へて、其自然的、殊に生理的方面を閑却する傾きがあります。是は一の缺點と存じます。以下右の順序に於て、自然的方面の多いものから其の少いものに及ぶことゝして、先づ勞働のことを御話し、次に資本、終りに組織のことを申述べませう。

第二十三章　勞働の意義

勞働とは骨の折れることの謂

勞働とは、邦語では勞することゝ、働くことゝ二つ重ねて熟字と致して居ります。これは昔は餘り用ひなかつた文字で、今日用ひられるのは、重に西洋語の飜譯としてじありますが、此譯語は他の多くの術語の邦譯に比べて見ると、餘程當を得て居りまして、原語の意味を能く言ひ表はして居ります。勞働のことを英語では『レーボア』Labour と申します。佛蘭西語では『トラヴァイユ』Travail 獨逸語では『アルバイト』Arbeit と申します。英語の『レーボア』は拉丁語の『ラボーレ』Labore から出て來た語で『骨折』『努力』の謂であります。婦人が子供を出產するのも、時に『レーボア』(普通には申しませんが) と申

F. II, 37.

します、つまり出産は苦しい事、骨の折れることだからであります。佛蘭西語の『トラヴァイユ』は、英語の『トラヴェル』Travel 即ち旅と云ふ字と同じ語原から出て來て居るので、昔は旅は憂いもの、辛いもの、即ち可愛い子には旅をさせろなどと申しました。矢張苦しいこと、骨の折れることゝ云ふ意味であります。『トラヴァイユ』並に『トラヴェル』も出産の意に用ひることもあります。矢張り苦しいこと辛いことであるからであります。獨逸語の『アルバイト』も同じく苦るしいこと、辛いことの意であります。邦語の『勞』と云ふのは能く之に當つて居ります。つまり勞働は、樂なこと呑氣なことの反對を指して云ふのでありまして、今日經濟上に於て申す勞働も、矢張先づ第一に苦しいこと、辛いこと、骨の折れることの謂であります。

苦痛を伴ふ力作

ジェヴオンスと云ふ英國の經濟學者は、勞働とは Painful Exertion（苦しい力作）の謂であると申しました。誠に克く要領を言ひ盡くしたものであります。即ち勞働は之を分解すると、第一に一の『エキザーション』（力作）であります。第二に其力作は苦しい事であります。一の力作であつて其力作は苦痛を伴ふものが即ち勞働であります。力作（エキザーション）とは、獨逸語で Kraftäusserung と申します、

スンヰヴェジ・ーレンタス・ムァリヰウ
William Stanley Jevons
(1835—1882)

『クラフト』は力、『オイセルング』は出すと、即ち『力を出すこと』の義であります。我々人間は勿論、天地間の物は夫々に力を持つて居ります。力は之を出さなければ用を爲しません。ソコデ天地間萬物の存在は此力を出すことによつて維持せられるのであります。力を出すとは、潛勢力を現勢力に變ずることであります。生物に於て殊に人間に於ては、體内に於て熱を作り出し、之を運動に變化する行程が即ち力作となるのであります。獨逸では『アルバイト』と云ふ語を獨り人間の力作にのみ限らないで、獸畜の『アルバイト』機械の『アルバイト』等とも申しますのは、つまり力を出すことを凡て『アルバイト』とするからであります。然しこれは寧ろ廣く用ひ過ぎた場合で、獨逸語でも『アルバイト』と申せば、主もに人間の勞作を指して申します。以下勞働と申すのは、人間にのみ限つて申すこゝ御承知を願ひます。人間以外の勞作までも取り入れると一貫した議論が立たなくなりますし、又た經濟學に於て斯くする必要は全くありません。否人間の勞作のみに限つて論ずるの必要は却つて甚だ大であります。

苦痛とは主觀的の感情

然し自然的方面から見た力作（クラフト・オイセルング）は、凡ての生物に共通な道理に基くものでありまして、就中動物の力作と人間の力作とは其間に共通な點が甚だ多いのであります。唯其力作が苦痛を